

俺たちの世界は間違つ
ている。

ゆきわぎ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小さい頃からある理由で格闘術を始めた比企谷八幡がやがて、戦争の世界に足を
突っ込んで行くお話をします。

1

次

第1話	目	次
済崎	よろしくおじさん	日常の夜
家族	特訓開始	影喰らい
特訓開始	どれーにんぐ	まるで別人であるが如く
どれーにんぐ	時は経つ	テニスの逆襲者
時は経つ	パンドラ	決着
パンドラ	殺人	調べ屋
殺人	知ること	タッグ
知ること	はいすぐーる	接敵
はいすぐーる	にゆうぶ	派手好き
にゆうぶ		なぜ?
		来る。来てる。
50	47	くつきー
47	42	日常の夜
42	37	影喰らい
37	32	まるで別人であるが如く
32	28	テニスの逆襲者
28	22	決着
22	16	調べ屋
16	12	タッグ
12	7	接敵
7	4	派手好き
4	1	なぜ?
1		来る。来てる。
166	153	くつきー
153	147	日常の夜
147	139	影喰らい
139	130	まるで別人であるが如く
130	117	テニスの逆襲者
117	101	決着
101	94	調べ屋
94	86	タッグ
86	80	接敵
80	72	派手好き
72	63	なぜ?
63	57	来る。来てる。

愛人達の蜘蛛

”凶弾”

最愛にして唯一の家族

不穏

小町

総武高校人殺しサークルのみなさん

川崎

351

バーと獣

366

底の住人達

340 330

害虫

340 330

かつての出会い

340 330

霊長類最強の女子高生

340 330

爆ぜる。

340 330

恋の爆弾魔

340 330

生の意味、死の価値

340 330

最後の銃声

315 305 293 279 271 257 251 234 213 203 194 185 177

第1話

こんな世界間違つてると、ずっと思つてきた

何が間違つてるとか、具体的にどう悪いとかはまだその頃は分からなかつたけど。

ありのままを受け入れてくれない世界が、多数派にいることを強要する世界が。良すぎず悪すぎず、目につかない程度を強要する世界が嫌いだつた。

俺はずつと弱者だつた。一番早くから気づいていたさ、駆けっこも早くないし、テストの点もまあまあだし、何よりうまくみんなと仲良くできない。

致命的な欠点だ、まあそれはいい、一人でいることは悪いことじやない。視界に映らなければ何かされることはない、せいぜいあいつ陰キヤじやねとか、できるやつをさらには引き立たせるモブにいつの間にかなつてているぐらいで、大抵みんなにも迷惑からなはりし、なんなら誰にも気づかれず落ちてるゴミを拾つて捨てる繰り返し、みんなの教室を少しづつ綺麗に保ちづけ、最後にはゴミタニ君の称号をいただくまである。直球すぎんだろう捻れ、普通にバレてるし、一時期ヒキタニ君はゴミで育つという噂が立つたほどだ。小さな親切心の結末がこれである。陰キヤのレツテルは善行をかき消すらしい。

そんなこともあってこの世の中は優しさ親切は必ずしも報われないと気づいてからは、もつとひとの目につかないように努めた、やることだけをする様に、やるべきことをできるようにな。

しかし、俺にも怒つたりすることはできたようで、まあ自主的にごみ拾いとかする少年だ、人並みに正義感とかはあつたんだろう、目の前で殴られ続ける同い年くらいの少年を放つて置けなかつた。べつに格闘技をやつたりしていたわけではなかつたけれど、とにかく殴つてたやつらにむかつて突つ込んでいつて殴りかかつた。

そつからどうなつたかはよく覚えてない。まあ、よくみたら相手は年上みたいだつたし体も大きかつた、しかもふたりだつたから勝てるわけもない。気がついたら周りには誰も居なかつた。殴つてたやつも、殴られてた奴も、夕方で人のいない公園に大の字に倒れていた俺は、よく覚えてないけど確か守りきつたはず、と先ほどの戦い（一方的）を振り返り、ニヤアと痛む顔面を無理やり笑みの形に捻じ曲げる。

誰もいなのは仕方ない。感謝されたくてやつた訳ではないし。ただただあの光景を見続けなくななかつただけだつた。弱者だからと、みんなと違うからという理由で、いじめてる当人たちだつてなんとなくでいじめはじめて。

そんな理由で誰かが苦しんでいい訳ないと、そう思つてしまつただけだ。

だから今流れる涙は久しぶりに怪我して痛くて流れてるだけだ。

一人でいることをおもいだして、むなしくなつたりしてゐる訳ではない。

よく分からぬ涙を止めようと砂まみれのまま手で顔を覆い隠そうとした時、頭の上から声がした。低く、唸るような声が。鋭く、脳を揺さぶるような声が。

「ようガキ、おまえ、なかなかやるじゃねえか。」

これは、小学六年生から、その後の俺の人生のすべてを決めた運命の出会いだつた

済崎

「ようガキ、おまえ、なかなかやるじゃねえか。」

唐突にかけられた声に驚き顔を上げると、そこには、さつきまでは絶対にいなかつた筈の男がニヤニヤ笑いながら立つていた。

身長は日本人にしてはかなり高い方だろう180後半はありそうで、軽く癖のあり、すこし白髪の混じった頭髪は外国人のモデルみたいにバランスよく流れ、ほりが深く、鼻筋の通つたルックと相まって、大人な渋さを売りにした俳優のようだつた。服装は高価そうなダークスーツに紺色のネクタイ。よく見れば右耳に三つ、左耳に二つピアスが付いている。

しかし、やはり何より特徴的なのは目だろう。俺も目が腐つていて、相手に威圧感を与えると担任の先生に言われたことがあるが（実際には、もう少しオブリートに包んでいたが要約するとこんな感じだつた。）、この男の目は種類が違う。刃の様に鋭く、全てが見えているかのように静かだつた。その辺のガラの悪い奴らの、自分が強いと勘違いして、周りに敵意を撒き散らす神経質な猿の様な目ではなく。自分が強いと知つている猛禽類の様な目だつた。

「かはは、にしても、最近の中学生は加減を知らんな。なかなかひでえぞおまえ。」

全身痛すぎたのと、全く見覚えのないおっさんに話しかけられたので、咄嗟に返答できず、それでも何か言おうとした口がぱくぱくと動く。

「あー、あー泣くな、男前が台無しだぜ。まあ、止めなかつたのは悪かつたよ。お前がどんだけ粘るのか見たくてな。」

「…は、はあ？」

何とか絞り出した声は、我ながら返答なのか呻き声なのか判断がつかなかつたが、男には聞こえたらしく。やつと帰つてきた反応に、嬉しそうに笑みを深める。

「どつかで逃げるか、立ち上がるなくなるかと思つたが、最後までくらいついてたなー。最終回ののび太君かお前は。 実はあの虐められてた子供は、未来から来たアンドロイドとか?」

「何言つてんの、おじさん。」

讃えてるのか馬鹿にしてるのか微妙なところだが、本当にこのおっさんは何者なのだろう。(心の中ではおっさんと呼んでるが、流石に面と向かつて言うのは、憚られた。)「む、おじさんとは何だ、いや、32歳じやどう見てもおじさんか…。時が経つのは早いな…。」

「だれ、なの。」

なんか遠い目をしだしたおっさんに、途切れ途切れに誰何する。

「んー？俺？俺は済崎。済崎啓介だよ。お前はなんてーのさ。」

意外にあつさりと名乗られてしまつた。スミザキと言つていたがどう書くのだろうか、住崎？そして、俺自身の名前も聞かれてしまつた知らないおじさんに教えてもいいのだろうか。

「ん？おいおーい、人に聞いたんだから自分も名乗んなきやだろ？」

「え、あ、比企谷八幡です。」

俺もあつさり教えてしまつた。いきなり声低くなるんだもん。敬語になつちやつたし。いやそれで正しいんだけども。

「ふーん、八幡、八幡かー。おもしれえ名前だな、わるくない。」

確かにいい名前とは思つたことはないが、おもしろいだろうか。その後も、ふんふんと何か悩む動作をし、やがて、『そうだ、九州行こう。』ぐらいの気安さで俺に向かつてこう言つた。

「八幡よ、俺の弟子にならんかね。」

「…は？」

よろしくおじさん

「八幡よ、俺の弟子にならんかね。」

「…は？」

「こいつはなにを言つているんだと目を見開く。（今気づいたが左目が開ききらない、まぶたが腫れているのだろうか。）

「かはははは。いやあ、さつきのお前の喧嘩見てたらなんか気分上がつてな。こんなに氣合いのはいったやつが強くなつちまつたらどーなんのかとおもつてな。」

「こいつは、何となく強そうと言うのはわかるが、他人もそうできると確信しているのだろうか。」

「別に、喧嘩したいわけでも。喧嘩がうまくなりたいわけでもない。」

「ほーん。強く、ではなく。うまく。まあ、そこはいーや。なりたくないって？」

「わざわざ、練習してまで、やるようなことじゃない。」

「というか、喋るのも疲れて來た。ねむい。」

「小学生にしちゃあ、悟つた考え方だ。ふつうなら、結構食いつくと思うんだがなあ。ベストキッド的な。」

まあ、俺が見るからに怪しいのもあるかなー、と男は笑った。

「まあまあ、もうちよい話を聞いてからでも遅くは…、て、あら？」

しかし、その言葉を最後まで聞く前に、俺の疲労は限界に達したらしい。

「んあ、んん？」

「お、起きたか。」

眼を開けると、そこはおっさんだつた。

「ひつ、たべないでください！」

「たべないよ。」

やべえ、おっさんに喰われる。と、体を飛び起こして逃げようとするが、頭を押さえられて、失敗する。

「おいおい、俺の膝枕なんてお金積んだつてなかなか体験できねえぞ？もうちよいゆつくりしていけよ。」

「いやいや、本当にお気遣いなく家も心配してるのでこれで。」

何とか拘束を解こうとするがそこで自分の体の痛みに気づく。

(あー、なんか思い出してきた。確か中学生に絡まれてるタケル君見つけてそれで…)
「よー、思い出したか。まあ、無理すんな。そんままでいい。」

「すいません、どんくらい寝てましたか。」

焦つて周りを見渡すが、辺りはまだ明るい。（今が夏のはじめというのもあるが。）そんなに時間は経つてないはずだ。

「んー、30分ぐらいだ。回復がはやいな。」

それを聞いてほつと胸を撫で下ろす。

「そーいえば、あの虐められてたのは、知り合いか？ 実は親友だつたとかか？」

一応知り合いではあるが、話してしまって良いものか迷ってしまう。すこし考えた末に。俺が起きるまで見ていてくれた恩があるので、話すこととした。といつてもあんまり情報はないが。

「さつきのは、タケル君です。同じ学校のひまわり学級の子で、多分、あの中学生の服にジユースとか零しちやつたんだとおもいます。タケル君自身とは俺は直接話したことかないんですけど。」

なんならほんと誰とも話した事ないまである。

「話したこともない人の為にそこまでやつたのか。」

男は驚いたように眼を見開く。

「別に、タケル君の為にやつた訳じやないです。ただの自己満足ですよ。」

「自己満足でも、その結果に誰か助かつてなんら立派なもんだ。」

「だがまあ、弱けりやあ、自分すらも満足させきらないがね。」

男はそう言つて挑発的に笑つた。

「八幡よ、今回はお前の根性で追い返せたけど、次もそうとは限らないぜ？あの中坊どもはガラ悪しが、それでも日本の義務教育でもたらされた道徳心をほんの少しでも持つてる。だけど、世の中にはそんなもん欠片も持つてない奴らがうじやうじやいるんだぜ？」

「そんな奴らと関わつたりしないよ。」

「いや、お前はいつか必ず出会う、そしてその時、お前は我慢できない。きっと眼をそらせす。首を突っ込んじまうよ。」

男はそう断言した。確信を持つて。まるで見てきたかのように。そして俺は、その言葉にすぐには反論できなかつた。

「お前は強いよ。きっと、弱い人が苦しんでる時、見て見ぬふりをできない。たとえさつきのより酷い状況で、勝てる見込みがなくとも。」

男はそう言つて俺の頭をなでた。その手はごつごつしてて。それでいて熱かつた。気付けばあたりは赤くなつていて。普通の家庭なら親が心配する時間だろう。だが俺はその時、そんな事は頭になくて。ただ、男の目を見ていた。

「さあ、どうする。お前の人生に、きっと強さは必要だ。」

それからほんの少し考えて、俺は男に答えを出した。

家族

「親が心配するぜ。」と言う言葉を最後に、俺は男と別れて俺は家路についた、いつもからしたらかなり遅い時間だが、両親は妹の小町にかかりつきりだ。男はああ言つていたが、俺の事は大して気にはされまい。怪我だらけの顔も、男に貰つた帽子で隠している（何故かかばんに入つていた。）。聞かれても転んだといえばそこまで深くは来ないだろう。

「ただいま。」

少し小さめの声で帰つてきたことを伝える。このまま静かに部屋に入る。夕食の時は、まあ仕方ない。階段落ちしたと言つて…。

「八幡？ 遅かつたじやない。なにしてた…。」

リビングでエプロン姿の母さんに出会つた。母さんは怪我を見てびっくりしたのか、固まつているが冷静に対処しよう。

「あー、ちょっと転んで、たまたま会つた人に手当をして貰つて…。」

「誰にやられたの？」

「…え？」

かなり食い気味で、今まで見た事ないような、真剣な顔で。しゃがんで俺に目線を合わせ。俺の肩を掴んでそう聞いてきた。

「いや、本当にそこら辺で転んだだけで…」

「そんなわけないでしょ。大丈夫だから正直に言いなさい。」

予想外に突っ込んでくる。

「母さん、これは…。」

「八幡、確かに私も、お父さんも、いつもはあなたをほつたらかしてるかもしないわ。でも、自分の子供をこんな目にあわされて、平氣でいる親はいないのよ。」

母さんは、俺の目をじっと見ながらそう言つた。諭すように。でもその奥にある怒りを隠そうとせずに。

「…母さん、確かにちよつと何かはあつたけど。それは自分で何とかしたいんだ。」

母さんの、真剣さに押されつつも、しつかりとした意思をもつて、俺はそう返した。すると母さんも、俺の目をじっとみて。静かに口を開いた。

「…おいで。」

母さんは、そういうと、俺を優しく抱きしめた。

「私達が小町ばっかり見てた間に、随分かつこよくなつたね。」

母さんに抱きしめられるなんて、久しぶりだつた気がした。何故か、いきなり鼻の先

がつんとしだして、目から涙が溢れ出した。

俺は、この時。自分が親に愛されていた事を知つた

その後帰ってきた父さんとも、似たような会話があつた。違つたことは、母さんより、怒りを露わにしていたことだろう。スーツのまま、相手の家に話しに行くと肩をいからせていたが、母さんの「八幡は、大人の階段をのぼつたのよ。」という言葉に、少し固まり、次に俺をじつと見て、むう、と唸つて食卓についた。すると、小町が二階から降りてきた。

「あ、おにーちゃん、おとーさん、おかえ…」

と、そこまで言つて、俺の顔を見て固まつていた。

「小町、ただいま。」

——おにーちゃん、どうしたの?——

ている。

「あー、おにーちゃんは、ちょっと頑張つたんだよ。」

眉をもとにもどして、

「…、そつかあ。まあ、ほどほどにね？」

そう言つて小町は俺の頭を撫でた。少し踵を浮かせて、背伸びしながら。

「「天使か？」」

小町は、家族は家族でも、妻の対応だった。

特訓開始

翌日の放課後、俺は男に指定された空き地に来ていた。ここには不法投棄されたゴミが山と積まれており。大小さまざまなガラクタで囲まっていた。

「よう、来たな」

そう言つていつからいたのか済崎さんが現れた。ジャージ姿である。あでいだすだ。
「怪我の具合はどうかね。学校では何か言われなかつたのか。」

「みんなには引かれたぐらいで。先生には色々聞かれたけど、階段から落ちたでござり押しした。」

「それでなんとかなるのか…。」

なんか済崎さんも引いてたけど気にしない。世の中なんとかなるものである。

「済崎さん、それでなにするの。」

「ん、あー、言い忘れてた。外で俺を済崎と呼ぶのはやめなさい。」

「?どうして?」

「どうしてもだ。」

「んー、ならなんて呼ぼう。」

「…師匠？」

「…ふむ。」

そう呼ばれた済崎さんは、何か噛みしめるように顎に手を当てた。

「もう一回呼んでみろ。」

「？師匠。」

「ふふ。」

なんか気持ち悪い感じで笑った。

「師匠かー、ふふふふふ、うん、いいな。」

なんかキモかつた。ひょっとすると、この男は、唯の変態で、俺を騙して攫うつもりかもしねえ。

「ん？までまで、何処行くんだ。」

俺が静かに距離を取ろうとしている。済崎さんはこつちに気付いた。

「ああ、そういうえば、俺がお前の師匠になり得るって言う証明を見せてなかつたな。うーん、どうするか…。」

そう言うと、師匠は、また思案顔になつた。

「ふむ、八幡よ。強いとはどういう状況だと思う？」

「…素手でコンクリート割つたり？」

「はつは。確かに素手でコンクリートが割れる奴が居たら誰がどう見ても強いと言えるだろうなー、」

そう言いながら男は、手前にあつたコンクリートの土管に向かつて歩いて行き。右手を引いて思い切り殴つた。

「…はつ？」

いきなりなにをと言おうとした時。その土管に縦向きの線が入る。それがコンクリートにできたヒビだと気付くまで、少しの時間を要した。

「なつ、え？」

「だがまー、ちげーな。そんな簡単なことじゃない。」

簡単なこと?コンクリート割るのが?

「コンクリート割るようなパンチがあつても、あとそうだな。もの切れる様な蹴りがあつても?」

今度は、立て掛けられていた脚立にむかって回し蹴りを放つ。

すると、ガゴツという音とともに蹴られた部分だけが綺麗に横にふつ飛び、一瞬宙に浮いた上半分が落つこちてきた。

パンチも蹴りも、素人の俺から見ても綺麗な形だった。パンチは今まで見た、どのボクサーより、早く綺麗だつたし、蹴りも前にテレビでやつていた、達人らしい人の型よ

りなお美しかつた。しかし、それでも人間が素手でコンクリートを割つたり。金属製の、アルミとはいえ、脚立を足で切つたりなんかできるとは思えなかつた。

「不思議そな顔してゐるな。こんなのがりえないつて。でもこのくらいのことをできる奴は結構いっぽいいる。練習してコツさえ覚えれば誰でもできるからな。」

「いやいや、絶対無理だから。」

寧ろそんな簡単にできてたまるものか。世紀末だろ。

「できるさ。できると、心から信じられればな。」

「気の持ち様でできる様なことじやないだろ。」

「まあ、確かに心構えだけじゃできないけど、信じられなければやる瞬間に頭が勝手に身体にブレーキをかけるのさ。出来つこない。無理するなつてな。」

男は、そう言いながらポケットから煙草を出して、火をつけた。らつきーすとらいく？と書いてある。

「八幡、どんなに凄い技術があつても武器の前では大抵無力だ。間合いが命の格闘技は、どうあつても10メートル先の銃を構えた奴の前では不利と言わざるをえない。引き金を引かれる前に10メートルを詰めるのは難しいからな。」

ふ一つ、と済崎は白い煙をはいた。

「ならどうやつて勝つ？腕つ節ならコンクリートを割れる自分が強い。でも、間

合いの外から銃を向けてくる相手の方が勝つ確率は高い。つまり、銃持つて奴の方が強い。それがたとえ。人生を格闘技に捧げた男と。昨日初めて銃を持った男とでも。」
「言われて俺は考える。確かにどれだけ肌に粗塩かなんか擦り込んで鍛えて硬くしても、結局鉛玉には、歯が立たないだろう。それを撃つ人がたとえ、子供でも、ちゃんと狙つて撃てさえすれば人は簡単に殺してしまう。そもそも銃とは、そう言う武器なのだ。

「強さとは、その人間の総合性だ。色々な戦いで安定して勝利を収めるには、色々な事に精通しなきやいけない。一見すると戦うのには関係ない様な事でもな。」

「立ち会つて、お互に武器を持つて、もう殺し合うしかないとつて状況でも、こんな下らないことが役に立つたりする。」

右手に済崎さんは三枚のカードを持った。その絵柄を俺に見せてくる。ハートの3と、スペードのジャック、そしてダイヤの6だった。

「覚えたか？んじゃあほい、一枚引いてみろ。」

今度は、表を下に向けて持つて、カードを差し出してきた。取り敢えず言われた通りにする。

クローバーの7だった。

「…!？」

「はつはつはつ、驚いたか。まあ、タネは簡単なんだけどね。こんな安っぽい手品でも役に立つ時が来るのさ。」

いや、すぐかつたけど、これが?という顔で済崎さんを見る。

「何ができるから強いとか、これが出来る奴はやる奴だとかは無い。もちろんどんな時も諦めないやつが一番強いなんてこともありえない。」

「強さとは思考の事だ。どんな時も合理的に、勝てる方法を見つけられる奴が強いんだよ。」

「これからお前に授けるのはそういう脳みそだ。もちろん身体も、俺が出来ることをできる様になるぐらいには鍛えるが、一番には、強いと言う思考を植え付ける。」

「戦略戦術戦闘戦技。格闘話術知識まで。その全てをひつくるめて、俺たちは“戦闘術”と呼んでいる。」

そこで、済崎は、煙草の火を消し俺に向かってにやつと笑った。

「どうだ、ワクワクしてきたり。」

どれーにんぐ

「さて八幡。はじめに、お前はまだ小学生だ。ガチガチに身体を鍛えれば成長に悪影響が出てしまう。よつて、筋トレは少なめ、走り多め、技術マシマシで行く。」

トレーニング内容を説明すると、師匠が切り出したのは、そう言つた内容だつた。

「具体的には、ランニング4キロ、腕立て伏せ30回を3セット、腹筋を35回を3セット、背筋35回を3セット、懸垂3回を3セットだ。」

なんだか、すごいんだかすごく無いんだかわからない数字だ。

「まあ、やつてみな。」

そう言つて師匠は、いつもの様に笑つた。

（

「ふんつ…、ぐぐぐぐ…」

「おらおらー、まだ1セット目だぞー」

そして、訓練は、始まつた。

「あとじゅつかーい。」

「うぐ…、がああああ！」

ランニングはまだ良かつた、確かにきつかったが、ペースも落としてくれたので、へ口へ口になりながらも走りきった。

しかし腕立て伏せが鬼門だった。手を肩幅に開き、頸が地面につくギリギリまで下げて、肘が入るまで上げる。これを、しつかりやると、驚く程腕に来る。

「うつ、がつ！」

「ありや、」

あと8回のところで腕に力がはいらなくなつた。走つたのもあって、腕に血が回つて、る気がしない。

「かはははは。まあ、最初はこんなもんだろー。さあ、2分休んで次は腹筋だ。」

そつから、腹筋とかもしたが、懸垂で死んだ、一回も出来なかつた。

「まあ、落ち込むな。最初はみんなこんなもんだ、今日のは体力テストみたいなもんだし
な。」

「見込みなしですか…。」

「いや、除名処分とかにはしないから。元気出せって。」

見た目完全にアウトローなのにいやに優しいな師匠。

「ほら、次はいよいよ格闘技だぜ！」

師匠は、そう俺を元気づける様に言つた。十分休憩を貰つたので、所々痛いが身体は動く様になつていたので、頑張つて立ち上ると、師匠は、満足そうに笑つて。

「よし、んじやあまつは、序の序、拳の作り方だ。刃牙でもやつてたろ？まず小指からおりたたんで…、次は人差し指からにぎりこんでいつて、最後は親指で締める。」

俺の手に師匠の手が添えられ、拳の形を作る。

「因みに刃牙つてなに？」

「む、刃牙を知らんのか、強くなりたくば読め、だ。」

刃牙については、よくわからなかつた。漫画なのかな。

「ん、そうだ。これが拳。あらゆる格闘技の基礎だ。でもまだ、完成形じやない。作り方だけ知つてたつて、今のまんま殴つたら怪我をしてしまう。」

師匠がジャージの袖をまくり、拳を作つて見せた。

「これが、それなりに鍛えた拳だ。触つてみてもいーゼ。」

言われて俺は、触つてみる。

前腕は見るからに筋肉が発達していて、大小様々な傷がいたるところにあつた。俺には名前は分からぬが、保健の先生とかなら、ひとつひとつ指をさして筋肉の名称を言えるだろう。それくらいに、たくさんの筋肉が盛り上がり、たくさんの筋を作つていた、決して太くはないが、高密度に圧縮され、鍛え上げられた、武闘家の腕だつた。

手首も硬く、ビクともしない。拳自体は、腕よりもさらに傷だらけで、ゴツゴツしていた。これまで見てきた大人達にこんな腕の人は当然だが一人もいなかつた。この人はどんな人生を歩んで來たのか。どう生きたらこうなるのか。色々感じたことはあつたが、俺の中に確かにあつたのは、こうなつてみたいという、憧れだつた。

「俺の拳と、お前の拳の一番の違いは、相手に当たる接地面だ。俺の方が平たいだろ？ あとは、手首の筋肉だな、親指の付け根の更にしたの手首らへんにボコつとした筋肉があんだけ？ これが、しつかり手首を固めてくれるんだ。この二つは拳で腕立て伏せしたり、普通に色々殴つてると出来てくる。毎日の積み重ねだぜ。」

あの腕立てを。拳で…？

俺が目の前を覆う絶望に戦慄していると。

「心配すんな、すぐできるさ。」

やはり、師匠は軽快に笑つた。

「さて、八幡。こつから更に大事なとこだ、拳つつーのは、手つていう万能な器官が、殴るつていう、たつた一つの機能以外全部捨て去つた形態だ。」

「拳には、殴る以外の用途がない、一見単純に感じるが、意外とそうでもない。なんせ、何百年と人類は、人を殴る事に頭を悩ませて來た。どう殴るのがいいか、早ければ早いほどいいのか、タイミングは？ 当てる角度は？ どこに力を入れる？ 腰から打つか、目線

の高さから打つか。場面によつても殴り方は多種多様だ、素早く打つ、重く打つ、まつすぐ打つ、カーブさせて打つ。」

「いいか八幡、これから教えるのはただの基礎だ、常に考えろ、どう殴るのが最適か、基礎をどうやって応用するか。この先お前が習う技の全ては、殴ることを前提にする。殴らない技ももちろんあるが、これが一番単純で、わかりやすく。それでいて突き詰めやすい命題だ。」

どう殴る。お前の武術家としての人生に、こいつはいつまでもついてくる命題なのさ。」

そこまで言つて師匠は俺に正対する。

「八幡、足を肩幅にひらけ、そんで足先は平行。そうだ。次は右脚を引け、少し引きすぎ、そう、そこだ。んで膝を軽く内側に絞りながら腰を落とす。そしてほんの少しだけ踵を浮かす。少しだ、紙が一枚入るくらい。今度は手だ、拳を作れ。うん、そう。左拳の頭が左目の前右拳は、右の頸の下だ。脇を締めて、少し首をすぼめる感じだ。」

師匠は、はつきりと、それでいて語りかける様な声で俺に構えの説明をする。師匠は説明しながら、自分でも構えを作つている。

俺と師匠は向き合つていた。俺は精一杯真似したが、到底届かなかつた。師匠の構えは完璧で、戦うために向き合つてる訳じやないけど、絶対に勝てないと、理解できた。

この日のこの瞬間。昨日の様に赤くなつた景色。この場所で師匠に初めて教わつた構えが、この先の俺の戦い方の、原点となる。

時は経つ

特訓は、驚くほど効率的に行われた。俺がギリギリこなせるぐらいのメニューで、毎日色んな部位をきたえた。格闘の訓練や、戦闘に関する知識も、とてもわかりやすく教育された。

「八幡、筋トレは、鍛えてるところを意識しながらやってみろ。どこに一番キてるかとかな。」

「柔軟は大事だぞ、だがトレーニングの前にやるのは間違いだ、全部終わつた後に、身体を柔らかくするトレーニングとしてやるんだ。これは毎日やれよ。」

「相手と向かい合つた時は自分の立ち位置に注意しろ、相手が左構えなら相手の左前、特に前の手の更に外側に右構えで構える、これだけで有利に戦えるんだ。」

「蹴り技は、此処ぞとゆ一時の必殺技だが、素早く打つ練習をしとけばジャブみたいな使い方もできる。自然に構えながらも後ろ体重で前足をいつまでも出せる様にする。前蹴りは、相手の虚をつくのに最適だぞ。」

「ナイフの握り方にはいろいろある。刺すための握り、切るための握り、逆手に持つたり、指で挟んだりな。刺す時には、普通に握るより親指を鐔につけて親指から手首まで

を真っ直ぐに持つたりする、逆手はそのままパンチの要領で振り抜けばガードされない、あと組み付いた時にも刺しやすいな。状況に合わせてすぐに持ち替えらる様に練習しとけ。最初の内はこれな、刃を潰してある。そんな顔すんな、刃つきはまだ早い。」

「弾丸が身体に当たると大変なことになる。弾の大きさに入つて弾の大きさに出てく訳じやない。身体に入つたら中で真空ができる。中身がズタズタになる。骨に当たつたりしたら最悪だ、碎けた骨が身体ん中で飛散しちまう。ちゃんと治すのは困難だ。弾種や、口径によつても違う、先が丸くなつた弾や、尖つた弾。めちゃくちゃでかい弾とかもある。音で弾種や距離を聞き分けられるようにできるといいな。」

「これはワイヤートラップだ、今はもうセンサーとかが主流だけど、そもそもいかない状況も多々ある、バレないような仕掛けとか、爆弾を指向する方向にも注意しろ。」

この男は本当に何者なんだろうか、軍人だつたりするのだろうか。

「かはははは、まあ傭兵に近いな。今はもうあんまやつてないけど。」

「なんだかかっこいい気がした。」

（

少しずつ俺の身体は変わつていつた、日常生活の端々に武術的な動きをするようになつた時にはこう言われた。

「いー感じだな、でも学校とかでは絶対に見せるな。俺が教える事は、見せびらかして

いいようなもんじやない。」

（

3年ぐらいの月日が経つた、師匠はたまに来れない日もあつたけど、俺は一応毎日訓練した。単純に強くなる感じが好きだつたのだ。

組手とかもした、怪我して帰る時もあつたけど、親は心配そうにはしてたけど絆創膏をくれたりするだけだつた、なんとなく、何か感じとつているらしく、よく頭を撫でてくれた。小町は可愛かつた。

毎日が充実していた、格闘の技術も、ナイフを含めてそれなりの練度になつた。すると。

「八幡、ほら」

いきなり師匠は、俺にナイフをくれた。

「お前はそれなりに強くなつた、だからこれをやる。いいか、これは武器だ、もちろんナイフはいろんなことに使えるが、人を殺す道具だ、人を殺す権利は誰にもないが、それでも人は人を殺すことができる。殺さずにいることもできる。なんのために殺すか、誰を生かすか。人を殺してもいいのかどうか。常に良く考える。そして殺すなら手を抜くな、命を奪う重みを忘れるな、人を殺す事は、殺される可能性を孕む事を忘れるな。命は、軽く扱わっていいもんじゃない、八幡、これは戦うのに一番大事なことだぜ。」

言われて俺は不安になつた。そんな重いものを背負いたくはない。

そう言うと師匠は破顔した。

「ま、そんな重く捉えんな、武器持つ時の心構えみたいなもんだ。さ、続きをやんぞ。」
もらつたナイフは、刃渡り13センチくらい、刃先の方が少し重い。デザインはオーソドックスなタクティカルナイフだつたが、刃の根元に『慶』と書いてあつた。

「あ、忘れてた、それ道端でぶら下げてたら捕まるから隠しとけよ。」

俺はナイフを大事にかかえ、はい。と返事した。

この二ヶ月後、俺に第2の転機が訪れる。俺の少し特殊ではあるけど、まだ『普通』の域だつた人生は、その日から、大きく逸脱するのである。

パンドラ

「あなたが比企谷八幡君？」

中学からの帰り道、そんなふうに俺に声をかけて来たのは、グラマラスでセクシーな30歳前後の女の人がだった。

中世の貴族みたいな服装で、胸元は大きく開いており、否応なく人の目線を吸い寄せる。日傘を差して艶めかしく笑うその人からは、説明できない恐怖を感じた。この人は関わっちゃいけない。

「人違いますすいません、親が心配してるのでこれで。」

「待つて」

瞬時に判断し、身体を切り返して離脱しようとしたが、動き出しで肩を抑えられてしまった。

身体から嫌な汗が出て来る。まだまだ訓練中とはいえ、女人に片手で抑えられるような鍊成はしてこなかつたつもりだつた。

「まあまあ、怖がらないで？おねーさんかなしいわ。」

「いえいえ、本当に大丈夫ですか、用事あるんでこれで。」

一刻も早くここを離れなくては。絶対師匠がらみだろこれ、他に心当たりがない。

「なあに？ 啓介から何か聞いてないの？」

ほら名前出てきた。

「：何者なんですか。」

ようやく抵抗をやめた俺に、その人は満足そうに。

「私はカトリア・イーストレイク、啓介とは仕事仲間よ。突然だけど八幡君、あなたに仕事を頼みたいの。」

その人はそう切り出した。

（

あれやこれやと言うまに俺はお洒落な喫茶店に連れてこられた。残念ながらサイゼではない。

「あなたにお願いしたいのは、この住所にいる男達を無力化すること、生死問わず。捕まえてもいいし殺してもいい。ただし逃したら失敗。その時は、警察とかに追われても助けないわ。」

そして唐突に”仕事”的話が始まつた。

「いやいや、ちょっと待つてくださいよ。やるとか言つてないし、師匠からも何も聞いてないし。生死問わずとか言われても意味分かんないんですけど。」

「師匠、ねえ？」

カトリリアさんは師匠という言葉に少し眉をひそめる。

「…あの？どうかしました？」

「ふふ、なんでもないわ。いい？比企谷君、遅かれ早かれいつかあなたは仕事を受けることになるわ。今のうちにこの簡単な仕事で練習しておくべきよ？」

「…なんで、そんなこと。」

「なぜって、それはあなたが『済崎』の弟子だからよ。」

カトリリアさんは当然のようにそう言つた。

「…本当に何も聞いてないのね。彼はどういうつもりなのかしら。」

済崎とはなんなんだろうか。師匠とは何者なんだろうか。

「八幡君、彼はあなたに人を殺す事について話さなかつた？」

あの、ナイフをもらつた日を思い出した。

「もうあんまり時間はないわ。貴方は答えを出さなくてはならない。今日貴方に頼むのは、本当に簡単な仕事よ。馬鹿なガキを締め上げるだけだからね。でもこれは貴方にとつて、とても意味のある事だわ。」

言われて俺は考える、でもそんなにいきなり言われても何も出てこない。

「ちゃんと報酬も出す。貴方は初めてだから、んー、二百万円くらいかしら。安いなんて

言わないでね。済崎の弟子と言えど仕事の経験もない中学生に払えるのはこのくらいよ。」

それを聞いて俺は心臓が止まるかと思った。二百万で、安い？ どんどん不安になつてくる。俺はひよつとして、かなりヤバい人達と関わつてしまつているのではないだろうか。

「それで、どうする？」

俺は家で服を着替えていた。外は喫茶店を出た辺りから雨が降り始めていた。夏特有の激しい夕立は、俺の心を表してるようにも思えた。

前金よ、と言つて喫茶店の会計を済ませてくれたカトリアさんは、啓介には私から言つておくから、と何処かへ行つてしまつた。

黒いズボンに、黒いシャツ、その上にまた黒いパーカーを着て師匠に貰つたナイフをシリーズ（さや）に入れて、背中側の腰に横向きに入れれる。

家からくる時にはコンビニで買つた安いポンチョを羽織つた。

母さんに、コンビニに行つてくると言つて家を出る。中学進級の時に親が買つてくれたマウンテンバイクに跨り、出発する。

荷物は黒いアサルトリュックに、縄と特殊警棒を入れてある。全部師匠がくれたもの

だ。

8キロほど走って目的地につく。夕方以降は、誰も近づかない小さな山で、奥の方には、柵に囲まれた小屋がある。

私有地と書かれた柵をよじ登つて超える。センサーがあるわけでもなければ、鉄条網すらない。

小屋に近づくほど帰りたくなつてくる。不安で心が一杯になる。なんでこんな事を引き受けてしまつたのだろうか。お金に目が眩んだ?いや、一番は、師匠の世界に近づきたかったのだ。

小屋まで10メートルを切つた。そこでくぐもつた声と、皮膚がぶつかり合う様な音がしだす。

窓は全て布で覆われている。俺は音を立てないように。扉の前まですすむ。

この扉を開けてはいけないと理性が言つている。知つてしまつたら、見てしまつたらもう元の自分には戻れない。

中から小枝を折る様な音がした。その後に、男達の生理的嫌悪感を引きずり出すような笑い声と。誰かが暴れる音がした。

俺はドアノブに手を掛けた。

中にあつたのは、地獄だつた。

殺人

「…あん？ なんだおまえ。」

中は、薄汚くて、排泄物や、吐瀉物の匂いが鼻をつく。甘つたるい匂いは、麻薬だろうか。汗や性交の匂いも混ざり、立っているだけで正気を失いそうだつた。中にいたのは男5の女1人。皆裸で、女性だけは脚を小屋の柱につながれている。よく見ると全身に痣があり、左手の指は、おかしな方向に曲がつて腫れ上がっていた。その人は泣いていた。顔も腫れ元がどんな顔だったのかよくわからない。口に巻かれた布には血が滲んでいた。

その時の気分をなんと言いいえば良いのだろう。

こんな景色が、今までの自分の人生と地続きになつていたのが信じられなかつた。しんじたくなかつた。

「こいつなに？」

「さあ？ 知らね、取り敢えず縛つとくか。」

そう言いながら男の1人が繩を持つてこちらに歩いてくる。

「わりーな、今取り込み中だからちよつと大人しくしといてくれや。」

「こいつで童貞捨てさせてやるか！」

「おー豚、一名追加だわ。死ぬんじゃねえぞ。」

限界だった。身体から力を抜き、ゆっくりと重心を下に落とす。“臨戦態勢になつた事”をギリギリまで悟らせない。

男の手が俺の肩に触れた。

「ほら、手をだし…がつ！？」

パキヤツと、卵を落とした様な音がした。ノーモーションで出した金的蹴りは足先から伝わる感触で、期待した効果を与えたことを伝える。大きく前かがみになり、顎を突き出す体制になつた男の喉を、腰から逆手で抜いたナイフで思いつき切り裂く。ボクシングのフックの要領で振り抜けば、刃先の重いこのナイフは、驚くほど簡単に人を裂いてしまう。

「なつ、てめえ！」

仲間を殺された男達は、一齊に俺に向かつてきた。

その時、俺は自分でも驚く程冷静だった。

まず左前から来た男の右ストレートを左手で外側に軽く逃す。そのままボディーブローの要領で鳩尾にナイフを突き入れる。次にその男の後ろから向かつてくる男にぶつけるようにそいつを突き飛ばした。

唐突に来た仲間の身体を男は、手で押し止めてしまう。

今度はナイフを人差し指と中指ではさみ、さつきと同じ要領で首を裂く。もはや握るまでもなく。しなやかにふつた腕から伝わる遠心力で、さつきよりさらに深く男の首が裂ける。

右から男が何か喚きながらバイブを振りかぶっていた。この状況でふざけらるとは、物凄い精神力だ。

俺はそれが投げられるより速くナイフを投擲した。ナイフは正確に男の眉間に命中する。それにしても、あの硬い頭蓋骨を簡単に貫通させるなんて、凄い切れ味である。最後の奴は怯えた様に俺を見ていたが。俺に武器が無いのを見ると、意を決したのか構えをつくる。

男は、雄叫びをあげながら、腕を振りかぶって走つてくる。うるさい。

俺はそいつが間合いに入つた瞬間、首に足刀蹴りを放つ、走つて来たそいつと、俺の分の、ふたり分の体重が乗つた渾身の一撃だ。

ゴキュツと面白い音がする。

男は喉を抑え、かひゅーつかひゅーと変な呼吸を繰り返しながら後ずさる。やがて倒れて動かなくなつた。

とても晴れやかな気分だつた。

満足感だけが心を満たす。

雨の音は、もう聞こえなかつた。

この日俺は、人殺しになつた。

「おい、てめえ、八幡に仕事任せたつてどういうことだ。」

「あら啓介、はやかつたじやない。」

俺は携帯に入つていたメツセージをみて、書かれていた公園に來ていた。用事はもちらんこの魔女にメツセージの真意を聞くためだ。

「勝手にあいつを仕事に向かわせたのか!? しかも1人で！」

「貴方が面倒見た子でしよう？ 心配ないわ。」

「あいつには！ まだ早かつたろ！」

「あなたにしては甘い事を言うのね、その優しさをおねーさんにも向けてくれたらなー。」

カトリアはブランコに乗つたまま、おどけた様にそう言つた。

「おちよくつてんのかてめえ。」

「ふふ、そんなに怒らないで？ あの子なら大丈夫よ。それにあなたもわかつてゐるでしょ？ 済崎に関わつたあの子には、もうあまり時間がない。自分を守る術を持つておか

なきや、覚悟も含めてね。」

言いたいことはわかる。だが、あいつはまだ中学生だったのに。

「あらあら、思つたより気に入つちゃつたのね？あの子、少し生意氣で捻くれてるけど、いい子だつたものねえ？」

そう言つてこいつは覗き込むように首をかしげる。肩にかかつっていた長い金色の髪が滑り落ちる。

「いじめや子供同士の喧嘩に勝たせたいなら普通の格闘技を教えれば良かつたのに、あなたが教えたのは『戦闘術』でしよう？その中身を欲しがつてている人はいっぱいいるわ。あなた一人ではあの子を守りきれない。」

「…お前はなんで八幡を気にかける。」

こいつは間違つても若者の育成に出張つてくるような奴じやなかつた。目的がわからぬ。

「決まつてるでしよう。」

寧ろなぜわからない？とでも言いたそうにあいつはこう言つた。

「面白そุดからよ。」

知ること

人はなぜ殺してはいけないのだろうか。

法律できまつてから?

理由なんかな?

現代の日本人が人を殺してはいけないと想い込んでいるのは義務教育のせいだろう。戦後日本は先進国になるため、国民みんなに高い道徳心や、倫理感を持つていて欲しかったのだろう。

国民それが犯罪は犯してはならないと思つていれば、取り締まらなければいけない事件も減るだろう。何より人が死ぬのは国力の低下につながる。

人を殺さない事は正しいし、当たり前のことだと思う。

でも、必ず人を殺す必要性にせまられる時はある。家族や友人が殺されそうなどき。沢山の人人が殺される可能性のある時。はたまた、殺すしかない様な人間と出会つたとき。

彼は選んだ。殺すことを。殺してでも守る事を。救うことを。

彼は有望だ、いい『済崎』になるだろう。

)

5人の男の死体に囲まれて俺は立っていた。

初めての殺人はあつけないものだつた。

麻薬の中毒者の怖いところは、理性のリミッターガ無く、どんなことも平氣でやることらしい。

縛られていた女性が、無事な右目で茫然と俺を見ていた。助けに来たのか新たな脅威か判断がつかないのかもしれない。

カトリアさんへの任務完了の報告とか、救急車とか、やらなければいけない事はたくさんあつたと思うが、気付けば俺は女性の方へ歩いていた。女人人はビクツと肩を揺らす。

俺は静かに片膝をつき、女人の頭を抱きしめた。

「もう大丈夫です。助けにきました。」

)

酷い事件に巻きこまれたりしたひとには。それがトラウマになりきる前に対処しなくてはならない。心を癒やすのに効果的なのは人肌らしい。俺にその役目が果たせるとは思えなかつたが、何かせずにいられなかつた。

肩で女人人が泣いてるのを感じた、少しでも和らげばとおもう。

少しして、女の人は緊張の糸が切れたのか眠ってしまった。

「とりあえず、その辺になぜかあつたペンを添え木にして、指に処置をしておいた。そのあとは女人人にパークーを着せて背負い、男の額に刺さっていたナイフを抜いて小屋をでる。証拠隠滅に火をつけようか迷ったがカトリアさんに聞いてからにしよう。ドアを開けると10メートルぐらい先に、師匠とカトリアさんがいた。

「師匠。どうしてここに？」

「いやー、心配になつてな…。」

「ほら、大丈夫だつて言つたでしよう？ 彼は自分で選べたわ。」

カトリアさんは朗らかに笑つていたが師匠は複雑そうだつた。申し訳なさそうにも見える。

「さ、その子の手当てをしないと。後は任せてもらえる？ ちゃんとした医者とカウンセラーに診せるわ。」

すると後ろから黒服の人たちがくる。見るからに丁重に扱いそうにない人達だったので、少し迷つてカトリアさんを見る。

「ふふつ。大丈夫よ。その子のことも含めて依頼だもの。今回の仕事は、ちょっとしたお金持ちから娘を探して欲しいと言われてね？ この辺では最近強姦殺人事件がかつたから、急いで探したのよ。その子を手当てして親に渡せば終わり。」

それを聞いて、まだ少し不安だつたが、とりあえず任す事にした。

「あんたは何者なんですか？」

その言葉を聞くとカトリアさんは更に笑みを深め、師匠は対照的に苦い顔をした。
 「私はOLSよ？勤め先は民間軍事会社だけどね。こつちの啓介とは傭兵と雇い主の関係よ。彼はこれでも名前を出すだけで相手が降伏するほどのビックネームだつたんだから。」

「やめろよ、つたく。」

民間軍事会社といえば近年成長している軍事産業だ、兵器ではなく。兵士を売る会社。運用にリスクを伴う自国の兵士より、兵士を買って派遣してもらう方が何かと都合がいいらしい。他にも弱い軍隊の戦闘行動を指南したりするらしい。

「あなたも将来有望よ？今のうちに我が社と契約しておかない？」

「馬鹿、やめろ。それは本当にまだ早い。」

「あら残念、止められちゃつたわ。まあ、考えていてね。でも仕事は簡単なのから持つてくるわね。そんな顔しないで、経験は必要でしょ？」

これから俺はどうなるのだろうか。不安もあつたが、今はあの男達みたいな奴らを1人でも多く減らしたいと思っている。

師匠がはあとため息をついて話し出す。

「八幡、少し予定が早まつたが、明日からもつと殺人に寄つた訓練を始める。引き返すなら今だ、まだ間に合う。お前は、この先を望むのか？」
俺の答えは決まつていた。

はいすくーる

あの小屋の一件以来、訓練はより厳しく、実践的になつていった。

それに伴い。俺はどうとう拳銃を手に入れた。

「八幡、武器を持つ心構えはナイフの時に言つた通りだ、しかしこの銃や、これから渡していく武器は、更に殺傷能力が高く、それを持つ人間には、常に責任が伴う。そして、特に大事なことは、銃を向けるべきでないひとには向けないことだ。仲間に、そしてこんな物とは無関係な一般人には決して向けてはいけない。これは、俺たちの世界全体のルールだ。」

その時受け取つたのは、ベレッタM92F、いろんな映画にも登場する最も有名な銃の一つで、フラツシユバンとドットサイト。サイレンサーがついていた。

もうひとつ、マスクが贈られた、顔は隠しておいた方が良いらしい。鼻の上までのマスクで、どくろの鼻から下の柄だつた。ありがちなデザインだが、厨二心をくすぐるには十分で、それからの任務でそれを忘れたことはなかつた。

それから、銃の撃ち方や、弾丸の種類や、弾丸までの距離を音で判断する訓練や、ガ

ンハンドリング、部屋の制圧や自己をカバーしながら敵地を歩く訓練など様々なことを教わった。また、カトリアさんから定期的に降りてくる任務も、完璧にこなした。明らかに一人でできないものには、師匠もついてくれた。国内の任務も多く、東京や、福岡にも行つた。また、ほんの数回だが海外にも行つたこともある。親には流石に苦しかつたが、友達が出来たで押通した、なかなか信じてもらえなかつたが。

沢山の死に出会つた。俺が行つた場所では、人の命は驚くほど軽かつた。一山幾らのロウライフが、安い海賊版の小銃でズタズタにされていく。あの場所では彼らの命より、土地や、薬の方がどうしても価値が高かつたのである。

それからまた時は経つ。普通の生活の方では特には何もなかつた。少し、中学の女子同級生をガラの悪そうなのに絡まっていたところを助けて、変に仲良くなつてしまつたぐらいだ。常に色々とウケているうるさい感じの奴である。

仕事や訓練の合間に、しつかりと勉強もしていた。師匠やカトリアさんも勉強を見てくれた。あの二人は、頭もものすごく良いのである。

狙つていた総武高校に入学することができた。

入学初日は気合いを入れて、早起きした。中学からずつと大事に手入れしてきた、マウンテンバイクに跨り、意気揚々と登校する。この世の暗い部分を全て詰め込んだと言われた俺の目も（言っているのは、師匠だ）今日ばかりは、多少輝いていたことであろ

う。

途中で車に轢かれそうになつていた犬を助けた。

俺も轢かれそうになつたが、ちゃんと車に轢かれる時の受け身も習つていたし経験もあつた。車すら傷つけずに、車体の上を回転する。車高が低かつたのもあつて、華麗に着地する。

そのまま離脱、明らかに高価そうな車だし、面倒なことは避けたい。（まあ、仕事でたんまりお金をもらつてるので買おうと思えばあのくらいなら買えるが。）しかし、あの犬の飼い主と車に乗つっていた人には顔を見られたかもしれない。まあ、もう関わることはないだろう。バイクでも、転倒からの復帰を練習していたので、軽い自転車ならもつと素早くできる。後ろで呼び止められるが無視だ。

まあ、勇み足で登校したが、自己紹介も無難に済ませ、誰とも話しませんと、机に突つ伏す。職業柄、あまり知り合いをふやすわけにはいかない。

特に友達も出来ずに時が経つ、暑苦しいデブとは偶に話すがそれくらいだ。
普通に学校に通い、帰つて訓練し、偶に仕事に行く。

それからまたまた一年が経つて。俺の目の腐り具合も加速して。

俺は職員室に呼び出されていた。

「なあ、比企谷。わたしが授業で出した課題はなんだつたかな？」

にゅうぶ

青春とは嘘であり、悪である。

ひとびとは、特に若者は。あらゆる失敗や、嘘や、暴力や、迫害を、「若気の至り」と言つて片付ける。

其の一時の快樂の為に犠牲になる人たちの事を気にすることもないのだろう。その先思い出すこともないのだろう。

そしていつか大人になつて、馬鹿をしたなあと笑い合うのだろう。
ふざけるな。

お前らの青春の一ページの為に生まれてきた人間なんて一人もいない。
へらへら笑つて、踏みにじつて良いものでもない。

持たざる者を笑うな。
恵まれない人を嘲るな。

人より劣りながら、それでも同じ社会で生きる人たちは、お前らよりずっと強い。
お前らがギヤーギヤー大人数で過ごした毎日を、彼らは一人で歩いてきた。
ぼつちを侮るなけれ。

結論を言おう。

世のリア充よ、碎け散れ。

「なあ、比企谷。私が授業で出した課題はなんだつたかな。」

「はあ、高校生活を振り返つて、でしたつけ。」

「そうだな。で、これはなんだ？何で犯行声明だ？割とガチっぽいし。お前はテロリストなのか？それとも馬鹿なのか？」

我が担任、平塚静先生は、俺を呼び出し、俺の作文を大声で読み上げそう聞いた。失礼な。テロリストじゃなく傭兵です。とはもちろん言えない。

「…すんません、書き直します。」

ここは面倒なことになる前に殊勝な態度を見せて行くしかない。すると平塚先生は、はあとため息をついてこう言つた。

「こんな考え、子供はなかなかせんだろう。何か悩みもあるのか君は？」

まあ、あるにはある。どうやつたらこの世からクソ野郎が消え去るかという悩みだ。「いや、別に悩みとかはないんすけど。先生の年齢からしたら、大体の人が子供でしょうし。」

早く終われ、と言う気持ちが滲み出て、失言をしてしまう。しまつたと思うより先に、座っていた先生の雰囲気がピリッと変わったかと思うと、俺の腹部に拳が突き刺さった。あれー? まずは、顔の横撃ち抜いたりして脅すもんじやないの一? と思いながら、膝をつく。

「次年齢の話をしたら、ひどいぞ……?」

年齢の話はやはりタブーらしい。もちろんパンチは見えていたし、やろうと思えば防げた、今もあまりダメージはない。決して美しい踏み込みとともに揺れた双丘に気をとられたわけではない。ないつたらない。

食らつた後の演技も忘れない。どおー!? この完璧な演技ー! と某天才殺し屋みたいなことをしながら俺は先生を責める様に見上げる。

「一発目は脅しとかにするもんじやないですかね……?」

「お前は生半可な脅しは通用しそうになかったからな、今のもあまり聞いていないんだろう? 見かけによらず鍛えている様だし。」

少し驚いた。しつかり見破ってるらしい。傭兵とばれないのは、一重に想像力の問題だろう。

「そう言う先生は空手ですか。我流に傾けてるみたいですが。映画とか参考にしました?」

言われて先生は口笛をふく。おそらくはジークンドーとかも独学で齧つたのだろう。

「やはりか、ふふ今度格闘技について熱く語ろうじやないか。」

まあ、美人と語り合うには色気がないが。悪くない誘いだつた。

このまま許してもらえる流れかとおもつたが。

「それはそれとしてだ、私はお前の心無い発言に深く傷ついた。」

人生そう甘くないらしい。

「君には奉仕活動を命ずる、罪には罰を与えるとな。」

そう言つて先生はいたずらつぱく笑つた。

（

そうしてやつてきたのは謎の教室である。なんだ？身体でご奉仕とか言われるのか
？訓練の成果を出すときが来たのか？

「……だ。」

と、端的に言つて先生はドアを開ける。

「雪ノ下、依頼を持つて來た。」

「平塚先生、ドアを開けるときはノックを、と」

中にいたのは、美少女だつた。

校内でも有名な優等生、雪ノ下雪乃が、そこには座つていた。

俺が見て来た場所とは別の意味で別世界。近寄り難く。領域を侵すことを許さない。彼女は孤高に、凜々しく、そこに居た。

「入部希望の比企谷だ。ほら、自己紹介を。」

先生のその呼びかけにはつと意識をとりもどす。

「えつ？あー、比企谷八幡です。あとは、えー、は？入部つてなんだよ。」途中の話を聞いてなかつたので、割とわからない。たぶん聞いててもわかんなかったと思うけど。

「お前にはこの部活での奉仕活動を命ずる。よく反省して頭を冷やせ。以上だ。」

そして先生は雪ノ下、後は頼むと言つてさつきと帰つてしまふ。ちやつかりレポートの紙も渡された。

よくわからぬが面倒なことになつたのはわかる。しかし部活とは、放課後が拘束されるのは困る。

とりあえず一刻も早くここからでは、こここの主と敵対するしかない。まずは睨んで威嚇することにした。真の傭兵は目で殺す！

「がるるるーっ！」

「そんなところで唸つてないで、座つたら？」

「あ、はい。」

しかしこうかはなかつた。

いやいや、もちろん手加減してやつたんですよ。一回失禁させちゃつたこともあるし。さすがに女子校生を、ねえ？ はい。

俺は居た堪れない気持ちを誤魔化す様に1番の疑問について質問する。

「で、ここはなんの部活なんだ？」

すると雪ノ下雪乃是、ふむと唸つてこう切り出す。

「では、ゲームをしましよう。ここは何部か当てるゲーム。」

めんどくさいなぱつとおしえてよ。と言う言葉は飲み込んでおく。話が進まなくなりそうだ。

「えー、あ、読書部か？ひとりだし、本読んでるし。」

それならすこしぐらいいるのも吝かではない、俺も本は好きだし。

「ハズレよ。」

何処か勝ち誇った様に雪ノ下は宣告する。

お？ ちよつとイラつときちまつたぞ☆

少し考えたが何も出てこない。

「…降参だ、教えてくれ。」

はつきり言つてノーヒントすぎる、一瞬平塚先生の奉仕活動と言う言葉から、奉仕部

という名前が浮かんだが、まさかそんなはずはあるまい。

「あら、比企谷君は根性なしね？」

「いちいち一言多いやつだ。

「…お前友達いないだろ。」

そう言われた雪ノ下は、ピクッと眉を動かす。

「まずは何処からが友達かはつきりして欲しいわね。」

「その発言で大体わかつた。」

まあ、イメージ通りだ。多少溜飲は下がった。答えを催促する。

雪ノ下は対照的に、少しむくれたようにしながら。

「持つものが持たざるものに手を差し伸べる。私たちが行うのはボランティア。

奉仕部へようこそ。歓迎するわ？」

あつとるんかい。

初依頼

翌日。

もちろんあのよくわからない部活に行くわけもない。週末には仕事も控えている。帰つて準備しなくては。

ホームルームが終わつた瞬間流れる様に荷物を持つて外へと向かう。誰の目にも映らない。

「比企谷、何処へ行く？」

と思つたがあれー？平塚先生に廊下で見つかつてしまつた。

「出て行くところは見えなかつたが、ここは通ると思つていたからな。私も急いで出できたのだよ。」

うぐぐ、ひょつとして同業者かと思うほど素晴らしい対応だつた。俺のことをよくわかつていらつしやる。ちよつと運命とか感じちやつたぜ。ないか、ないな。

「や、やだなあ。帰ろうとしたわけないじやないですか。ちよつとジュースでも買いに行こうかと…。」

「行く方にあるだろう？ほら、早くしろ。」

ちつ、しかたがない。ここは従うとしよう。週末の仕事も比較的簡単なものなので、準備にも手間取らないだろう。ターゲットのプロファイルを見るくらいか。

と言うわけで奉仕部である。うーすつと言いながら新入社員の様に恐る恐るドアを開ける。

「あら、サボらず来たのね、感心だわ。」

中に入ると既に、我らが部長、ラジカル美少女雪ノ下がいた。

「…貴方今ふざけたこと考えてない？」

「ええっ、？まち、まつさかー！」

おいおい、読心術使えるとか聞いてねえぞ。一体ナニカワ潤さんなんだ？
雪ノ下がジト目で此方を見る。やばい、話題を変えなくては。

「あー、ここつていつも何してんだ？」

「…依頼が来るのを待っているわ、後は偶に平塚先生が来るくらいね。」
納得はしてなさそしだが、なんとか気をそらした。

「ふーん、大体どのくらいの頻度で来るんだ、依頼つて。」

「…貴方のがはじめてよ。」
「…ん？」

「いつからやつてんだ？これつて？」

「…一年の頃からよ。」

「…どうやら此処は読書部らしかつた。」

その後、少しの間沈黙が流れ、雪ノ下が、紅茶を淹れてくれた。これがかなり美味い。此処は紅茶の出る読書部らしい。放課後ティータイム。お礼をいつて優雅にいただく。

「…ねえ」

「あん？」

紅茶に舌鼓を打つていると唐突に雪ノ下が声をかけてきた。

「あなたは格闘技とかしているの？」

なんだ一体。藪からステイックなその質問の真意を探る。まあ雪ノ下自身も武道をやつている様なので。（合気道がなんかだろうか。）なんとなく興味があるのかもしれない。

「まあ、多少な。」

「…そう。」

どうしてそんな質問を、と聞こうとしたとき。なんとなくドアの向こうに誰かいる感じがした。それから一瞬たつて、ドアが躊躇いがちに開かれる。

「あのー、奉仕部つて此処ですか？」

開かれたドアからにゅつと出てきた頭は、ピンクがかつた髪をお団子にまとめた女子生徒だった。

「つて、なんでヒツキーが此処に!?」

「ん? ヒツキーって俺か? なんだ? 見ず知らずの女子にヒツキーって呼ばれる様な生活してなかつたと思うんだけど。」

「ええ、此処が奉仕部よ? 依頼かしら? 由比ヶ浜結衣さん?」

なんか部長が、どう? 依頼は来たわよ? とでも言いたげに薄い胸を張つて、勝ち誇つた様に横目で俺を見る。特になんとも思わない。てあれ? 知り合い?

「え? 何で私の名前…?」

違うのかよ。なんで知つてんの? まさか全校生徒覚えてるとか? にしては俺のこと知らなかつたしな…。

「目立つからたまたま覚えてたのよ、深い理由はないわ。」

逆にこえーよ、なんだたまたまつて。目えつけてたの? ほら、由比ヶ浜? さんも引いてるし。

「どゆうか、貴方こそ知らないの? 同じクラスの筈よ?」

言われて、え? まじ? と由比ヶ浜さんを見る。よく見たらかなりの美少女で、雪ノ下とは、とある部分が正反対だ、どことは言わないけど、あと頭が軽そうである。あ、今

絶対雪ノ下こつちみてる。めっちゃ睨んでるわ今。

「あははー…、やっぱり覚えてもらえてなかつたかー…。」

と、少し残念そうにしている。…なんか悪いことした気分になるな。

「そこのトリ頭谷君は放つておいて、依頼内容は？」

「初つ端からかなり無理あんぞそれ。」

やっぱ怒つてるらしい。俺のA・Tファイールド簡単に突き破つて来るなこいつ…。

「ああ、うん。そうなんだけど…、その…。」

と、歯切れ悪く喋りながらチラチラと俺を見る。

ああ、なるほど。

「わり、なんか飲みもん買つて来るわ。」

「私はミックスジュースで。あなたは？」

「え、あ、りんごジュースで。」

あれ？ 奢る流れ？ いやまあ、別にいいけどね？ 働いてるし。お金いっぱいあるし。だ

がしかし此処は敢えて甘やかさないでおこう。

「いやいや、俺人に奢らないし奢らせないひとだからさ…。」

「後で払うに決まってるでしよう。由比ヶ浜さんの分も私が出すわ。」

またもやってやつたりと雪ノ下が笑う。

なんか負けた気分になる。
奢つてやるよ畜生。

くつきー

自販機で無事ジュースを買った俺は、奉仕部のドアの前に来ていた。もう話も終わつている頃だろう。

やつてる?と、今度は常連さんの様にガラガラとドアを開ける。

「あ、ヒツキー。」

「おかえり、比企谷君。いくらだつた?」

「…金はいらねーよ。」

ぶつきらぼうに言いそてる。これはこれで負けた氣になるな…。

俺がかなり小さいことを考へてると、やはり雪ノ下は勝ち誇つて。

「あら、比企谷君にしては良い心がけね。」

と、やはり。雪ノ下は偉そうである。だがしかし。俺がタダでやられると思つたら大間違いだ。

「ほらよ。」

「ええ、ありが…」

貰つた雪ノ下が硬直する。

「比企谷君。これは…?」

ククク、驚いて声もでないらしい。俺はわざとらしい含み笑いとともにその正体を告げる。

「ふつふつふつ…。なんとそいつはあ…、マックスコーヒーだ!」

そう、千葉のソウルドリンク、マックスコーヒーである!

俺は、アハア??と変な吐息が出そうな程高らかに宣言する。

「いえ、私は何故マックスコーヒーなのか聞いてるのよ。」

「それはなあ、ミックスジュースが売り切れてたからだ!」

自分でもよく分からぬほどテンションが上がっている。なんか由比ヶ浜はかなり引いた目でこっちを見てるが気にしない。

「まあ、飲んでみろ? ほら、名前も似てるし。マジでうまいから。」

雪ノ下は観念した様にはあとため息をついて、ちみつと飲む。

まあ、雪ノ下がおごらせようとしてたと本気で思っていたわけでは無い。実際ミックスジュースは売り切れていたし、マックスコーヒーならいけると思ったのだ。

どうですかね…。と、雪ノ下の反応をドキドキしながら見守る。

味見するように飲んだ雪ノ下は、うつと顔をしかめて口を抑える。

「…暴力的な甘さね…。」

ちよつと微妙そうな反応だつた。あれー、おかしいな、美味しいと思うんだけどなー。

女子つて甘いものとか好きなんじやないすかね？

ふん、素人にはこの良さはわからん！と少し拗ねて俺も自分のマツカンを開ける。由比ヶ浜にもりんごジュースを渡しておいた。

「…まあ、飲めない程でもないわ。」

と、そんなことを言つて雪ノ下はまたちみちみと飲み始める。

おいおーい！素直じやないなー雪ノ下さんはあ！と、俄然俺のテンションは上がる。

ふふんと俺は何処かほこらしげに自分のマツカンを飲み干す。

すると、今まで蚊帳の外にしてしまつっていた依頼人がぼそつと呟く。

「なんか二人とも仲いいね…。」

そう言う由比ヶ浜には、何処か拗ねるような、妬むような色があつた。俺のいない間に雪ノ下と仲良くなつていたのだろうか。

「由比ヶ浜さん、冗談でもやめて頂戴。こんな自分の嗜好を女子に強要する鬼畜男と仲が良いなんてありえないわ。」

そう言われると俺結構ヤバい奴に感じるな。まあ実際結構ヤバいけど。にしても言い過ぎじやないですかね…。

そういうえば話が全然進んでないなど、俺は本筋に話を戻す。

「で。結局何の話だつたんだ?」

依頼の内容は、由比ヶ浜が前に世話をなつた人にお礼をしたいらしく。クツキーの作り方を習いたいのだそだ。

「いやー、私料理とかちょっと苦手でさー。それで平塚先生に相談したらここに…。」
なるほど。なら今回の仕事は、こいつにクツキーの作り方を教えれば良いわけか。
ちよつと苦手ぐらいならすぐ何とかなるだろうし。俺自身も一通り料理については
習っている。あるもの全てを使うのが『戦闘術』だ。少しも悟らせずに毒殺したこと
もある。

初依頼にしては簡単だな、とたかをくくつた。
くくつてしまつたのである。

所変わつて家庭科室である。

毒殺されかけた。

見ればわかる毒毒しさ。

まさか学校にまで敵が来たのかと思つた。

俺の目の前には、名状しがたき木炭の様なものがある。

「あ、あれー?」

と、由比ヶ浜は首を傾げている。

は? わかんないとこあつたか? 初つ端からだいぶやばかつたぞ?

ある種才能レベルの失敗の連続に、完璧美少女雪ノ下 SANも頭を抱えていた。

「やつぱり私才能とかないのかなー…。」

あるある、自信持つて? うちで働かない?

せめて名刺だけでも、と心の中でお辞儀していると。

雪ノ下は、一点の淀みなくこう言つた。

「料理は才能の問題ではないわ。練習あるのみよ。」

「…ん、まあ、そうだな。才能に左右されることなんてそうそうない。万人が嗜む料理なんか特に。」

「いやー、でもさ、やつぱこう言うのガチでやるのとか、引かれるし。無理そうならいつかなーって。」

最近は確かにそう言う風潮が強い。努力する事は美德とは思われない。妬まれ、蔑まれ。何一人でガチになつてんの? と、外野は好き勝手に後ろ指を指す。誰も悪いとは言わない。言うことなど出来ない。人は集団の雰囲気に立ち向かえる程強くない。だからこそ、孤高に生きる彼女は。凜々しくそれを否定する。

「…由比ヶ浜さん。あなたは周りを見ないと何も決められないの？誰かにいちいち許可を得ないと料理すら練習できないの？本気になるのがカツコ悪いですって？誰が何を言おうと関係ないでしよう。やりたいと思った事を、突き詰めたいと思つたことを成すことに誰に憚る必要があるの？そんな風にビクビク生きるのやめてもらつていいからしら。

はつきり言つて、不快だわ。」

ふ、と。笑みがこぼれてしまつた。

こんな人間もいる。強く、気高く、正しい理想を持つ人間も。

ちら、と雪ノ下が俺を横目で見る。ああ、違う。悪い意味で笑つたんじやない。少し嬉しくなつてしまつただけなのだ。

由比ヶ浜は、驚いたように目を見開き、そのまま固まつてしまつた。

まあ、仕方がない。今日はお開きだろう。
と、俺が由比ヶ浜に声を掛けようとした時。
「かつこいい…。」

「は？」

「なんか今のグツと来ちゃつた！ そうだよね、私が決めるんだよね。」
そんな事を言い出した。

え？何この人。どんな叱責も力にして行っちゃう人？

プリキュアかな？と俺が呆気に取られてアホなことを考えていると。

「…由比ヶ浜さん？私結構きついこと言つたと思うのだけど…。」

「ううん、そんな風にちやんと言つてくれる人つていなかつたからさ。ちょっと嬉しかつたんだよね。」

「失礼なこと言つてごめんね？雪ノ下さん。もう一回教えて貰える？」

そんな言葉を聞いた雪ノ下は、大きく目を見開いて、ふつと顔を崩れさせた。

「わかつたわ。由比ヶ浜さん。ちやんと指示を聞く様にね？」

そう言いながら二人は、もう一度クツキー作りに取り組む。

あれやこれやと言いながら少しして。今度は少しだけマシな木炭ができた。

由比ヶ浜は、やつぱりかー、と肩を落として。雪ノ下はこれからよ、と慰める。

一つ手に取つてかじつて見る。二人が俺に注目する。まあ、食えなくはない。
俺は二人に向こう直る。

「なあ二人とも、食べ物贈る上で一番大事な事つて何かわかるか？」

由比ヶ浜は、もうちよつと一人でも頑張つて見るね、と家に帰つた。残つた俺たちも部室に鍵をかけて帰る支度をする。

そこでふと、気になつた事を聞いて見た。

「なあ、雪ノ下。お前、将来の目標とかあんのか。」

それを聞いた雪ノ下は、いきなりなにを、と俺を見る。

いや、まあ。深い意味は無いんだけどね。

「すまん、なんでもな…。」

「…世界を変える事よ。」

この間違つた世界全部を、正しく導くの。」

彼女は、やはり少しも迷わずそう言つた。

この世界を、変える。

「そつか…。」

「ええ、そうよ。」

彼女は表情を変えなかつた。

俺も雪ノ下も、それ以上の会話はなかつた。

（

通学路、すつかり赤くなつた景色の中で先ほどの会話を思い出す。

世界を変える。

それがどれだけ難しいか。俺はよくわかつてゐる。

今まで何人も、何十人も、何百何千と殺したのに、やはり世界は変わらなかつた。俺が殺すまでもなく。毎日何万人と死んでいるのに。世界はゆるゆると時間を刻む。ゆるゆると。いつまでも沢山の人が理不尽に殺されていく。

飢えで、戦争で、レイプで、病気で、静いで。

誰かの快樂の為に。利益のために。そして時には意味も無く。

ああ、雪ノ下。お前の言う通りだ。

俺たちの生きてる世界は、

どうしようも無く。

間違つてゐる。

携帶に、メッセージが表示される。
集合場所と、その時間。
かくして俺は、日常に戻る。

日常の夜

金曜夜。

東京都 池袋某所

まだ肌寒く、俺は黒いパークーの上に黒いジャケットを羽織つている。
ナイフは袖に入れ、拳銃は背面の腰につけている。

深夜の誰もいない立体駐車場を俺は一人で歩いていた。靴は少し高価めの黒い運動靴。変に安全靴とかを選ぶとその特徴的な足跡で痕跡を残してしまう。今履いているのは前もつてこの立体駐車場に出入りする人間が履いていたのと同じ銘柄を選んだものである。

四層あるこの駐車場は、付近に上流階級の家が集まっているため、車高の低いスポーツカーや左ハンドルなど、高級車がならんでいる。

此処に並ぶ車の所有者全員が犯罪で稼いでいるとは思わない。

ほんの一部、ごく少数だけなのだろう。

今回の標的は40前半の精神科医である。

彼には家庭があり。子供がいて、立派なマンションの高層に住んでいる。

依頼の内容は暗殺。

条件は誰にも見られないことと。彼が人身売買に関わっている証拠を見つけること。彼は数年に渡り。うつ病患者やパニック障害の患者を、自殺した事にしてマフィアに売つていたらしい。

家族に厄介払いされた患者や、そもそも何処の人間かわからないが、精神に疾患のある人間を保護と称して引き取り、薬漬けにして流していた様だ。

今回の依頼主は、その被害者の両親だ。

今までには、患者の身上をしつかり調べていた精神科医も、膨大な借金を抱え、焦つていたのだろうか。まあ、そいつの事情にそこまで興味はないが。事故に巻き込まれ、高次脳機能障害を患つて入院していた女の子を、リハビリで外を散歩していた時に何処かへ行つてしまつた、といつて。行方不明にした。

本来ならかなり無理のある言い訳だ。当然両親も納得できずに、娘の捜索を警察に願い出るとともに、精神科医と病院に責任を追及した。

しかしその発言は、とても不自然に揉み消された。

どうやら何年にもわたつて人間を売る事で組織に貢献していたその男は、それなりに守られる立場にあつたらしい。

警察も一向に娘に関する事も報告してくれない。現在捜索していますの一点張り

だつたそうだ。

どうしようもなくなり。せめて自分達でと、必死にビラで目撃情報を募集し、色々な人に相談していた時。カトリニアさんの勤めるPMCを見つけたのだという。報酬さえ払われれば個人にも軍事力を派遣する。国家を跨いでも人を探せる組織である。

両親は自分達の貯金を全て使つて捜索を依頼した。

精神科医の身辺を全て洗い。マフィアとの関係を発見し、その先の人間オーフィションを調べ上げた。

依頼から三週間で女の子は見つかつた。

中東のよくわからない教団に買われ、儀式と称して犯され尽くし、供物と語られ中身を根こそぎ引きずり出された残骸が。

事故の前はよく笑い、頭は良くないが真っ直ぐな優しい女の子だつたらしい。なんとなく、昨日出会つたアホな少女を思い出す。よくある話だ。

本当によくある話。

日本で起こつたから異常性が際立つだけで、少し地球儀の経度をずらしてしまえば、日常に良くある事なのである。

両親は老後の為のお金と、その女の子の学費と治療費に使うはずだつたお金を全て差し出してこう言つた。報いを受けさせて下さい、と。

そして“そういう”殺しに慣れた俺が呼ばれた訳である。

ゆらゆらと、立体駐車場を歩く。もう上の階では取引が始まつてゐるだろう。この立体駐車場は、3階までは一般に利用できるが、4階は、とある組織が貸し切つてゐる。

都心でそんなものを持つとは、なかなかに大胆である。

丁度次の取引に証拠とともに精神科医をおさえる為、今日まで待つたのだ。上には今、精神科医とその“商品”と取引先。そしてその護衛が4人の計7人。ゆるゆると、階段を登る。

マスクを鼻まで上げる。

ナイフの留め具を袖の上から外す。もう一つのストッパーは腕を振つた時の遠心力で外れる仕組みだ。

4階の、一番奥。

標的の位置、人数を補足する。事前の情報と変化なし。

ふつと体を下げ、体重を落とした勢いで走り出す。音は出さない。真っ直ぐ、一瞬で間が詰まる。

一番手前にいて、此方に背を向けていた身体のでかいやつを陰にして緊迫し、腕を振つてナイフを出し、人差し指と中指で挟む。

ひうつと腕を振る、あの日から何度も繰り返した腕の軌道。

男が前のめりに倒れこむ。首の後ろがぱつかりと割れている。

我ながら、いい出来だ。

五組の目が俺を見る。真ん中の右が精神科医、左は取引先。“人が入れるくらい”的、蓋にいくつかの穴が空いたクーラーボックスは、既に取引先側にある。

その二人を囮むようにして、残りの3人。

一瞬呆気にとられていたようだが、なんとか持ち直し、スーツの中から銃を出そうとする。

ああ、おそい。

一番右の護衛にナイフを投擲。近かつた左の奴に飛び蹴りを食らわせ後ろにいた3人目に当てる。

ぐえ、と言いながらすつ転んだ一人を腰から抜いた銃で射殺する。もちろんサイレンサーはついている。

精神科医は顔を青ざめさせて後ずさる。取引先の奴は、なんとか銃を抜けたらしい。引き金を引くタイミングに合わせて体を沈める。一回の踏み込みで懐に入り込み顎

を左の掌底で突き上げる。

のけぞつたところで頭部に一発。スマートだ。

飛び散った脳みそがかかつたらしい。顔が汚れた精神科医が尻餅をついている。こういう時は必死こいて逃げるべきじゃねえかな。

「なあ、お前は自分が死なせた人間の事をどのくらい覚えてられるんだ？」

俺は、そいつに話しかける。

「最初に売ったやつのことは覚えてるか？2番目は、3番目は。」

「なんでこんなことをする。お前は普通に生きられただろ。」

「まあまあ裕福に、そそこそ幸せに。家族の為に。患者の為に生きられたんだ。」

「本当にわからないんだよ。なんでお前らがこんな事をするのか。」

「なんでこんな事をして、これを忘れてのうのうと生きてられる？」

「みんな幸せに生きればいいのに。せめて不幸にならずにいればいいのに。」

「誰かを少しでも幸せにすればいいのに。せめて不幸にせずにいればいいのに。」

「これはお前の選んだ結末だ。お前が俺を呼んだ。自業自得だ。分かんどう？」

「死ぬのが怖いなんて言うなよ？お前は他人にただ死ぬよりも酷い事を押し付けたんだ。」

「……」

俺は銃を指向する。あの人から貰つた銃を、俺が初めて持つた銃を。

精神科医は後悔してゐるのか。それとも最後を見たくないのか泣きながら目を閉じた。

「……」一言ぐらいい喋れよ。」

引き金を引く。

ごとりと頭が落ちるおと。

煮え切らない死に方だ。

（

クーラーボックスはそのままだ。実は取引先の奴に一発撃たせたのはわざとである。あれを合図に会社から派遣された支援要員が警察に通報する。

警察力どころか。國家権力そのものと密接に関係してきたPMCからの要請だ。マフィアの脅しは軽く上回る。

今頃は、警察が現場を押さえているだろう。

もちろん現場を守る為俺も寸前まで残つていた。誰も来なかつたが。

顔を見られるわけにもいかなかつたのでクーラーボックスも開けなかつた。まあ、中の人には眠らさせていただろうが。

道を歩いていると、後ろからタクシーが来たので手を挙げて止める。

中に乗り込むと運転手の男がにやにやしながらバツクミラー越しに俺を見る。

「よう”影喰らい”。首尾は?」

運転手に扮した”従業員”は俺にそう聞いて来た。
この質問も何度目か。

「いつも通りだよ。」

吐き捨てるように、俺は返した。

影喰らい

車の後部座席にもたれながら窓の外を見ていた。

相変わらず東京は眠らない。

夜ぐらい休めよ。そんなんだからK A R O S H Iとか言う英語が出来るんだよ。
今外を歩いてる人達は、同じ地平の上で人身売買があつたなんて思いもしないだろ
う。

いや、知識としてはなんとなく知つていても実感出来ないんだろう。

今やあの学校の、あの不思議な部活の方をそんな風に実感できない自分は、やはり逸
脱し過ぎてしまつたんだろうか。

人が死ぬ事が日常で。

みんな不幸なのが当然で。

そんな世界を変えたくて始めた筈なのに。

いい加減わかるさ。きっと一生やつたつて何も変わらない。

殺した分だけ現れて。

増えた分だけ消えていく。

世界はそうやつて出来ているらしい。

きつと緩やかに変わつてはいるんだろうけど。

ちつぽけな人間ではそれを体感することなんてできない。

だから変わつてないと同じだ。

あいつは変えられるだろうか。

もしくは、

こつちを見てもまだ変えると言えるだろうか。

関わつて来て欲しくない。

あいつには、普通に幸せになつて欲しい。

これ以上増えないでほしい。

思考がナーバスになつていて。

最近はあんまりなかつたのに。

俺が自分の心の起伏に戸惑つてはいる。俺のポケットで携帯が震える。常に通知をオフにしている俺の携帯を震わせられるのは、限られている。即ち、会社からだろう。

うんざりしながら電話に出る。

「もしもしー？仕事の電話には3コール以内に出ろつて習わなかつたんですかー？」

「そんなんだからだらしがないとか、礼儀がなつてないとか言われるんですよ！本当

はいい子なのに！そんな風に誤解ばかり広がつて！」

「でも大丈夫。オネーサンだけは味方だよ？だから婚姻届けに判を押して！」

「『影喰らい』さん！」

「…お疲れ様です。恵理さん。あと影喰らいって呼ばないで下さい。」

出た瞬間よく分からぬことを喚いていたのは、基本的に俺のオペレーターをしてくれる恵理さんだ。おそらく偽名。本名は知らない。更に言うなら顔も知らん。
駆け出しの時こそカトリアさんが面倒を見てくれていたが、俺がそれなりになつて、正式に『会社』と契約を結んでからはこの人と組んでいる。

何と言つてもうるさい。そして実年齢は24らしく。結婚に焦つているらしい。
「なんで？かつこいいじやないですか！『影喰らい』！」

「いや、普通に恥ずいし。」

影喰らいというのは俺のあだ名だ。

傭兵、特に暗殺の多い人間はもちろん本名では呼ばれない。しかしある程度認められ、有名になつてくると名前を呼ぶ必要性が出てくる。
そのへんで大体誰かしらが勝手につけるのだ。

それで俺についたのは影喰らい。

由来は知らない。たぶん黒い服着てるし影薄いからとかだと思う。知らんけど。

「それで、何の用ですか。」

「えー？ 普通に事後報告受けですよ。まあ、割と聞くまでも無いですが。どうなつたとかは知つてますし。体制だけですよ。」

そーなのかー、と。とりあえずざつくりとした内容と異常の有無を告げる。

「ふい。了解。お疲れ様でした。今んとこは次の任務とかも入つてないですし。しばらくゆつくりできますよ。これはいつも頑張つてる超美人なオペレーターのお姉さんにサービスしろつて上からのお達しですよ！」

「いや、美人とかは知らないですけど。普通に一人でゆつくりします。」

「えー！？ なんでー！？ いーじやんちよつとくらい！ 私の素顔を見るチャンスだよ！？」

「いや、特に興味ないんで」

えー。と割とショックを受けてそうな声を聞き流す。こう言う手合いは無視が一番だ。疲れてるし寝たい。やがて諦めたようだ。

「はあー。ま、仕方ないかー。」

あ、そう言えば精神科医の件ですけど。そいつをシノギに使つてたマフィアを日々漬そうつてなつてるみたいです。ええ、もちろん依頼ですが。今度は警察の上層部から内々に来た依頼みたいで、さつきゆつくりできますよつて言つたのに申し訳ないですが招集かかるかもね。」

「はあ、ですよねー。」

関東に住んでいる俺は基本的に呼ばれる頻度が高い。なかなか一ヶ月以上何もないとかはないのだ。

「でも、あのマフィアもやりますよねー。精神科医は、借金に追われてずっとあんな事続けてましたけど。そもそもその借金をふつかけてたのは、そのマフィアの傘下の闇金会社らしいですし。」

「…そつすか。」

「うわ、興味なさそう。まあ、当然か。」

興味なんか出るはずもない。あーゆーやつのそんな事までいちいち気にしてられない。どうせまたすぐにあんな感じのやつを殺しに行くのだ。

「あ、あと。別に敬語いらぬいつすよ。自分の方が年下ですし。」

「はい？ああ、いやですね。カトリリア姉さんに実働するひとたちへの敬意を忘れるなつて言われてますから。オペレーターの鉄則です。」

そう言うもんなのか。と、恵理さんとの雑談は、そこで終わつた。

影喰らいさんと組んでからもうすぐ二年が経つ。最初の時こそ何考えてるのか分からぬ人だと思っていたけど。たまに見せる感情らしきものに、確かな人の熱を感じ

た。

あの人は悪い人じやない。

寧ろなんでこんな人がこの世界にいるのか分からぬ。

目の前で起きる凄惨な悪夢に、なんでもないよう振舞いながら。その実いつも傷ついている。

その姿は、まるで強がる普通の子供のようだつた。

たつた一人。こんな世界に中学生から飛び込んで、未だに希望を捨てていない。

その身を擦り減らしながら。おそらく自分でもその傷に気がついていないのだろう。いつも他人を優先し。そして時に標的にすら心を寄せてしまう。

それがきっと彼にとつて当たり前なんだろう。

誰かを助けるためだけに自分を鍛えて来たんでしょう。

彼は世界にさす影を喰らう者。

今はまだその影響は小さくとも、いつか暗い場所を晴らしてくれる。

大丈夫です。影喰らいさん、私だけは、最後まで味方でいますから。

まるで別人であるが如く

翌日明朝

家に帰る前に千葉にあるセーフハウスでシャワーを浴びる。

返り血なんて浴びてはいないがゆっくりと汗をながす。

30分程かけてさっぱりし、浴室から出て身体についた水滴を拭き取る。
ふと、鏡に映った自分と目があつた。

相変わらず死んだ目は、鍛え上げられた身体と相まつてまさに殺し屋だ。と、自嘲気味に笑う。

ここに他人がいたら鏡に向かってニヤついて俺に悲鳴を上げただろう。

随分と筋肉もついた。不必要に盛り上がるでなく。完璧に引き締められた身体は、ある種の機能美を思わせる。

人を殺す事を目的とした一つの武器。

自画自賛をしているわけではない。

俺をここまで鍛えてくれた師匠を思い出していた。

あの人は俺が一人でも大丈夫だと思った日に中東に行つてくると言つて、いなくなつ

た。

不安もあつたがまあ仕方ない。寧ろあんなに何年もついてくれてたのが幸運だつたのだ。今まで何度か仕事に行く事はあつたが、今度のはもういつ会えるか分からな
い。

しかし、まあ。必要になれば会えるだろう。お互に。
なんとなく、そんな気がするのだ。

カトリアさんとはたまに連絡をとつて
いる。

近況報告をしたり、直接は連絡が取れない師匠のことを教えてくれたりする。
これが今の俺の日常だつた。

反吐がでる様なクソ野郎どもを見て來たし、吐きそうなほど酷い場所も見て來た。
でもこうやつて、少しでも何かの為に戦える日々がそんなに嫌いじやなかつた。
何処までいつても自己満足で、あいつらはいなくはならないとわかつていはいるけ
ど。

それでも、嫌いじやなかつたんだ。

世界は変わらないけど、個人の周囲は簡単に変わる。
世界から見れば小さくて。四捨五入で修正される個人の世界。
変わらないものなんてないとわかつていた。

小さい出来ごとで、ほんの運命の悪戯で、ちょっとした不幸で。
人の人生は、大きく形を変える。

ずっと見て来た筈なのに。

分かつていた筈なのに。

「うーす」

「こんにちは、腐り谷君」

「え、なんで挨拶罵倒で返した? 何処の国のか文化?」

月曜、放課後

前のごとく平塚先生に捕まつた俺は、またもやっこに來ていた。

そこの最初の会話がこれである。世界には俺の知らない文化や風習がたくさんあるらしい。

「あなたの目、初めて会つた時より酷いことになつてるわよ? 誰かに呪いでもかけられたの?」

まじで?いや、呪つてきそうなのには心当たりありすぎるけど。どうりで朝からいつも以上にみんな目をそらすわけだ。

仕事の次の日とかはよくある。最初の頃は小町にもよそよそしくされて、仕事辞めよ

うかと思つたほどだ。

と俺が少しでも輝かせようと目に力を入れながら椅子に座ると、ゆらゆらと湯気の立つ紅茶が差し出された。礼をいってありがたくいただく。

のんびりと、二人とも無言で本を読む。

因みに今読んでいるのはテニ〇の王子様だ。理由は特はない。マジでない。ゆつたりと、時間が流れる。ちよつと違うかも知れないが、これが普通の日常というやつだろうか。

雪ノ下はきつい奴だが、なんとなく、悪くないかも知れない。

そんな事を考えながら過ごしていると、ふと、廊下に誰かの気配を感じた。

「やつはろー！」

元気よく部室のドアを開けて頭悪そうな挨拶をしてきたのは、木炭工場の工場長こと、由比ヶ浜結衣である。ちなみにやつはろーというのはその工場の名物挨拶だ。なにそのアットホームな会社。

まさかまた木炭の直売りか？と俺がビクビクしていると。

「…」んにちは由比ヶ浜さん。何か用かしら？あとドアはノックして入ってきて頂戴。」

一瞬自失していた我らが部長がなんとか持ち直し、由比ヶ浜に用件を問う。いいぞ！

頑張れ部長！そのままなんとかして帰らせる！

俺が心の中でどう見ても面倒な奴と部長を戦わせていると。

「ふつふつふ。なんとお、私があ、依頼人を連れて来ました！」

「なんか聞いたことある宣言だな…。具体的に言うと先週。」

その言葉と同時に由比ヶ浜の背中に隠れていた女子生徒が姿を現わす。
「え、こんにちは。えと、戸塚彩加です。お願ひを叶えてくれるつて聞いたんですけど
…。」

美少女がいた。

結論を言おう。

美少女ではなく、美少年だった。

世の中絶望しかない。いや、待てよ？女子じゃないって事は、もつと距離が近い。変
に勘違いする事もない。むしろ、戸塚が正解？

俺が訳の分からん考えに囚われている間に話は進んでいたらしい。

どうやら戸塚の所属するテニス部を強くしたい的な話で、なら先ず戸塚を強くしよう
みたいな話になり、いつの間にか運動服でテニスコートにいた上に翌日。これがキング

クリムゾン！時間も吹つ飛ばされた。さらに言うなら由比ヶ浜が部活に入つた。俺の意識飛び過ぎじゃない？

「ふぐつ、うう、うう！」

「ううーんつ、うあ！」

今悩ましげな声で唸つてているのは戸塚と由比ヶ浜である。

二人は地面に伏せ、懸命に自らの身を持ち上げようとしていた。

汗が滴り、地面を濡らす。

「ふむ、八幡、努力する者とは、何故かくも美しいのだろうな。」

「…いや、誰だお前。」

ふと横に、見知らぬデブがいることに気づいた。

…いや、誰。割とマジで。

「ふつふつふ。どうした、八幡よ。この其方の盟友にして、剣豪将軍材木座義輝を忘れるとは、見損なつたぞ！…いや、八幡？そんな引かないで？待つて、遠い！もうかなり遠くに行つてる！」

一瞬でキヤラが取れた。ほんとなんだこいつ。

警戒度をガン上げして、運歩で距離を取り、冷静に相手を観察する。
どう見てもただのデブである。

：あー、なんか思い出してきた。確か戸塚が来てすぐぐらいに来た材木座義輝だ。なんか小説がどーのつて言つて。戸塚の件が話ついた後に自作の小説出して滅茶苦茶酷評されたんだつけ、雪ノ下に。：なんでいんのこいつ。

はあちいまんー！と、滅茶苦茶きもい感じで寄つてくる材木座を撃退しようとファイティングポーズをとつていると。雪ノ下に呆れた声で呼ばれる。

「二人とも、馬鹿な事してないであなた達もやりなさい。」

「え。」

と言うわけで俺たちも腕立てである。

何故みんなで腕立てなんかしているかと言うと。戸塚のテニスを上達させる為、先ずは筋トレから、と言うことになり。「先ずは死ぬまで走つて死ぬまで腕立て。それから死ぬまで腹筋して、死ぬまで素振りをするところから始めましょ。」と言う部長の何も始まらない、むしろ4回終わる提案を俺と由比ヶ浜で却下し、とりあえずランニング4キロ、腕立てを30回3セット、腹筋30回3セット。からの素振りで落ち着き、実践なうである。

雪ノ下、その訓練で育つのはランボーか特攻野郎だけだ。

俺は慣れてるのもあってすいすいこなす。体力ないふりしようかとも思つたけど、雪ノ下には格闘技やつてんのバレてるし、変に演技しても逆に疑われてしまうだろう。か

と言つていつものペースでやつても目立つてしまふので、普通にこなす。材木座は20回からしんどそうにしていた。

戸塚と由比ヶ浜はまあ、10回ちよいでやばそ�だつた。腕立て伏せは簡単そうに見えるが正しくやるとかなりきつい。健康な男子高校生でも全くやつてなかつた人にはきついだろう。

「…ヒツキー、意外。」

「比企谷君すごい…！」

「…ひゆーっ、こひゆーっ、さすっ、我が、盟つ：友！…ごふつ、ごはつ！」

それでも軽々とこなすのは驚かれるらしい。ちよつと調子にのつて腕だけ伏せとかしそうになる。ここは我慢だ。…ああでも戸塚にいいとこ見せたい…！あと材木座大丈夫か。

雪ノ下は中々やるわねみたいな顔で見てた。監督役でふんぞり返つてゐる。部長もやれ。いや結果は目に見えてるけど。

適宜数を減らしながら筋トレ終了。素振りが終わりその日はお開きとなつた。

そんな事を3日ほど続け。少しづつテニス自体の練習も織り込んで行き、昼休みにもやり始めたある日。またもや面倒な事件がおきる。

テニスの逆襲者

「あれ?なんかテニスしてない?」

昼休み、筋トレは量を減らし、テニスに直結する練習を始め、その中でもひたすら俺がボールを投げて戸塚がそれを打ち返すと言う練習をしていた時。そいつらはやつて来た。

「おー、テニスとか久しぶりじゃん。あーしもやりたいんですけど。」

そう。リア充筆頭。炎の女王、三浦優美子である。

「ゆ、優美子…」

「あれ?結衣?・テニスやつてたつけ?」

由比ヶ浜が来ちやつたかーみたいな感じの、複雑そうな顔をしている。

まあ、練習を手伝ってくれるようには見えない。むしろややこしい事になるのが目に見えている。

なんとか由比ヶ浜がやんわり帰してくれないかと思つたが。

「い、いやー、今ちよとさいちやんの練習を手伝つてるっていうか、遊んでるわけではないというかー…。」

「は？」こうきょうのばつしょ？別に関係なくない？」

まあ、無理だろう。由比ヶ浜と三浦は友達〇だし、言つて聞くような相手でもないだろう。かと言つてここで三浦達がテニスコートを使う事を許容すればたちまちこの場所はリア充達の巣窟となり、練習どころではなくなってしまうだろう。

既に三浦優美子の後ろにはイ☆ケ☆メ☆ンボーア葉山隼人と愉快な仲間たちが控えている。その人数だけでもこの小さいテニスコートはウエイクイコールで埋まってしまうだろう。なにそれめっちゃ怖い。

「あー、俺たちもテニス部の戸塚の練習に付き合うつつて職員に許可取つてんだわ、わりいけど練習滞りそだだから勘弁してくれ。」

三浦と葉山から、剛柔一体の構えで責められる戸塚と由比ヶ浜を見てられずそう言つて声をかける。なんかえ、誰。みたいな感じで見られたが気にしない。

こんな時に限つて切り札の雪ノ下は足をぐねつた戸塚の為の救急セットを取りに行つて不在している。

「は？今してなくない？」

戸塚怪我してんだろ見てわかんねえのか。と口から出そうになるがもつと面倒になりそうなので抑える。この場限りでとかでも認めたらなし崩しでテニスコートの主導権を奪われるだろう。リア充とはそういうつた謎の引力を持つていてるのだ。

そのままやいやいと話は踊る。どうしようめんどくさいな黙らせちゃうかと俺の思考があらぬ方向に行き始めた時。

「じゃあ、テニスで勝負するのはどうかな?」

と、爽やか野郎葉山君がなんか言い出した。

いやマジで何言つてんの?俺たちがそれやる意味よ。これあれだ、お菓子とか食べてる時通りすがりのやつにあ、俺も頂戴って言われてえ、絶対やだよつて言うとじやあ、じやんけんで買つたら頂戴つて言われるのと同じだ。つまり意味わからん。

しかし三浦はさすが隼人:みたいな顔してる。由比ヶ浜と戸塚ももうそれしか:な感じだし。これがリア充:!凄まじい話術だ:!いや、おい。

俺が困惑してゐ間に話は進む。え、どうしよう。ていうか俺がやんの?

「じゃあ男女混同のダブルスね、まあ組んでくれる人がいるか知らないけど?」

ルールまで決まってた。え、だから俺がやんの?材木座は?あ、いねえし。とゆうか実際組んでくれる人いないし。戸塚怪我してるし、詰んでね?三浦めっちゃ勝ち誇つてる。俺なんかした?

しかたがない。あまりやりたくはなかつたが。伝家の宝刀、D O ☆ G E ☆ Z A を出すしかないか。

師匠も言つていた。話を聞かない女には有効だと。何があつたんだ師匠。

「…私がやる。」

と、俺が膝を折ろうとしたとき。そんな声を上げたのは、由比ヶ浜だった。
小さいが、重く、強い声だった。

三浦も、え？みたいな顔をしている。俺は顔には出さなかつたが普通に驚いていた。
だつて、お前は。

「ごめん優美子、でも。私はこっちにするね。」

と、彼女はそう言つた。

「…ふん。勝手にすれば。」

三浦はつまらなさそうに、準備の為に引っ込んだ。

「…おい由比ヶ浜、やめとけ。」

「いいの、ヒツキ。悔しいもんね。」

由比ヶ浜はそう言い切つた。短いが、決意のある言葉だった。

こいつにとつて、周りに合わせてしまつて、三浦に逆らうのは勇気のいる事だろう。三浦がこれで由比ヶ浜を嫌いになる様な小さい奴かどうかは知らないが、それでも、彼女にとつて友達である三浦の敵になるのは大きい意味を持つてしまう。

こいつは、こう言つちやなんだが、ただの依頼の為に自分の交友関係を掛けた。目標の為に頑張る戸塚を軽んじるあいつらを許せなかつたのか。

由比ヶ浜は優しい女の子だ、この世界は優しさが必ずしも実を結ぶ訳ではない。訳ではないが。俺の前であつた時は。

正直変に目立ちたくなかったので適当に流そうかと思つていたが。
予定変更。ちょっとぐらいは、やる気をだそつか。

各自テニス部に借りたテニスウェアに着替える。相手は三浦と葉山。3ゲームやつて多く取つた方の勝ち。

先攻は俺たち。

「ヒツキー、気をつけて。優美子、中学の時インターハイ行つてるから。」

：そう言うのは早く行つてくれませんかねえ：。

えー、無理ゲーじゃん。流石に”戦闘術”もテニスはやつてない。何故かサッカーはやつたけど。

経験者に簡単に勝てるかと訊かれれば難しいと答えるしかない。加えて葉山はサッカー部のエースで運動神経抜群。対する由比ヶ浜はお世辞にも運動が得意そとは言えない。

勝算は薄い。葉山は申し訳なさそうな苦笑を浮かべ、三浦は勝ちを確信している。野次馬達もどう見ても弱そうな俺を見て憐れそうな、せせら笑うようにしている。戸塚も

審判席で不安そうにしていて、材木座は野次馬に混じって訳知り顔で腕を組んでいる。何やつてんのあいつぶつ飛ばすぞ。

左手でボールを確かめるように握る。体育の時間のテニスと、テニプロを思い出していた。

ふ一つと息を吐いて脱力する。まずは小手調べ。軽くをイメージして力まないよう意意識する。

ふっとボールを上に放る。頭はクールだ、手先まで脱力が行き渡っている。

さて、話はそれるが、武術の極意は脱力と聞いた事がある人もいるのではないだろうか。0から100へ、瞬間的に全力を発揮するには、技を出す前に如何に脱力するかが肝となる。特に、振つたり切つたりする時は。

今回俺は、いつもの癖か。力を抜き過ぎたらしい。

スペアアアン、と何かが爆ぜるような轟音と共に、俺の打った球は豪速で相手のコートへと直進する。そこからだんつがしゃああん・といちいちでかい音を出しながらテニスボールは地面と金網を順番に叩いて行つた。

てんつてんつと、どこか気の抜けたように、跳ね返ってきた球が勢いを失つてコートに戻ってきた。

誰も声を出さなかつた。全員が球を見て、次に俺を見る。

葉山も、三浦も、由比ヶ浜でさえも信じられないと言うように俺を見る。やばい、いや、脱力から、いつものナイフを振るイメージで力み過ぎたのだ。ちょつと氣も立つていたかも知れない。

誤魔化さなければ、と、俺はかなり挙動が変になりながらラケットを見て。「い、いい感じに当たったなー。」

と、独り言を言う。いや、はたから見たらかなりきもかつたと思う。すると、野次馬側から、ま、まぐれかーみたいな声が出始める。いや、気持ちはわかるけどさ。誤魔化せるのかよ。

決着

調子が良かつたのは最初の一球だけ。サーブだけは上手く打てるが、返すとなるとなかなか難しい。みんなに淡い期待を抱かせてしまつたのは申し訳ないが、由比ヶ浜も球に翻弄されるばかり（なんかやらしい）。一人ではコート全てカバーするのは無理だつた。何とか点を取ることもあつたが、1ゲーム目は結局取られてしまつた。

「ふ、ふん。ちょっとはやるみたいだけど、やっぱ初心者じやん。」

三浦は三浦で三下みたいな事を言つてゐる。作品が変わつてくるな。

野次馬達の雰囲気もやはり三浦の勝利か：な感じになつてゐる。そして材木座は始まる時は真ん中にいたのに、だいぶ三浦側に寄つて腕を組んでゐる。まじでぶつ飛ばすぞ。何あいつメーターかなんかなの？

2ゲーム目、俺は割と打ち返せるようになつてゐた。しかし、言つては何だが、やはりほぼ2対1のこの状況は分が悪い。

しかも、悪いことは続いてしまうものである。

「いっつ！」

「！由比ヶ浜、大丈夫か。」

きついコースにきたボールを追おうとした由比ヶ浜がすつころんだ。

「…」めん、足くじいちゃつた。」

由比ヶ浜は右足首をおさえている。まだ腫れは見えないが、続行は難しいだろう。

「由比ヶ浜、もういい、やめよう。」

正直歯痒いが、背に腹は変えられない。あいつらが引くぐらいの素晴らしい土下座でここに寄り付けないようにしてやろう。

「ヒツキー、でも…。」

由比ヶ浜が縋るように俺を見る。

できないこともない。土下座でも、こつから本気を出しても、だが、それは。少しずつ、思考が切り替わるのを感じる。

やつてしまおうか。よく考えたら何で俺がこんなことにつき合わなければならない。いつものように、ぱつとやつて終わりにしようか。
すつと目を細める。

まあ、この学校生活、唐突にキレる不良として生きるのも悪くない。日立てないとほいえ、そろそろ黙つてああいう奴らを見てるのもしんどくなってきたところだ。

「…ヒツキー？」

雨の音が聞こえる。ボロい小屋が頭に浮かぶ。

しようがない、本当にしようがない。

「…な、なに？なに睨んでんのよ…？」

「…ヒキタニ君？」

あいつらが少し怯えたように俺を見る。

外野は空気が変わったのを察したのか、緊張した顔で俺たちを見ていた。

確かに軽率に勝負を受けたのは俺たちだが、なにもこれ以上することはない。

大丈夫、由比ヶ浜はあいつらの友達だし、戸塚だつていい奴だ。野次馬どもも由比ヶ

浜達と俺を同一視はしないだろう。

お前らは違うところでリア充やつてりやよかつたんだ、勝手に踏み込んできたのが悪い。

い。

他人を軽んじるな。自分達を驕るな。

ゆらつと立ち上がる。全部台無しにして——

「—これは一体何の騒ぎかしら？」

熱くなつた俺の思考を冷やすように。

氷の女王、雪ノ下雪乃の声がコートに響いた。

「まつたく、少し離れただけで良くこんな訳のわからない状況を起こせるわね。」

「…いや、俺悪くねえし。」

何であいつの中で俺がなんかした事になつてるんですかねえ…。

いや、これからなんかするつもりだつたけど。

「まあ、大体何があつたかは想像がつくわ。そこのヒステリックそうな人を見ればね。」

「…ちよつと、それあーしに言つてんの?!」

「あら、ごめんなさい。明言は避けたのだけれど、当てはまりそうなのはあなただけだものね。隠す意味なんてなかつたわ。ヒステリックそうな三浦優美子さん。」

「…つ、あんたねえ！」

激昂する三浦を視界から外し、雪ノ下は由比ヶ浜のところまで近づいて行つて持つていた救急箱を渡す。

「由比ヶ浜さん、向こうで怪我を手当てしておいて、後は私が引き継ぐわ。」

「引き継ぐつて、…お前テニス出来んのかよ。」

そんな会話を聞いていた三浦は、歪めていた顔を、いつもの勝気な表情に無理矢理のようになえた。

「へ、へえ。今度は雪ノ下さんがやるの？悪いけど、初心者だからつて手加減出来ないよ？顔とか当てちやうかも。」

「あら、気遣つてくれるなんて優しいわね。お礼に手加減してあげるわ。顔は気に

しなくていいから安心なさい。」

どこまでも舐めきつた雪ノ下の言に、三浦はまたもや、顔を引攣らせる。

「すぐ戻るわ。」

と、雪ノ下は準備の為か、奥に引っ込んでいった。雪ノ下が通る所は、いちいち人がさあつと避けていく。

俺は、今一体何をしようとしたのか。こんな所で事を起こすなんてどうかしてる。三浦達は一般人だ、あいつらとは違う。

身体から嫌な汗が出る。もし、雪ノ下が来なかつたら、俺は。

「比企谷君？ なにをぼーっとしているの。」

雪ノ下の声ではつと意識を取り戻す。あれ？ もう帰ってきた？

「まあ、少しごらいならそのままでもいいわ。」

どう言う意味かを聞く前に、雪ノ下はさつさと後ろに行つてラケットを構える。

「ほら、いいわよ。打つときなさい。」

挑発するように、雪ノ下がそう言つた。

三浦はそんな雪ノ下を睨みながら、ボールを上に投げる。

ばあん、と言う爆ぜる音とともにやはりうまいところにボールが行く、もちろん俺にも球は見えている。最初に比べれば目も慣れて追いついて打ち返すならば出来るだ

ろう。

球に反応した俺が身体を切り返す。

「私が打つわ。」

後ろから聞こえた声に思わず身体を止める。

いや、打つって言つても…。

雪ノ下はもう球が来る場所にいた。

ラケットを引き切り、体重を落とし、完全に準備万端だつた。

ばかああん！と三浦の時より更に大きい音がする。

雪ノ下の打ち返した球は、三浦と葉山の間を抜け、後ろの金網にぶち当たつた。

三浦は呆然と球を見ていた。葉山は苦々しい顔をしている、まるで予想通りと言うよう

うに。

ギヤラリーも、本日何度目かの沈黙に包まれていた。

「言つてなかつたかしら、私もテニスが得意なのよ。」

雪ノ下はいつものように、王者の顔でそう言つた。

なんでも出来るなこいつ。

「お前、テニスもやつてたのか。」

「ええ、3日だけね。」

え、短い。

「私、天才だから大体なんでも3日で出来るようになるのよ。」「えー、まじ? 逆3日坊主とかほんとにあるんだ。」

にしてもかなり本気だな。

俺が割とドン引きしていると。雪ノ下は目線をベンチの方にやつた。由比ヶ浜が戸塚に手当てを受けている。因みに審判は違うテニス部になつていて。

「…私にだつて、怒る時もあるわ。」

…なるほど。まあ、あのことに関しては俺の不甲斐なさもある。結局手を抜いて、由

比ヶ浜に無理をさせてしまつた。

雪ノ下は、目線を三浦達に戻す。

「さあ。昼休みは長くないわ、早くしてもらえるかしら。」

激おこゆきのんである。

♪

雪ノ下は圧倒的だつた。

ほぼ一人で球を打ち返し、どうしても届かない所には俺に声をかけ打ち返させる。

形勢は、一気に逆転。元のスペックは高いとはいえ、初心者である葉山も、足を引つ張る形となる。俺がそうならないのは、ひとえに雪ノ下の立ち回りのうまさだろう。

材木座もこつち側に寄つてきていて、圧倒的じやないか我が軍はあ！とか言つてゐる。

瞬く間に2ゲーム目を取り返す。すげえな。アイシールド21の阿含かよ。
本当に俺やることないな。と、自分の無力さを噛み締めて、3ゲーム目も終盤と言う時。

三浦の打ち返したボールが雪ノ下の横を通つて金網を揺らす。
雪ノ下は微動だにしない。

…?

「…おい？ 雪ノ下？」

「…比企谷君。私天才だから大体なんでも3日出来たのよ。」

「…いや、さつき聞いたけど。」

いや、普通にすごいと思うけど。

…まさか。なんでも3日以上したことがないって意味か？

それはつまり。

「私、体力の無さには自信があるの。」

そう言つて雪ノ下は膝をついた。めっちゃやりきつた表情である。

いや、確かに2ゲーム目を40—15だったのを巻き返し、3ゲーム目をほぼ一人で

捌いていた雪ノ下は途中からミスが目立ちはじめ、点差はほぼ無い状況。むしろ今まで
40—40、大ピンチである。

やばくない？

「聞こえてるんだけど？」

三浦も息を切らしながら、しかしまだ余裕のある表情でそう言つた。
「どうする？ 降参する？」

どうするべきだ。もう変な行動に頼ろうとする考えなどなかつた。

こいつらはこいつらで、途中からただの勝負としてテニスをしていたのだ。
「…いいえ？ 降参なんていう選択肢はないわ。決着はこの男がつけるもの。」
まあ、最後はそうなるだろうな。

「…はつ、そいつが？ 無理っしょ。あーしも隼人もまだ体力十分だし。さつきまでの
そいつの動き見てなかつたの？」

「ええ、もうあとはこの男一人で十分だわ。」

雪ノ下は俺に目線を向ける。

「何をどうすればいいかはもう十分見たでしよう？ 私は疲れたから後は頼むわ。」
三浦がまた、顔いっぱいに怒りを表す。侮られていると思つてているのだろう。
対して葉山は俺の一球目を覚えているのか警戒を緩めてはいない。

俺はラケットを握り直す。

今回俺はほぼ役に立つていない。

あまつさえ、手詰まりだと全てを投げかけた。

ずっと手を抜き、傍観に徹した俺は、依頼に対して、何よりこいつらに対しても失礼だつたろう。

半端に強くなつたからこそ驕り。

ずっと戒め、憎み続けたはずのその態度を。俺は無意識にとつていたらしい。

雪ノ下と位置を交代し、ボールを受け取つた。

確かめるようにボールを握る。

ゆっくりと、フォームをとる。

雪ノ下の言つた通り、これまででレベルの高いやつらの動きを見れた。

所々打ち返すことで打ち方もわかつた。

雪ノ下はこうなることを予想してたのだろう。

敵わないな、と。笑みを浮かべる。

脱力する。

イメージするのは、常に最強の自分！

ばかああん！

一球目に勝るとも劣らない速度の球を打ち込む。

しかしこれはあらかじめ準備してい葉山にギリギリで拾われる。

緩く帰つてきたボールを、更に強く、反対側に打ち抜く。

今度は三浦が追いついた。葉山よりかはいい球だが、難なく俺は更に、更に強く真ん中に打ち込む。

「つつああ！」

これにも三浦が喰らいつく。

だが、俺の球の勢いに負け、ゆるゆると来る球は、チャンスボールでしかなかつた。ラケットを両手で握る、渾身の力を込め、全身の筋肉に力がこもる。

三浦が目を見開く、この球は抑えられないと分かるのだろう。

ズばん！と、テニスボールから出るとは思えないような音ができる。

間違いなく最速の球は、金網を大きく揺らし、ギヤラリ一から悲鳴があがる。

少し間を置いて、歎声があがる。逆転に次ぐ逆転。新展開に次ぐ新展開。場の雰囲気は最高潮である。

あと一点で俺たちの勝ちが決まる。

ガラにもなく熱くなつてゐる。思えばこの一件は最初から随分と燃えていた。腑抜けてはいたが。

今更、スポーツなんかにかける時間は無いけれど。俺は青春とやらに憧れていたのか。

ボールを高めに投げる、ラケットを限界まで振りかぶる。

2人には悪いが、一球前より遅いことはあり得ない。

本気の、本気だ。勝ちは貰う。

この時俺は油断したのか。それとも。いつもの、『誰かにぶつける』と言うイメージがそうさせたのか。

とにかく、手元が狂ってしまったのだ。

俺は球が当たる寸前に、自分の球がどの方向に飛ぶかにようやく気づく。
やばい、三浦に当たる。

なぜ、そんなつもりは全く無かつたのに。この身体は、なぜ。

当たれば間違いなく無傷では済まない。流石に球に追いつく技術はない。

「つ優美子お！」

しかし、彼は間に合った。最初から、注意深く俺を見ていた彼は。

一度跳ねた球が当たる寸前、三浦は横から来たタックルに押し倒された。

「…ぐつ、優美子、怪我は？」

「はつはや、はややや。」

膝を擦りむいたらしい葉山は少し顔を歪めたがすぐに笑つて三浦を気遣う。三浦は顔を真っ赤にしてあわあわしている。

まじか、追いつきやがつた。

身体から力が抜ける。そしてすぐに謝ろうと駆け出す。

「…す、すまー」

「おおおおおおおおおおお!!!」

と、大歎声が俺の声をかき消した。

今度は H A ☆ Y A ☆ T O と葉山コールと共に胴上げが始まつた。

しかもそれに混じり。

「ふつ、流石は鬼の比企谷と恐れられた男。侵略者に対しテニスで制裁を図るとは、あれぞ噂に名高い、”キラーボール”」

と言う声が聞こえた。

つ材木座ああああ!!?!!?!!? (ガチギレ)

違う、わざと同じやない、本当にわざと同じや無いんだ。

しかし、ギャラリーからはキラーボール、あれが：みたいな声があがる。定着すんな、受け入れんな。最低だな…と言う声も聞こえてくる。

死にたい。本当に死にたい。

そのままギャラリー達は葉山を胴上げしながら何処かへ行つてしまつた。

誰もいなくなつたコートに、コロコロと虚しくテニスボールが転がる。

「ひ、ヒツキーすごいよ！勝つちやうなんて！最後のもわざとじやなかつたんでしょ？」

「そ、そうだよ比企谷君、僕の為にごめんね!?」

「勝負には勝つても戦いに敗れたわね、そういう星の元に生まれたのかしら。」

みんながやんわり慰めてくれる。いや、最後のは慰めてねえな、とどめ刺しに來てる。ゆつくりと空を仰ぎみる。

青春の、ばかやろう。

そのあと、戸塚にテニス部に誘われたり、雪ノ下と由比ヶ浜の着替えを見てしまつた
りした。

まあ、プラマイゼロと言うことで。

懐のケータイが震える。

恵理さんからか。

「どーもー、影喰らいさん。今日は大活躍だつたそうですね！」

「…見てたんですか。」

「んふふふ。見てたのは私じゃなく。『調べ屋』さんですけどね！あの人も貴方のファンですか、たまに貴方の生活とか報告してくれるんです！」

「…まさかよ。」

『調べ屋』砂上詩織、会社がちよくちよく頼る情報屋で、パソコンに異常に特化したヒキニートである。何度か会つたが、ぱつと見はただのダメ“女”。メンヘラ気味で元彼を何人か殺したらしい。まあ、殺された奴らも砂上にDVしていたクソ野郎どもだが。

初めて会いに行つたとき、たまたまその現場に居合わせ、うつかり俺が相手を殺してしまつた。それ以来初めてまともな男を好きになつたとかでちよくちよく接触を図ろうとしてくる。本人曰く、今まで付き合つた中で殴つてこなかつた奴はいないらしい。どうも私には男運が無いらしいとも。

「いやー、青春ですねえ！最後酷かつたんですけど…影喰らいさん、今からでもそつちに行くのは遅くなー」

「仕事の話をしましょ。次はなんですか。」

恵理さんが何を言おうとしたかは大体分かる。だが、俺は足を洗うつもりはない。

「…わかりました。」

今度の依頼は、またマフィア関連です。しかし直接彼らの所に行くのではなく。彼らに武器を流してやる奴らを抑えてほしいと。」

恵理さんの声色が変わる。しかしいつもより緊張しているように感じる。

「なんかあるんですか。」

俺が続きを促す。

「…今回の件に囁んでいるのは、『ラバーズ』と呼ばれる組織です。」

世界最大にして、最悪のテロ集団。色々な場所に関わっている彼らが、その武器の取引を請け負っています。」

調べ屋

ラバーズ。

おおよそ20年前から活動をはじめたテロ集団である。未だに人数、信条、本拠地、具体的な構成、そしてリーダーも、何一つとしてよく分からぬ集団である。

活動も様々で、爆破テロや、発砲、毒ガスや人間を切り刻んで公道にばら撒いたりといつた、過激で残忍なものから。建物や車を壊しまくつたり、馬鹿でかい落書きを描いたりというイタズラみたいなものまで。彼らの活動には一貫性がなく、ただただそれが好き勝手に暴れまくつてゐるようと思える。実際明確な組織としての形も認められておらず。“ラバーズ”と言う名前をいろんな奴らが勝手に名乗つて暴れてゐるだけだとも。

しかし近年、彼らの活動は一気に複雑に、そして集団性を持ちはじめた。一説には構成員が数十万にものぼると言われる彼らは、中には頭がキレ、社会的に高い地位を持つ者もいるらしく。そういう奴らがある程度活動をまとめたり、必要なものを揃えたりしているらしい。

武器の密輸、爆弾の作成、情報操作に人員の割り振り。曖昧模糊としていた彼らの体

系は、急速に何らかの形を作ろうとしていた。

「彼らの一番恐ろしいところは思想の伝播です。信条やテロ行為に関する要求なんかは何もありませんでしたが、逮捕されたラバーズはみんなそろつて”面白そうだったから”と言っていました。彼らの目的は人生を楽しむ事、だそうです。具体的にどう言う内容で勧誘されているのかは分かりませんが、SNSや実際に人が話に来たりで構成員を増やしてはいるらしいです。彼らの狂信はもはや洗脳の域です。昨日まで普通に生活して、普通に家族とご飯を食べて、普通に会社に出勤してたような人が、唐突に身体中に爆弾を括り付けて道のど真ん中で木つ端微塵になります。武器や爆弾もこれまで現地調達で、質は悪いですが武器の流れでテロの予兆を察知する事が難しかったんです。彼らの思想は人間が誰しも持っている理性のタガを簡単に外してしまう。頭のネジを正確に、迅速に引っこ抜いて行つてしまうのだ。

「今回の依頼にはそいつらが絡んでいます。彼らの危険度はピンからキリまでですが、マフィアと絡んで武器を入れてくるような奴らです。ラバーズの中でも大きい集団だと思われます。

しかも、実はまだどこで取引が行われているか分からいんです。」

「俺への依頼は取引場所を探す所からですか？」

「半分正解で半分間違いです。」

「ん？ ジヤあどうすれば？」

「…影喰らいさんには、先程話題に出た彼女の所に取引の場所を聞きにいつていただきます。」

「…いや、何で俺が。普通に会社が聞けばいいでしょ。」

「そうしたいのは山々なんですが、彼女が久しぶりに貴方に会いたいとぐずつたらしく。変に長引かせても面倒なので影喰らいさんの任務に組み込まれたんです。」

まじかよ。あの人の所に？

砂上さんまじでちよくちよく頭おかしいから怖いんだよね。

「詩織ちゃんとは友達ですが、私も面と向かつてとなると少し怖いですし…。
まあ、影喰らいさんなら大丈夫ですよね！」
いや、大丈夫じやねえ。

金曜の夜、俺は東京の目黒にある高級マンションに來ていた。ロビーの自動ドアは前に立つただけで何故か開かれる。彼女が開けてくれたのだろう。
彼女には世界の大体のものが見えている。人間性こそ崩壊しまくっているが、間違いなく世界最高峰のクラッカーだろう。

彼女なら、確かに会社の調査員でも見つけられない取引の現場を調べられるかも知れない。

地上18階。あらゆるものが下に見える部屋に彼女は居る。

俺はドアの前に立っていた。ノックしようと手を上げる。

「あ、えへ。ハチくん、来てくれたんだ…。久しぶり、だね…。」

と、ドアをノックする前に彼女は現れた。俺は最初の一回以来、このドアをノックできた事はない。

ドアを開けて出て来たのはいやに不健康そうな20代半ばぐらいの女性である。服装は、パンツにノーブラタンクトップ。正直目のやり場に困るが、ほとんど来客のない彼女にとつては何の問題もないらしい。俺が来ることを事前にわかるなら、ちゃんと上と下を着てほしい。

「えへ。男の人って、こういう格好、すき、でしょ?」

大好きです。いや、そうじやなくて。耳につけた無線からガリガリと何かを引っ搔く音がする。怖い。

彼女は、赤みのかかった髪を首元でまとめており、眼の下にはクマがある。肌は相変わらず色が悪い。身体もその歳の他の女性と比べると痩せすぎている。しかしアンバランスに盛り上がる胸部が、彼女の女性らしさを強調する。

思わず目が吸い寄せられてしまう。

「えへ、さわる…？」

「…何で俺が来たかは知つてますよね。仕事の話をしましよう。」

俺は話を切り替えさせる。少し迷つたのは内緒だ。

砂上さんは残念そうに眉尻を下げ、パソコンの方に歩いていった。部屋が汚い、ゴミだらけだ。

パソコンを立ち上げながら彼女は俺に話しかける。

「あ、そう言えば…。珍しいね、ハチくんが学校で目立つのって。最後はちょっとかつたけど…。」

「…俺の生活盗み見るのやめてもらえませんかねえ…。あと名前で呼ばないで下さい。」

「えへへ…、ごめんね…？ 気になつちゃつて。仕事中だし影喰らいくんだけね。」

なんだか、学校でも女の子の友達できたんだね…？ 中学三年生以来かな。かおりちゃんも元気？ 高校の子は雪ノ下ちゃんと由比ヶ浜ちやんだつけ？ ふたりともかわいいね。由比ヶ浜ちゃんの家は普通だけど雪ノ下ちゃんの方はお父さんが県議会議員で、建設会社もしてるんだね。知ってる？ もうすぐ千葉に建つ高層ビルの建設には、雪ノ下建設が大きく貢献してるんだって。」

砂上さんはつらつらと、他人紹介をする。

「由比ヶ浜ちゃんは一人っ子かー、お母さんも綺麗な人だね。雪ノ下ちゃんにはお姉さんがいるみたい、仲はあんまり良くないらしいよ？みんな美人だなー。」

「…あいつらには、関わんないでやつて下さい。」

「え？うふふ。そんなことしないよー？えへ、かおりちゃんにも結局何もしなかつたでしょ？」

この人は、危険だ。間違いくなく。やつてきた事がまだマシなだけで、本質は奴らと同じ、他人を簡単に地獄に落とせる人間だ。

俺が中学時代、唯一しやべっていた奴と縁を切つたのはこの人が原因だ。

この人は、あいつを殺そうとした、間接的に、あくまで間接的にだが。

「うふふ。影喰らいくんは優しいね、今までの人と違つて殴つてこないし、力づくりでセツクスしようともしない。でも、したければしてもいいよ？痛いには痛いけど、そうされるのも嫌いじやないよ？そうされた後、殺しちゃうのも好き。」

砂上さんは顔を赤らめ、目線を俺に向けたり手元に落としたり。手はいじいじと絡め、セリフさえ抜けばただの乙女に見えた。セリフさえ抜けば、「…遠慮しどきます。」やはり、砂上詩織はサイコバスだ。

「あ、取引現場のことだけど、結構手間取っちゃつた。ラバーズはすごいね、イメージと違つて、とっても慎重だつた。」

「最初はマフィアの事務所を出入りする車を追おうとしたけど、意外に毎日出入りが多くて、しかもほん海岸や空港に近寄らない。個人が密輸する分じゃ出回つてると計算が合わない。仕方ないから港の方を調べたんだけど。」

「いや、港も十分数多いでしよう。」

彼女はようやく調子が安定したのか、詰まらずに喋り出す。

「もちろん範囲は限定したよ。マフィアさんたちの本拠地のある神奈川を中心に調べたんだけど、どれもぱつと見は怪しいものはなかつた。ぱつと見はね。」

「ある一つの魚介類を揚げてる倉庫がちよつとおかしかつたんだよね。ほらここ。五つの似たような倉庫が並んでて、全部大体同じ作り、船から直接倉庫に荷物を揚げられる。この五つは、全部およそ均等に船が出入りして、それを受け取る食料品店の車だつたり、運送会社のトラックだつたりもその数に見合つた台数出入りしてた。」

「ただ何週間かに一回だけ出入りがおかしくなるんだよね。昨日までそこの倉庫に入つてた漁船や車がとなりの倉庫に入つてる。代わりに今まであんまり見なかつた船と車がそこにに入るの。」

とても上手に偽装されてるけど、車番や乗つてる人も少しづつちがう。人種こそ日本

人だけどね。」

「それで気になつて、まず船の方を調べたら、日本の領海の外でオーストラリアから来た船と合流してゐる。夜中に海の上で何かを渡してたんだよな。海は隠せるものがない。天氣さえ良ければよく見えるんだ。箱もしつかり偽装されてたけど、そのオーストラリアから来た船を追えば、何が入つてゐるかはすぐわかつた。」

「車の方は、一回スープーマーケットに入つて荷を降ろしてゐる。今度はそのスープーから3台のバンとか、トラックが出て來たね。それも実在する食料品店とかのにカモフラージュされてゐるけど、それぞれが別々の道を通つて最後にはそれぞれがマフィアの事務所の近くの別の

民家に停車してゐる。と一つても普通そのお家だけ、セキュリティだけがいやに硬い。その車はその家のガレージに入つて、運転手は外に出て家の主人とにこやかに雑談してゐる。夜中にね。逆に目立たない? カモフラージュだとは思はうけど。車はものの数分でガレージを出る。3台に分けたのは降ろし易くする目的もあつたのかもね。」

と、一息にしゃべつてしまつた。

「えーと、つまり見つかつたつてこと?

「…よく見つけましたね。」

「えへ、すごいでしょ? もうちょっと褒めてくれてもいいよ…?」

「これ、マフィア自体への受け渡しは…。」

「普通に車で何人かが取りに来てるね。今度は電気会社に偽装してる。検問とかにひつかからないのはちよこちよこ根回しが効いてるってことかな。」

なるほど。ともかく、これで場所は分かつた。やはり砂上さんを頼ったのは正解だつたらしい。

「にしても、何でこんな遠回りを…。」

「警察も一枚岩じやないからね。捜査とかはある程度誤魔化せても、普通に見つかつたら終わりなんだよ。特に最近は正義感の強い人が権力を持つたからね。」

はあん、なるほどなるほどなあ。

「因みに、次いつ取引があるとかわかりますか。」

「うんとね、明日の夜だね。」

「…え、」

「昨日の深夜に船がオーストラリアのと合流したから、大体そのくらい。」

まじ、かよ…！

「恵理さん。」

「はい、すぐ手配します。」

俺も出発の為に立ち上がる。

「…あれ、もういつちやうの…?」

「すんません、ありがとうございました。」

手早くお礼を言つて立ち去ろうとする。失礼だとは思うが、時間が惜しい。

「えー。じゃあ、せめてちゅうして?」

「…は?」

「私頑張ったから、ちゅう。」

「え、まじで? いや、までまで、唇に毒とか塗つてない? この人ならやりかねない、いやそうじやなくて。」

「ほら、んー。」

やばいスタンバイしてゐるいや実際この人すごい頑張つたしそのくらい別にお礼だからこれ頼まれてやつてるからやましいこととかないからこれ

「その辺にしとけよ雌犬」

と、いやにドスの効いた声が俺の胸ポケットから聞こえる。

「…携帯?」

「…あれ、恵理ちゃんまだいたんだ…。」

「ええ? いましたよ? 必要なことは全て終わらせましたから、後は影喰らいさんだけです。早く返してもらつていいですか?」

「恵理ちゃんのじや、ないよね。ハチくんも満更じやなさそうだつたし、合意だよ？」

「…へえ、そうなんですか？」

いやいや、まじ抵抗しましたから、侍ジャパンですかから自分。

「だ、そうですよ？」

「…ふうん、ハチくん、そんなこと言うんだ…。」

やばい、ほんとにやばい、どのくらいやばいかと言うと、割とやばい。

「…ああ、そうだ。影喰らいさん、今そちらに今回の任務のパートナーを送りました。」

「え、パートナーいるんですか。誰ですか。」

えー、やだな、1人が良いんだけど。

恵理さんは、たつぶりためて、その名前を口に出す。

「今回のは、『 悪逆』さんです。もうそちらに迎えにあがりましたよ。影喰らいさんが降りてこなかつたら上まで来てしまおうかも。」

「…ちつ」

砂上さんが舌打ちする。まじかよ、あいつか、砂上さんと『 悪逆』はかなり仲が悪い、というより砂上さんが一方的に嫌つていてる。かく言う俺も、『あの』脳筋が得意なわけではない。むしろかなり苦手だ。

「…分かつた、今回は諦める。でも、また来てね？ハチくん。」

と、顔が近づいて来たと思つたら、ほつぺにキスをされた。
え、ちよつと。

「唇は、君からしてくれるまでとつとくね…？」
と、彼女はいたずらっぽくわらつた。

「…え、今なにしたんだおまえ。ちよつと?! 影喰らいさん！ 何されたんですか！ 怒ら
ないから教えてください！ ねえってば！」

砂上さんはニコニコと笑つてゐる。

彼女とは色々あつたのに。

その笑顔に、不覚にもだいぶどきつとしてしまつた。

」

その後、部屋を出て、一階まで降りてマンションを出る。

まだ、頬にあの感触が——。

「よお!! 久しぶりだなハチ公！ 相変わらず目え死んでんな！ ちゃんと飯食つてんのか

!?

俺がさつきキスをされたところをなぞりかけたかけた瞬間、2メートル近い大男に襟
首を掴まれ持ち上げられた。

ぶつとい男の腕を根元にブラブラ揺れながら、この先の展開に絶望し、キスぐらうす

れば良かつたと後悔した。

タツグ

「はははははは。ハチ公！まあまあ背伸びたんじゃねえか？男らしくなりやがつて！そろそろこれの1人や2人できたんじやねえのか！？恥ずかしがらずに言つてみろ！ん！」

いや、うるさい。すぐくうるさい。めっちゃ小指立ててる。

マンションの前で会つてから場所を変えようと言う事で、俺たちはサイゼリヤに來ていた。

この男、ファミレスでも御構い無しにうるさい。

「いや、いませんよ。あと他のお客様のご迷惑になるんでボリューム下げてください。」

店員さんも注意しようとの席を遠目に見ながらおろおろしていた。まあ、この男相手ではなかなか勇気が出ないだろう。あ、いま店員さんと目があつた。あれ？めっちゃ逃げられた。え、俺？俺なの？

「おお、すまん。久しぶりに会えたからな。ふふふ、若い奴の成長は嬉しいもんだ。ん？どうした。目がひどいぞ。」

「……なんでもないです。ともかく、俺の今回の相方は千川さんですか。」

「おう俺さ、ハチ公。よろしくな。」

「この人は、ハチ公。よろしくな。」

年齢は36歳、身長は198cm、これでも純日本人である。短く刈り上げられた髪に整えられた顎鬚。右頬に走る傷。獣のように鋭い目と整った顔立ちは、盛り上がった筋肉と相まって、ザ・兵士といった風貌である。

この人と俺とは部署が違う。俺は暗殺部門。この人は多対多だつたりの通常の戦争に派遣される兵士部門。

因みに砂上さんが俺をハチくんと呼ぶのは本名からだが、この人のは違う。俺のIDからだ。会社に入つてからあだ名がつくまで、（もちろんつかない人もいるが。）俺たちはIDで呼ばれる。俺のIDはA-88、アサシン88番目というわけだ。だからハチ公。この人とは影喰らいの名前がつく前からの付き合いなので、最初の任務でそう呼ばれ始めたのだ。

恵理さんはO-169、千川さんはS-1035だ。恵理さんは若手だが、千川さんは中堅、しかも比較的あだ名の付きにくい兵士部門の中で入社ふしてすぐにあだ名のついた実力派である。あだ名の由来はこの人の戦い方。この人はとにかく腕力が強く。弾が尽き、ナイフが折れても素手で戦う。人の頭を引っこ抜いたりぶん殴つて顔面崩壊

させたりガチで鰯折りしたりと。あまりに暴力的な戦闘スタイルから、戦場で敵と味方から尊敬と恐怖をこめて”悪逆”と呼ばれるようになつたらしい。

実際一緒に任務に出た時はやばかつた。戦術なんてあつたもんじやない。人がゴミのようでした。

「いやあ、お前と組むのも久しぶりだなあ。イギリス行つて核のボタン止めた時以来か。」

「…そつすね。一年ぐらいですか。」

そう、そういうこともあつたのだ。懐かしい思い出だ、あの時のミッションはマジインポツシブルだつたわ。

この人と組んだ時にはとある法則がある。それは任務の内容がアメリカンになることだ。無駄にスケールがでかい。色々爆発してたくさん敵が出てくる。それが元で社内では”ハリウッド”とも呼ばれたりしている。

「懐かしいなあ、お前もあんときやベソかきながら戦つてたもんなあ。俺にもしんどい仕事だつたからしやあねえがな。」

「そりや手持ちの弾数と敵の数が合わなくなつたら絶望するでしょ。あれマジでどつから湧いてたんですか、クローンヤクザとかの親戚だつたんじやないすかね。」

「まあ、ドイツ語でスツヅオラーとか言つてたがな、多分人間だろ。」

あの時の敵は、そう、ナ○スだつた。

敵までハリウッドなのである。

絶対今回も大変な事になる。

なぜよりによつてこの人なのか。もつといただらう。『無綴兄弟』とか、多対多なら

“青山羊”とかでもいいし。

「なあに、ちょうど一つ仕事が片付いて暇しててな、んで日本に帰つてた時にたまたま声がかかつたのよ。前の仕事もやばかつたぞ？荷物届けるだけの簡単なお仕事かと思ひきや、ブツの中身が女でな？しかもよくわからんねえ奴らに追われるし。いろいろあって最終的に依頼主ぶつ殺して解決したわけよ。」

トランス○一ターかな？

やべえ、ハリウッドフラグバリ3だわ（ダサイ）。大丈夫だよね？ナパーム弾とか落ちてこないよね？

「まつ、気合い入れていこうぜ！」

：帰りてえ。

：

そのあとは、別れてお互い装備を整えにそれぞれのセーフハウスに向かつた。

今回の任務は暗殺ではない、それなりに装備もえていかなくてはならないだろう。

不謹慎ではあるかも知れないが、任務の前に装備を整えるのも楽しかったりする。

と、言うわけで。

今日の装備は、耐熱性のインナー、防刃のパーカー、その上から防弾ベスト（10万円弱）、SMG（MP7）ダットサイト三点スリング付き、ハンドガン（いつものやつ）。これは大腿部にホルスターで装着。ナイフのシステムは右の前腕部にくつつけている。マシンピストルの弾倉は三連のをベストの前にくつつけて、ハンドガンのは左の脇腹につけている。念のために救急ポーチも左大腿部につけて準備完了である。色は黒に統一されている。

しかも、なんと今回、今日届いたばかりの新兵器を持つてきている。

ふふ、使うのが楽しみだ。

（

「影喰らいさん、今日の作戦は、まず影喰らいさんが倉庫に侵入、中で取引が行われているのを確認したら悪逆さんが倉庫に攻撃、これは陽動です。相手が混乱している間にその場にいると思われるラバーズの現場指揮官を捕まえて下さい。船で逃げようとすると見積もられるので、そのままジャックして逃走とかもいいですね。頑張って下さい！」

日曜夕方、神奈川県某所。

俺は千川さんと合流し、千川さんの車に乗せてもらっていた。

千川さんの装備も基本俺と同じだが、メインはアサルトライフル（スカーライト）グレネードランチャー付き、ハンドガンはジエリコ、帽子もかぶついていてライトが組み込まれている。色はデザート迷彩らしい。逆に目立たない？

そして、持ってきたのはそれだけではないようだ。

「…凄い量ですね…。」

「だろお？今日は気合い入れてお気に入りをやましこ持つてきた。楽しくなるぜ？」

俺が見たのは後部座席である。ケースにこそ入っているが、何が入っているかわ明白だ。

スナイパーライフルに無反動砲、HMGに凄い量の弾薬だ。グレネードランチャーの弾や手榴弾もある。

絶対ハリウッドだ、間違いない。爆発オチが目に見えている。

「ん？お前、左手首についてるやつは…。」

おつと、バレてしまつたらしい。

ふふ、そう。これが、これこそが俺の新兵器。

その正体に気付いた千川さんは、大きく目を見開き、小さく震え始める。

やはり、この人には“これ”的価値がわかるらしい。

「お、お前、そりやあまさか…。」

「くくくく、そう、そのまさかですよ。」

「え、え、なんですか。声しか聞こえないんでわかんないんですけど。何があるんですか。」

恵理さんも気になつてしまつたらしい。きつと二つの名前を聞いたら腰を抜かしてしまふだろう。

「そう。こいつは…、アサ○ンブレードです。」

「う、う、うわああああああああ!!!」

「…？え、えーと、わ、わああああ。」

いや、なんですかそれ？会社から暗殺部門に配られたとかです？」

千川さんは名前を聞いた途端、感極まつたのか叫び出してしまつた。（運転は器用にこなしている。）しかし、恵理さんは、ピンときていないう様である。
あれー？おかしいな。いや、あれですよ、フード目深にかぶつて色々ぶつ殺していく伝説の暗殺教団に伝わるあれです。

「お前、それをどこで…？」

「ふつ、特注で作つてもらいました。結構かかりましたけど。」

そう。俺の金の使い道なんて本か装備しかないものである。いや、まあ他にも少しはある

るけど。なんとなく欲しかつたのでつくつてもらつた。

千川さんは俺も買つかない。とうんうん悩んでいる。

「…男の子ですねえ…。」

と、恵理さんは呆れ氣味だつた。

そんなこんなで件の倉庫である。

「んじや、なんかあつたら無線で連絡してくれ、俺はここで合図待つてるから。」

事前に見た資料には、倉庫には横にも入り口があり、待合室やら当直室がある。まずはそこから入つて中の様子を探る。

しかし、倉庫についてから、なにか漠然と、いやな雰囲気を感じ取つていた。

「…ハチ公。なんかおかしい。車はあるが人の気配がしねえ。いや、これは隠れてるな。公にはやれない事だつても、この警戒度はおかしい。やーな空氣だ、気をつけろ。」

ちょうど千川さんから無線が入る。外から見ている千川さんも何か感じているらしい。

扉に手をかける。ゆっくりと開く。右手にLMGを握り、ストックを脇に締めている。

するりと中に入り、左手で音を立てないようにゆっくりと扉を閉める。

電気がついていない。もちろん点けたりはしないが、明かりがない。やはり何か妙である。

とりあえず扉を入つたら右だ、すつと壁際に移動し、銃をかまえ、左肩を壁に付けるようにして歩く。突き当たりを左に曲がれば倉庫本体だ。人の声は聞こえない。あと少しで突き当たりだ。

そこで、その突き当たりの壁に何が紙のようなものが貼られてることに気付く。

：貼り紙？中国語：か？

一気に嫌な予感が膨らんでいく。

頭の中で、一つの考えが形を持つ。

最近あまり中国語には触れて無かつた上に、手書きらしく。解読に時間がかかる。そして、その内容を理解し、全身の皮膚が泡立つのを感じた。

“くたばれ影喰らい”

瞬間、轟音と衝撃。

俺の意識はそこまでだつた。

接敵

「……！　おい……！」

……んあ、……なんだ……？

「おい！　ハチ公！　状況送れ！」

……？　誰だ？　今どうなつて。

「ハチ公！！」

……！

覚醒。脳が目から入る状況を高速で処理し始める。

敵5人、右2人左3人、銃指向、引き金引くまで3秒。

ガバッと身体を跳ね上げる。いきなり立ち上がった俺に敵は身体を一瞬硬直させる。

まずは左、一番手前にいた奴の銃の被筒部と銃把を掴み、ひねりながら押し込む。そいつを盾にしながら直進、ゴリ押しで他2人を押しのける。そこで反転。今度はそいつの首に手を回し、膝を後ろから蹴つて体制を崩す。同時に太ももから銃を抜いて発砲する。1人一発、3人死亡。

右から撃つたので一番左で手前にいた奴が残った。盾に使つてた奴を左の奴にぶつ

け、両方射殺する。

死体を瞬時に観察する。私服、中国人、武器はそれぞれで種類が違う、しかし質は悪くない、少なくとも海賊版とかではないだろう。だが俺の取り囲み方から見て戦闘の訓練を受けたわけじやなさそうだ、銃のフォームも悪かった。マフィアの構成員？

近くに積まれた段ボールの陰に身を隠し、今度は周りを観察する。爆発でかなり崩れたらしい。俺が貼り紙を見た時、左の壁が爆発した。壁の反対側に仕掛けられてたのか。

「おい！ハチ公！どうなつてる！死んだのか!?」

「…生きてます。すんません、気絶してました。待ち伏せされてたみたいですね。」

「くそっ、外も最悪だ、倉庫の周りを包囲された。となりの倉庫にもぎゅうぎゅう待機してたらしい。」

「…影喰らいさん！良かつた、無事だつたんですね！なんとか今すぐそこを離脱して下さい！」

嵌められた、俺が来ることが分かつてたのか。情報漏洩？会社の中にもラバーズがいるのか。

敵の足音がする、かなりの人数、全員が武装してると思つていいだろう。外からは車両の音、高火力火器も持つてているかもしねれない。

：やべえ、これ生き残れるか？

と、俺の頬に冷や汗が一筋流れた時。

外からアメリカ映画の冒頭に聞こえるような爆発音がした。

「おいおい、中ばっか見てつと怪我すんぞ。」

悪逆、派手好き、ハリウッド。

火力馬鹿が、反撃を開始した。

カールグスタフ m4、無反動砲の最新型である。より軽く、より短く、運用性に優れた型で、発射可能な弾にも幅があり、対戦車榴弾や榴弾、発煙弾も撃つことができる。ちなみに自衛隊が使つているのはこれより3つとか2つ前のやつで、とにかく重いし当たらぬ。早く新しいの買つてやれよ。

通常なら2人1組で運用する無反動、しかしそうも言つてられないことは多々ある。一発立ち撃ちで撃つたらすぐにしゃがみ、太ももののせてケツの部分をスライドして開く、右下に置いておいた弾を薬室にぶち込んでまた立ち上がり、車両に撃ち込む。装甲車や戦車なら細かく狙わないところだが、乗用車ならどこ撃つても大体爆発する。至る所で焰があがる。怒号が、悲鳴が聞こえる。

「はつはつは！一瞬冷やつとしたが。やつばこうでねえとな！」

氣分上がつてきたあ！

俺の知り合いサイコパスばつかだな。外ではぼつかんばつかん車が吹つ飛ぶ音がする。大丈夫かこれ、流石に揉み消せなくない？まあ全部マフィアのせいにするんだけど。

後ろは大丈夫そうだ。前に集中しよう。敵はあと7秒で角を曲がつてくる。おおよそ6人。角と俺の間には瓦礫が散乱している。

敵が角の手前で止まつたのがわかる。おそらく一番前のやつからゆつくり曲がつてくるだろう。

来た。瓦礫のおかげで音がする。どんなに気をつけても素人では限界がある。あと3メートル、…2、…1、…今！

一段ボールで身体をカバーしながら膝撃ちの姿勢で半身を出し射撃する。一番手前の奴から腹の高さで狙い、引き金を引いたまま跳ね上がりを抑えて全員の腹部を流す。当たつた奴は腹を抑えて蹲るが、弾の貫通力が低く、重なつていて前の奴が盾になつたらしく、2人だけ残る。

陰から飛び出し2人いた内の右側の奴を蹴り飛ばす。左の奴は慌てて銃を向けるが、身体を落として銃線を外れ、そのまま懐に入り左手のブレードを出す。

喉をひと突き、こぼつと水っぽい音がしてそいつは膝から崩れ落ちる。

飛び出してからここまで1秒。

蹴られた奴が起き上がるうとする。右手で拳銃を抜いて頭を撃ち抜いた。さて、どつから出るか。と考えながらまだ息のある奴らを射殺する。

この程度なら大体逃げ切れるだろう。1人ならきついが千川さんもいる。

と、俺が具体的な離脱方法を考えていると。無線から恵理さんの声がした。
「影喰らいさん、今千川さんが南西方向を中心に道を開いてくれるので、そこをなんとか突破して下さい。」

「了解。」

経路も決まった。さて、强行突破か、何か車両とか奪うか。

「…!! 影喰らいさん！ まずいです！ そつちにへりが向かってます！ 軍用ではあります
んが、恐らく戦闘部隊が乗つてていると思われます！ 到着までおよそ5分です！」

え、まじ？ ガチじやん相手。

俺を殺すためだけにこんなことを？なぜだ。確かに俺はあいつらにとつては邪魔かもしれないけど、ここまで金をかけるほどか？ 武器も弾薬もタダじやない、1人のためにこれほどの人員を投じるのか？

「任せろ！ 俺が撃ち落としてや…つておお!?」

千川さんの通信が入ったと思ったら耳が割れるかと言うほどの爆音が聞こえる。

「千川さん?! 大丈夫ですか!」

「…おお! 僕も車も無事だ! だが砲は置いて来ちまつて使えなくなつた! 弹薬は無事だが単体じや役に立たん!」

俺もそつちに合流する! なあに任せろ! 殴り合いの方が得意だ!」

銃相手に殴り合うな、そもそも合えないし、一方通行だし。

まあ、それはともかく、白兵戦での千川さんの強さはよく知っている。助けに來てくれるるのは普通にありがたい。

「…影喰らいさん。ヘリから戦闘員が降下してます。装備から見て、同業会社のスペシャルフォース級かと。」

「この近くでつつつたらA & Aか? マフィアがPMC雇いやがつたのか。」

「日本のヤクザだつて戦闘指南にPMCを雇つたことがあります。でもスペシャルフォース級はかなりお金かかると思いますけど…。」

「とにかく。交戦したら殺してもいいんですね?」

「もちろん! こう言うのはお互い様ですから。気兼ねなくぶつ殺しちやつて下さい

!」

まあ、仕方がない。金を貰つて以上、お互いに給料に見合う仕事をしなければなら

ない。恨みつこなしだ、俺も死ぬわけにはいかない。いや、スペシャルフォースと戦わないといけない依頼ではなかつた筈なので給料は別に請求するが。

そもそもおかしい。なぜ俺がくる前提で奴らは準備してたんだ？あのはりがみといい、罠やPMCといい。それなりに準備しているようだつた。

俺を殺そうとしてるのはラバーズか？それともマファイアか？どつちにしたつてなぜ俺にこだわる。

有利に戦える地形を探しながら倉庫内を移動する。千川さんの援護か無ければ、外の包囲を突破するのは難しい。しかしプロを相手にしなければならないのはきついので早く出たい。勝てないとは言わないが苦戦を強いられる。無傷では済まない。学校もあるので出来るだけ戦いたくはないが——

「こんばんわ！」

唐突にかけられた挨拶。俺がそちらを向くより早く右半身に衝撃を感じる。

それが蹴りだと理解する前に、条件反射で右肘が脇腹をガードした。

「ぐつ！」

勢いを殺さず、自ら飛んで衝撃を減らし、あえて地面を廻り受け身で転がり距離をとつて態勢を直し。同時にMP7を指向する。

「いやいや、お待ちしてましたよー。影喰らいさんですよね？」

「…あんた、誰だ。」

「なんとかそう返す。脇腹が痛む。しつかりガードしたのに、衝撃だけがあばらに突き抜けている。」

男はスリツ姿だった。身長は高め、整った顔立ちは不気味なほど完璧なビジネススマイルに固められている。髪は七三分け、テンプレートなサラリーマンだった。

しかし、先程の蹴りが、その異様な雰囲気が俺の警戒を高めさせる。

「ラバーズより参りました。島松晴人です。この業界には珍しく、普通の名前でしょ

？」

「まあ、貴方に対する個人的な恨みは驚くほど皆無ですが、

貴方に嫌がらせすると面白いらしいので。」

一切表情を変えず、淡々と男はしやべる。

「ちよつと死んで見てくれません？比企谷八幡さん。」

その台詞に、俺の日常は崩されたと直感した。

派手好き

「千川さん！ 今どこですか？！」

車内で戦闘準備を進める俺の耳に恵理ちゃんの声が響く。

「おう、今車で準備してるとこだ。状況は？」

「何のんびりしてるんですか！ 今影喰らいさんがラバーズと交戦しています。このままA&Aとの挟み撃ちになつたらいくら影喰らいさんでも…。」

「ラバーズは何人だ？」

「1人です。でもマフィアも十何人か中に。」

「んー、まあハチ公は大丈夫だな、俺は外のを受け持つ。」

「1人ですか？」

「それしかねえだろ。なあにハチ公が終わつたら支援してもらうさ。」

言いながら俺は車のエンジンを始動させる。

「あーあ、この車高かつたんだがなあ。」

この作戦で、俺の新車はスクランプだろう。まあ仕方ねえ、最初からこう使うつもり

だつたし。

車は今角に遮蔽させている。ここを曲がればパーティー会場だ。

「派手に行こうか」

ぶつ壊しにいこう。

俺はリ・セイモン（偽名）、マフィアの下つ端さ。18歳で清龍会の門を叩き、それから三年。来る日も来る日も鉄砲玉として無茶な仕事を気合で乗り切ってきた。

今日は俺たちの晴れ舞台、最近名前が売れ出した影喰らい一つ一ガキを殺したらかなりの報酬が支払われるらしい。出世だって夢じやない。そうさ、俺はここで影喰らいを殺して名前を売つてみせる。

奴は日本に進出した俺たちを事あるごとに邪魔してきてるらしい。当然上はキレて何度も殺そうとしたが全て返り討ちになつた。そこで、ラバーズとか言うイカれたテロ集団と手を組んでこんな大規模な戦闘で殺し切ろうとするようだ。

ラバーズがなんで影喰らいを殺したいのかはよく知らねえが、PMCまで斡旋してくれるガチさだ。正直過剰過ぎんだろうとも思つたが、想定外の伏兵もいて手こずつてる（まあ普通に考えりや一人でくるわけもねえが）。

だがまあさつきそいつがいたらしいところにロケットランチャーが打ち込まれて、それから向こうからの射撃がねえから怪我ぐれえは負わせただろう。そこは確認に行つ

た奴らの報告待ちだな。

上が雇つたらしい民間軍事会社の奴らが観光用に偽装されたヘリから降りて来ようとしている。すげえ、ロープ降下生で見んの初めてだ。こんなおおっぴらにやつて大丈夫かねえとも思つたが、警察やマスコミも流石に港でマフィアや民間軍事会社が関わる撃ち合いがありましたとは言えねえだろう。市民が大混乱だ。お得意の、ガス爆発とか燃料に引火でお茶を濁すんだろうよ。

そのかわり警察からの規制は厳しくなるだろうがな、圧力が強まんのは確かだ。

さて、俺たちも中に突つ込んで虱潰しだ。既に十数人中に入つたが、伏兵の戦闘力を見るに、そう簡単には終わらないだろう。

と、俺と周りを取り囲んでいた仲間たちが中に行こうと歩き始めた時、後ろから爆音のエンジン音が聞こえた。

がつしやあああんとフエンスを突き破つてきたのは、高価そうだが軍用には見えない、いわゆる乗用車だった。

そいつは凄まじい速度で此方に突つ込んできている。慌てて俺たちは車に向かつて射撃する。しかし速すぎて一瞬で距離を詰められる。そして俺よりその車側にいた奴らの横をその乗用車が通過する時、ガガガガガツと銃声が聞こえた。助手席側の窓からマズルフラッシュが見えた、3人目がいるのか??

車はそのままこつちに来る。やばい俺んとこ来た！

なんとか俺が乗ってきた車を盾にして凌ぐ、しかし避け損ねた何人かが銃弾を受けたところを抑えてうずくまる。死んだ奴もいる。

俺の横を通過する時にチラッと助手席が見えた。やはり車に乗っていたのは1人。助手席にはMGがガチガチに固定されており、左手で引き金を引きながら運転している。

運転席に居た男は。どうしようもなく。笑つて居た。

車はそのまま丁度地面に降りた民間軍事会社の奴らの方に突っ込んでいく。奴らも車に向かつて撃ちまくっているが止まらない。

あ、先頭にいた奴轢かれた。

そのまま車は民間軍事会社の奴らを中心に急旋回、丁度左側に降りてきていたのもあって、反時計回りの車は助手席から弾をばら撒いている。因みに今のやつの流れ弾で俺の近くに居たステイーブン（偽名・中国人）が死んだ。安らかに眠れ。

車はジョン・ウイツクか、と言う勢いで縦横無尽に走り回り、時に運転席からも拳銃で射撃していた。

俺たち数の少なくなつたマフィア勢はそれをただ見ているしかなかつた。

民間軍事会社の奴らも半分以下になつた時、とうとう乗用車は炎上し始めた。

車は最後の抵抗とばかりに今度は俺たちの方へ進路を変え、一直線に突っ込んできた。運転席の男は途中で離脱。運転席側の扉を掩いで（どうやつたかは知らないが）それをソリのようにして無傷で地面を滑る。

車は俺からふたつ隣の車に激突して爆発する。

車から飛び出た男は直ぐに立ち上がり銃を構え、何事か叫んでいる。

「おらおらあーこつからが本番だこらあ！」

日本語だつたので内容は分からなかつたが。その男を見た時、この仕事から生きて帰れたら足を洗つて真つ当に生きようと決めた。

（

暗い倉庫の一角で2人の男が向かい合つていた。

片方は膝をつき胸を抑え、もう片方は息こそあがつてゐるがまだ余裕がありげに立つてゐる。

「おやあ？ 外もなんだか派手にやつてますねえ。まさか”悪逆”まで居るとは。誰か来るだろうとは思つてましたが意外なビッグネームが来たものです。」

ぱつと見典型的サラリーマンな男が口を開く。

「にしても今回の件は色々予想外なことが多いですねえ。ここに来るまでに影喰らいは無傷だし、マフィアは話で聴いてたより少ないし。

なんか”あの女”も来るとか言つといて来ないし。」

外から漏れて来る炎の光で中が少し照らされる。

「いやいや、言い訳とかじやないんですよ？まあ、悔つていたところも少しはあります
が。ただ…。」

“膝をつき荒い息を吐く七三分けの男”は、立つて居る男に顔を向ける。

「あなたちよつと強すぎません？」

そう問われた少年は、ただ真つ暗な目で男を見下ろしていた。

なぜ？

車が爆発する5分前、フェンスを突き破ったのと同じ頃。

俺はその男と睨み合っていた。

俺はいまサブマシンガンを向けているが、十中八九当たらないだろう。島松と名乗つた男は緩く気をつけの姿勢をとっているが、軽く握られた手は、手の甲が此方に向いている。多分ナイフを持っている。投げるか、もしくはスペツナズナイフみたいなやつ。おそらく毒も塗られている。

「どうしました？・撃たないんですか？」

男はにやけながら俺を見ている。

「…今撃つよ。」

そう言つて俺は引き金を引く。ダダダツと言う銃声と共に弾が発射されるが、やはり男は銃線をそれでいる。そのまま右手に持つていたナイフの“引き金”を叩く。

ナイフの刃の部分が発射された。やはりか。

俺はサブマシンガンでナイフを受ける。惜しいが、この間合いでこの男に銃は意味をなさないだろう。

「あれ? やっぱきづいてました?」

男の言葉には答えない。俺はスリングのストップバーを外し銃を投げながら体を低くして男に走り寄る。

「キヤツチ」

男は銃を片手で取つて、そのまま走り寄る俺に殴りかかろうとする。

俺は振り下ろされた右手を左手で受け、自分の右手を男の右手の肘関節に引っかける。

振り下ろされた手の勢いを殺さずに肘関節を手前に、左手は相手の手を軽く返しながら腰元に引き込む。

「おお!」

上受け投げ。いなし、ずらし、相手の力に自分の力を乗せてすつ転ばせる。

そのまま手を捻つて膝蹴りで折ろうとするが、相手の反応の方が速かつた。自ら地面へ転びそのまま体を捻つて俺の頭に蹴りを叩き込みに来る。俺は左手を離し蹴りを受けて、右手の下段突きで顔面を殴ろうとする。

しかし男は俺の手をすんでで掴み、巴投げをかけてくる。俺はそれに逆らわず体を投げ出し、廻り受け身で片膝を立てた姿勢になる。ほぼ同時に俺の顔面に足刀蹴りが飛んでくる。右手で逸らしながら左手のブレードを出す。そのまま身体のバネを使って

はね上がるようにして左手で首を狙う。

「ええ! なにそれ!?

ギリギリで首を反らせられ回避される。皮一枚切るに留まつた。

男は俺から距離をとる。

「びっくりしたー。え、他にもなにか仕込んでます?」

俺は応えない。

息を吐き、身体の力を抜く。

こいつが恐らく当初の目標だつた現場責任者だろう。連れて帰るのは無理そなうなのでせめて殺しておくことにする。

こいつが捌いた武器で何人の人が不幸になつたのか。マフィアやヤクザ同士ならまだいい。だが、一般人にも危害が及んでいる。余計な武力を持った奴らが、抵抗できな人達を苦しめている。

雨の音が聞こえる。

古い小屋を思い出す。

体重を支えることを脚が忘れてしまつたかのようにぐらつと身体が落ちる。

踏み込み。極限まで行き渡らせた脱力から、一気に加速する。

「わ、はやつ」

一瞬で懷に入る。奴が合わせるように右フックを放つてきたのでそれを掴む。

「うつそお。」

男は信じられないと言うように声を零す。俺は掴んだ手を引き込みながら左膝を相手の脇腹に叩き込んだ。予想どうりスースの下にアーマーを着込んでいたが、ちょうど隙間の部分を狙つた。恐らく肋は折れただろう。

追撃しようとしたが、異変を感じて飛び退いた。

男は膝をついている。

その時、外で爆発音が聞こえた。車か何かが吹っ飛んだのだろうか。

「おやあ？ 外もなんだか派手にやつてますねえ。まさか”悪逆”まで居るとは。誰か来るだろうとは思つてましたが意外なビッグネームが来たものです。」

男は喋り出す。

「にしても今回の件は色々予想外なことが多いですねえ。ここに来るまでに影喰らいは無傷だし、マフィアは話で聴いてたより少ないし。

なんか”あの女”も来るとか言つといて来ないし。」

外から漏れて来る炎の光で中が少し照らされる。

「いやいや、言い訳とかじやないんですよ？まあ、悔つていたところも少しはありますが。ただ…。」

「あなたちよつと強すぎません?」

男の言葉を聞いてから俺は自分の右の脇腹を見やる。
そこにはナイフが刺さっていた。

しかし見覚えがある。おそらく膝蹴りした時に俺のアーマーについていた投げナイフを抜いて刺したのだろう。

ここまでのことができるのに、俺のことを強いとは。

「…お前らは、なんなんだ。なぜここまでして俺を殺そうとした。俺の名前まで。」

言いながら俺はナイフを抜く。一応腹には出血防止、脱腸防止用のバンドをあらかじめ巻いている。

「…ふふふ、実は最近、ラバーズの中でも一部の有力者にこの間とあるメールが届きました。内容は“影喰らいにちよつかいをかけろ。”でした。“禁忌の愛”からの指令なんてなかなかないですから、退屈してた我々は喜び勇んで日本に集結してると言うわけです。因みに指令には影喰らいは日本の関東地方を中心活動する、“ステア・セキュリティパートナーズ”の暗殺要員で、若い日本人男性。と言う情報もありました。名前までわかつたのは別口の裏技があるんですがね。あ、ご安心下さい。今の所貴方の正体を知っているのは私だけですので。」

男は予想外にも色々話してくれた。

「…意外に喋ってくれるんすね。何人ぐらい来てるんですか。」

なんとなく敬語になつてしまふ。

「今は気分が良いので。でもこれ以上は話しません。」

男はそう言つて目を細める。

「続ikipは、…戦いが終わつてからにしましよう！」

言いながら男はこつちに向かつて凄まじい速さで走つて来る。

これで最後だろう。腹の痛みを堪えながら構える。

右左のコンビネーション、両方を受け切るがその流れのまま左足の前蹴りが脇腹に来る。なんとか右足で受けるが腹に激痛が走り、血液が喉に登つて来る。

腰だめにした右こぶしで相手の胸骨付近を突く。かはつと息が漏れ出たのが聞こえ、男はよろめく。追撃を加えようと踏み込むが大きく外から来た右フツクに頬を撃ち抜かれる。

リーチが違う。もつと入り込まなければ勝てない。

更に踏み込み喉に左手で手刀を突き込む。右手でそらされ左の肘が俺の顎にせまり、それを右手でガードする。

突くたびに、受けるたびに激痛が走り、力が抜ける。

踏み込む、踏み込む、踏み込む。

至近距離で攻撃を捌きながら流れるように反撃する。

手を廻すように運用する。相手の攻撃を自分の流れに組み込む。

捌ききれなかつた攻撃が身体に突き刺さるが無視する。

やがて俺の拳が相手の顔を捉え始めた。胸を、腹を打ち続ける。

「つつああああ！」

やがて壁際に追い込み、顔面に拳を叩き込んだ。

壁と拳に挟まれ、とうとう男の手が止まつた。

拳を戻す。これで平然と立つて来たらいよいよしんどい。俺お腹に穴空いてるし。

「う、く、ふふふ。すごいなあ。」

男は壁に背中を預けてずるずると座り込んだ。

「強すぎ。さすが済崎の弟子だ。ヒーローみたいですね。」

「…教えろ。お前はなぜ、今日俺がここに来ると分かつてた？まさかあの張り紙も、爆弾も取引のたびつけてたわけじゃないだろ。あのマフィア達だつて。」

男は、顔の至る所か出血しながらも、やはりニヤケながら俺を見上げる。

「さあ？私の携帯に今日影喰らいが来るとメールがあつたので、急いで準備したまでですよ。」

まあもつて言つて欲しいですよねー。と男は言つた。

「…影喰らいさん、貴方はすごい人だ。その歳で、その強さ、冷静さ、知識、そして恐ろしく強い精神力を持つている。」

「…何言つてんだ、あんた。」

男は笑みを更に深めながら続ける。

「貴方の経歴、戦歴を調べました。凄まじいの一言です。一体何が貴方にそうさせるのか。どんな絶望的な状況も、貴方は不屈の精神で生還して来た。」

男は自分で喋りながらヒートアップする。

「さうに驚くべきは、貴方はそのまま学校に通っているということです。『ご両親はいないとしても』。二日間不眠不休でゲリラ戦闘をして、週明け平然と通学し、誰にも悟られない。はつきり言つて正気じやないですよ。ぼつちだからとかそんな次元じやない。貴方は、何のためにそこまで？あの『啓発者』、済崎啓介の影響ですか？』

俺ははあ、と息を吐く。

「みんな幸せにしてりやあ良い。せめて不幸にならなければ良い。目の前に問題があつて、それに対処できる能力があれば、そりややんだろう。」

「…やはり貴方は面白いな。そんな普通の考えを、当たり前の考え方を、我々の世界で貫こうとする。」

男は眩しいものを見るように目を細める。

「影喰らいさん、日本に居るラバーズの中で私が分かるのは”銀杏”、“ゴールデンライアン”、“篠霧姉妹”、“蜘蛛”、“蜂”、“爆弾魔”、それから”太刀屋”ですかね。まあ、基本的に日本に元々いた人達ですが、これから増えるかもしません。」

「…あんたらは、なんでこんな事をする。普通には、生きられなかつたのか。」

俺はそう問うた。すると男は吹き出してこう言つた。

「貴方がそれを言ひますか。なあに、生まれた意味を見つけたかつただけですよ。私にとつてそれが、”人生を楽しむこと”だつただけです。」

「…満足したのか。」

「…ええ、とてつもなく。」

それを聞いて。俺は右手のナイフの留め具を外し、右手にナイフを落とした。

男に歩み寄る。殺さない選択肢はない。

そいつはやはり笑つていた。

腕を振る。血が舞つて、決着した。

（

「千川さん！ 急いで！」

「分かってるよくそつ！」

表での戦闘が終わつた俺は倉庫の入り口に駆け寄る。恵理ちゃん曰く、ハチ公と連絡

がつかないらしい。中に入つてつたマフィアは出てこないが、警察の到着もある。一刻も早く離脱しなくてはならない。

俺は扉に手をかけ、勢いよく開き、中に銃を向ける。
と、そこに死人が立っていた。

「うおお!」

「あ、千川さん。ちよつ、俺ですよ！銃向けないで！」

よく見たら死んだ目をしたハチ公だった。俺は慌てて銃を下ろす。

「ハチ公！良かつた！お前無線は？」

「あ、すんません。顔に一発貰つた時に壊れました。」

俺ははあゝと息を吐く。しかしすぐに持ち直して、ハチ公の後ろを確認する。

「中に入つた奴らは？」

「大体なんとかなりました。」

と、倉庫の中からは凄まじい程の血の匂いがした。

「1人で、やつたのか？」

「おま、怪我してんじやねえか！」

「はい、めちゃくちゃ痛いんで早く帰りましよう。」

ハチ公は脇腹から出血していた、恐らく刺し傷。少なくとも平然としてられる怪我

じゃない。

「影喰らいさん!? 良かつた！ 生きてたんですね！ 海岸に迎えのボートが来てます。急いで乗つて下さい！」

無線から大音量で恵理ちゃんの声がする。そう、今はとにかく離脱だ。

「ハチ公！ 乗れ！」

「は？」

「背負つてやる！ 急げ！」

「ええ…。」

なんか嫌そうにしてたが気にしない。出血が酷くならないよう気をつけて走る。

俺は背中に乗つたハチ公に声をかける。

「なあ、ハチ公。お前大丈夫か。」

「はい？ いや、大丈夫ですけど…。」

そいつはやはり、平然とそう言つた。

（

2人が居なくなつた倉庫の前に一台の車が停まつた。

中から出て来たのは2人の男女。

男の方は半袖にジーパンと言う、どこにでもありそうなラフな格好である。

「あの、姉さん、本当にいるんですか？」

男は女にそう話しかけ、姉さんと呼ばれた女は返答する。

「いいから来い。」

女はリクルートスーツ姿で、背が高め。髪はボニー・テールにしており。気の強そうな目と綺麗な顔立ちから、変に威圧感がある。

2人は倉庫の中に入り、死体がそらじゆうに転がった床を歩く。

「うつげー、やべえな影喰らい。高校生ぐらいのガキって話じゃなかつたでしたつけ？」

女は返答しない。男も気にしたふうではない。

やがて、首から血を流した跡があるスーツ姿の男の死体の前で2人は立ち止まる。

「うわあ、『ファンタジー』の兄貴がマジで死んでる。いい人だつたのに…。」

そう言つて男は胸の前で十字をきつた。

「ふん、味見などと欲張るからこうなる。まあ、気持ちはわからんでもないが。」

と言いながら女はスーツ姿の男の死体を観察する。そして、右手を見た時にやあ、と顔を歪めた。

「うわ、なんすか姉さん、気持ち悪いっすよ。」

「殺すぞ貴様、いいから早くこいつを連れて行つて治療しろ。」

男はその言葉に、へ?と首をかしげる。

「いや、治療って言つても。もう死んでません?」

「馬鹿が、右手を見る。」

「言われて男は死体の右手を見る。そこには何か筒状のものが握られていた。

「…注射器? 押し当てるとき勝手に針が出るやつ?」

「そうだ、恐らく睡眠薬だろう。こいつは首を切られた時、すぐにこいつを打つて自分から昏倒し、出血を抑えたんだろう。」

「いや、でも影喰らいがそんな浅く切りますかね?」

女はすっと目を細める。

「この男は、恐らく自分と話した影喰らいが“躊躇ってしまう”だろうと予想してたんだろうな。刃物で切られるのも影喰らいの殺し方の偏りを知っていたんだろう。影喰らいは、ナイフで首を切ることにこだわっている。特に、自分の印象に残った相手に 대해서は。」

何かトラウマもあるのかね。と、女は笑う。

「私も会つてみたいな、影喰らい。」

彼女は心底楽しそうにそう笑つた。

来る。来てる。

目黒にある高級マンションの一室で、1人の女性がパソコンに向かっていた。ポンツと音がして、画面の端にハートのマークのついたメールのアイコンが出てくる。女性はそれにカーソルを合わせ、中身を確認する。

内容を読み切り、彼女は目を細める。

その時、デスクに置いていた携帯が震えた。ロツク画面の連絡先表示を見て、彼女は緩く笑う。

「…もしもし」慧理ちゃん』? どうか、した?』

電話の相手はいつも通りの口調で喋り出す。

「…こんばんわ、詩織ちゃん。なんで私が電話なんかして来たか分かるよね?』

「さあ、わかんない、かな。』

電話口の声の温度が一気に下がる。

「しらばつくれるな。あなたがラバーズって事は、元から知っていました。それで私が放つて置いたのは、あなたが本気で影喰らいさんを好きだつたからと、あなたがどう頑張つても影喰らいさんを組み伏せられないと分かつていたからです。でも、敵に

情報を流して影喰らいさんを殺そうとするなんて。どういうつもりなんですか。またいつもみたいに”死んでるのが見たい”とか言うつもりですか？」

彼女はその言葉に答えない。無表情で携帯を耳に当てている。

「…喋らないんですか？ああ、もしかして。成功したら影喰らいさんをやる、とか言われたんですか？うわ、気持ち悪。そんな理由で影喰らいさんに大怪我させたんですか。でも残念でしたね。彼は普通に帰ってきました。武闘派の”ファンタジー”も影喰らいさんにはまったく及びませんでしたし。の人自身も”あなたがラバーズ”だと気付いているのでもう会いに来てくれないでしようね。ざまあみろ。」

やはり、彼女は答えない。

「教えなさい。会社の内部にいるラバーズは誰ですか？これ以上影喰らいさんの負担を増やさないでください。協力者でいれば良かつたのに、余計な事をしゃがつて。」

「…いつも以上によく喋るね、元ラバーズの”赤城慧理”さん？」

電話の声に一瞬の空白が生まれる。

「…だからなんですか？私が気にしてるとでも？」

「ハチくんに出会つてから活動しなくなつたけど、現役だつた頃の貴女はすごいね。私なんか足元にも及ばない。おんなじラバーズで活動してて尊敬してたもん。ハチくんのことと接触して来た時は、なにか目をつけられてて、とうとう殺されちゃうのかと

思つた。そしたら普通に友達になつてくれちゃうからびつくりしたよ。」

今度は電話の相手が沈黙する。

「ハチくんに感化されて心を入れ替えたんだね。すごいなあ。馬鹿みたいだけど、「恵理ちゃん。勘違いしてよ。確かに私はファンタジーくんに情報をあげたけど、大切なのは渡さなかつた。ハチくんが行くつていうのも直前まで言わなかつたしね。」

「影喰らいさんは結果的に死にかけてますけど。」

「あのぐらいじや死なないでしょ？ハチくんは強いもん。早い内からラバーズの誰かと戦つていて欲しかつた。特にファンタジーくんはまともな方だしね。」

「…信じられませんね。」

「恵理ちゃんに信じてもらえなくとも良いよ。ハチくんは分かつてくれるから。」

「…あ？」

「それに、恵理ちゃんだけ昔の事知られちゃつたら幻滅されるよ？ハチくんは生きてたからいいじやない。」

少しだけ、2人の間に沈黙が流れる。

「貴女は何がしたいんですか。」

絞り出すように、電話からそう問われる。

彼女はやはり笑いながらこう言つた。

「幸せになりたいんだよ。ハチくんと2人でね。」

神奈川某所、セーフハウス

「情報を整理しましよう。とりあえず会社の内部にラバーズがいて、情報を流されてます。しかも、先ほど国内でのラバーズに関する件は影喰らいを主にあたらせるように、というふざけた命令が来ました。もちろん断りましたが、かなり上層部、というかぶつちやけ”一番上”から來てるみたいで拒否権がありません。せめて内部の調査と、影喰らいさんの周りの監視は約束してもらいました。それから八幡さんの戦った男、島松晴人、通称”ファンタジー”の話に出てきた名前を調査しました。まあ、ほとんどわからなかつたんですけど。“禁忌の愛”は、おそらくラバーズ内の指導者のようなものであること、あとは日本に来ていると言う人達の中では、“蜂”は毒使い、“太刀屋”は結構有名な殺し屋ですね。文字どうり日本刀で殺しまくる殺し屋です。“蜘蛛”は、女性で高校生くらい、だそうです。」

無線から恵理さんがとりあえず分かる事をあげる。声は何か苛立つてているようにも聞こえる。

「…? なんで蜘蛛だけ具体的なんですか?」

「殺し方からですよ。よくある色仕掛け的なやつです。JKだから、さくさく引っ掛

けられるのかも。」

「なるほど、」

「ハチ公、俺の経験則だと、そういう奴は意外と『地味な眼鏡』が多いぜ、『自分は手頃だつて思わせるために』な。気をつけとけ。」

「はあ、ありがとうございます。」

倉庫での戦闘のあと、俺は手当てを受けながら2人の話を聞いていた。
酔はしているが、普通に縫われている。腹に感じる不快感を抑えながら自分の頭でも情報を整理する。

倉庫で殺したあいつは『ファンタジー』と言うらしい。世界各地で武器を捌いたり麻薬を売つたりして、色んな界隈のパワー・バランスをしつちやかめつちやかにしていた。本人もかなり強く、頭も良かつたため、たくさん敵はいたが度々返り討ちにしていたそうだ。

「悪逆さんからは何か情報ありませんか？」

恵理さんが千川さんに話題を振る。

すると、千川さんは腕を組み、ふむと鼻から息を吐いた。

「……『ゴールデンライアン』なら知ってる。俺が中東で仕事してた時に何度か会つた。見た目は俺を白人とした感じだな。筋骨隆々、髪は少し長いが顎髭もなかなかだ。」

まあ、手のつけられないクソ野郎だがな。」

千川さんは苦々しい表情をしている。思い出すのも嫌な相手なのだろうか。「ハチ公。俺はもう少し日本にいる事にする。あいつも来てんなら俺が殺しときてえ。」

「まあ、多分会社も大丈夫ですし、私も悪逆さんがいるなら心強いですね。正直影喰らいさん一人ではどうにもなりません。」

確かに今回の件も、おそらく1人では逃げきれなかつた。これから先ラバーズと本気で戦うなら居てくれるのはありがたい。

「俺も色々と調べてみます。おそらくすぐに接触してくると思いますし。」

「…影喰らいさん、やつぱり何も学校に行く事無いと思ひます。なんとでも会社から誤魔化せますし、怪我もあるのに危険です。」

俺の言葉に恵理さんが心配してそう言つてくれる。

まあ、正直腹痛いし、身体中ばきばきだしプリキュア見そこねてるから学校行きたくない。だが…。

「俺が居ない間に学校狙われても面倒なんで、普通に行きますよ。大丈夫、怪我も最悪な時よりかはまだ良いですし、なんとかなります。」

千川さんが横で大きなため息をつく。あれ、なんか機嫌損ねましたかね。

「…わかりました。いえ、まあわかつてました。でも無理はしないで下さいね。『無綴兄弟』のお二人も日本に向かっています。協力してくれると思いますよ。」

あの2人か、無綴兄弟は見かけはかなりやばい、がかなり常識的でこの業界には珍しく、他人をいたわる人たちだ。千川さんにあの2人ならだいぶ安定するだろう。

「ラバーズはきっと直ぐに行動をはじめます。どうか、死なないで下さいね。影喰らいさんが死んだら多分私一生独身ですから。貰い手がない的な意味で。」

「いや、否定しにくいですが普通にお見合いとかしてて下さい。」

丁度傷の手当てが終わり、その日は解散となつた。

次の日俺は痛み止めを飲みまくつて登校したが、まあ、遅刻した。いや、普通に寝坊である。

いや、仕方なくない？寝る時間も遅かつたし。むしろよくHRに間に合つたよ俺、すごい。

「重役出勤とは、随分頭が高いな？比企谷。おい、顔どうした？」

平塚先生との最初の会話、なんだか久しぶりに会つた気がする。因みに最後のセリフは俺の顔がブサイクと言う意味ではなく、怪我してボコボコだつたからだ。

階段から落ちましたといつもの言い訳をする。

誤魔化す為にちょっと失礼な事を言つてしまい、俺は腹に一発貰つていた。

油断した。いつもの感じで受けてしまい、腹に穴が空いているのを忘れていたのだ。
死ぬ、痛すぎる。万が一にも血が滲まないようガーゼと包帯でぐるぐる巻きにして
いたが、口から出そうである。

先生はふん、とどうせ効かんのだろうみたいな顔をしていたが。

「あ、あれ？ 比企谷、大丈夫か？ 変に入つたか？」

脂汗をかいて痛がる俺に異常を感じたらしい。焦つたように俺を心配する。
ふぐぐ、と俺が呻いていると、がらつと扉が開かれた音がした。

先生がそちらに顔を向ける。

「：川崎、君も重役出勤かね？」

「…すいません。」

ややハスキーな女子生徒の声が聞こえ、俺もそちらに首を向ける。

そこには、パンツがあつた。

痛みが嘘のようだつた。

心が晴れやかだ、今までの苦労はここに報われた。

健康的なすらりと伸びた脚、その皮膚には一点のシミもなく、陶器のように澄んでいた。

何よりそのふたつの天然の芸術作品が交わる部分、こちらは人の鍊磨された技術による芸術品がある。

俺は、心を取り落としたように、呆然とそれを口にする。

「黒の、レース。だと…。」

すると川崎と呼ばれた少女はじろつと俺に冷めた目をむける。

「馬鹿じやないの？」

全くもつてその通りです。

HRが終わって、疲れてるのもあり寝ようとするが、前傾姿勢が辛すぎる。仕方なく身体を軽く反らすようにして死んだ目でぼーっとしていた。

遠くで由比ヶ浜が心配そうに俺を見ているのが分かる、声をかけるか迷っているのだろう。

まあ、そつとしていて欲しい。俺なんかと仲良さげにしていたら余計な反感を買うだろう。

うーんと心の中でうなされていると、天使に声を掛けられた。

「比企谷君、大丈夫？ いっぱい怪我してるし…。」

「当たり前だろ、俺が倒れたら誰がお前を守るんだ。」

戸塚が、え。と表情を固める。

しまつた、あまりの可愛さに割と本気で変なこと言つてしまつた。

嫌われた。絶対キモがられただ。なんてことだ、俺は戸塚に嫌われたら一体なんのため今までー

俺は結構本気の絶望に包まれていた時。

「なにそれっ。でも、比企谷にならお願ひしたいな。」

「…え？」

「でも、あんまり無理しないようにな。怪我してたらしつかり治るまでは安静にしないと。」

え、え、なに？何がおきてんの？奇跡？奇跡おきてんの？

「あ、そういえば。この前の比企谷君達のテニス見てた子たちが結構やる気になつてくれてね。これからがんばろー！つてなつたんだ！」

戸塚はぐつと拳を握つてそう言つた。

「だから…、ありがとね。比企谷君。雪ノ下さん達にも、改めてお礼に行くから。」

「いや、俺は別になんもしてねえしな…。」

と、俺が返すと。そんなことないよー、と戸塚は笑つた。

「トツハチ！來た！來てるよこれ！」

「姫名擬態しろし…。」

「テンション高いね姫名。」

と、そんな女子の会話が聞こえた。

「…」

「あれ？ 比企谷君どうかしたの？」

いきなり黙った俺に戸塚が首を傾げる。

「いや、何でもない。」

俺は何とかそう返す。

なぜ今まで気づかなかつたのか。千川さんの助言がなかつたらこれからも気づかず
にいたかも知れない。

俺は昨日の会話を思い出していた。

—意外にも“地味な眼鏡が多い”。—

蜘蛛はクラスメートだ。

愛人達の蜘蛛

昼休み、

俺は一年の頃から使っていた、昼飯の定位置。通称ベストプレイスに来ていた。

視線の先には昼練をする戸塚がいる。こうしてみると、成る程テニスとは貴族発祥と言うだけあって、それをする人の美しさを際立たせるらしい。

テニスコートには戸塚が舞っている。チームがやる気になつてているとは本当のことらしく、前は誰もいなかつた昼練は何人かのテニス部員が参加している。

戸塚がチームメイトと笑いあつてているのを見ると心が暖かくなる。

そんなアホな思考をしていると、後ろから近づく気配に気づいた。思つたより接近されてしまつたらしい。

「動くな。」

俺は短く“彼女”に注意した。

気配が足を止める。

距離はおよそ4メートル。おそらく、相手の間合いにも入つている。

「やっぱ気付くんだねー。」

その人は、そんな気の抜けた声をあげる。

俺は首だけで後ろを振り向いた。あえて背中をむけて、右手をポケットに近づける。

「あんたが『蜘蛛』だな、海老名姫名。」

「せーいかーい。正式には『愛人達の蜘蛛』、海老名姫名です。」

「よろしくね?』影喰らい』の比企谷八幡さん。』

彼女はそう名乗つた。

パンはすでに食い終わつてゐる。右脚は階段に投げ出しているように見えるがしつかり足先を地面につけている。左脚は折りたたみ、右脚の下にいれ、思いつきり力を入れれば瞬時に立ち上がる。身体を一瞬で反転させナイフを投げる想像をする。

殺せる。おそらく確実に。

「わーわー。待つてよ、戦う気なんてないよ!私だつて影喰らいに正面から戦つて勝てるなんて思つてないから!」

蜘蛛は焦つたように両手を前に出して待つたをかける。

「…じゃあなんで接触してきた。とゆうかお前ら全員何がしたい。俺の正体知つてんのどんくらいいんだ。」

「質問が多いよ。えーと、最初のは面白そだからで、二つ目は面白いことしたい

で。三つ目は、昨日の今日で比企谷君の顔が面白かつたからかな。」

あれ？ 最後喧嘩売られた？

唐突な罵倒に一瞬ビビつたがなるほど、昨日の倉庫の事を知っているなら俺の顔を見てなんとなく繋げたのだろう。

しかし事件は神奈川であつた、俺と決めるには根拠に乏しい。

「まあ、前からなんとなく同業者かなとは思つてたんだよね。んで、メールが来てティンと来た感じ。」

と言いながら彼女は俺のとなりに座る。目線は前に向けている。

うわ近い近いやばいい匂い近い。

とゆうか俺全然気づいてなかつた。

その事実に軽く背筋が凍る。もしこの人が敵意を持つていたら。いや、どこかのタイミングで気づいたろうけど先手を打たれたのは間違いない。

いや、今打たれてないとも限らない。

「大丈夫だよ。君の事喋つたりしない。」

「…信じる根拠がない。」

俺がそう言うと、海老名さんは妖しげな笑みを浮かべて俺の顔を覗き込む。

「私は面白い事を独り占めしどきたいタイプだから。」

彼女としつかり目があつた時、俺はあろうことか固まつてしまつた。

その眼鏡の奥の、真つ暗な目に引きずり込まれるような感覚。

思考が停止し、彼女の目だけが俺の脳内を占領する。

間違いなく彼女は一定のレベル以上の殺し屋だ。一対一の殴り合いなら俺が勝つが、彼女の土俵では絶対に敵わない。

どのくらいそうしていたのだろう。とても長く感じたが、実際にはほんの一瞬だつたと思う。

「君は面白いね。うん。私達が狙うには十分だよ。」

彼女が顔を戻す。横目で俺を見ていた。

息すら忘れていたのか、俺は荒い息を吐く。

「興奮しちゃつた? ゴメンね、さすがにここじや何もしてあげられない。」

彼女はいたずらっぽくそう言つた。

その表情が、悔しいが可愛らしく感じた。

海老名さんは間違いなく、男の心を揺さぶる術を知つてゐる。いや、恐らく女性も籠

絡することができるのだろう。

彼女にとつては、しゃべるという行為がそのまま攻撃なのだ。

「…俺を狙つてるラバーズの情報を寄越せ。」

俺は絞り出すようにそう言つた。

情けない。今までこういつた敵が出てこなかつたから耐性が出来ていないのであらうか。それとも彼女自身の殺し屋としてのスキルなのだろうか。

絶対的に俺の方が有利な筈のこの場で、主導権は確実に彼女が握つていた。
「さすがに人の情報は売れないなあ。意外にも人付き合いが命の業界でもあるし。ラバーズで反感買うと割とマジでやばいしね。」

「尋問するつて言つたら？」

彼女は首を傾げてこつちを見る。

「そんなので喋ると思う？ 君が私でも喋らないよね。そもそも君そんな事できなさうだし。」

ニヤニヤ笑いながら彼女は言つた。

クソが、喋つてて勝てる気がしない。

この人には本当に敵対する気はないのか？ ジゃあ、まだいいのか？

「んふふー。結衣には悪いけどつまみ食いしたいなー。」

そう言つていつの間にか俺の二の腕を触つっていた。

ちよつ、何してんのこの人。うわつ、振りほどけないし。

「おおー、なかなか鍛えてますなー。見た目暗いのに服の下には鍛え上げられた筋肉

が。2人きりの教室で2人は禁断の恋を成就させる！組んず解れつの愛情のぶつけ合
い！これはやばいよ、来てるよほんと。ハチハヤ来てるよ今！」

なんの話？

「え、そつちの話？」

「しまつた、いつの間にか隼人君で再生された。でもいいなー、比企谷君。食べたい
なー。あ、みんなの前ではヒキタニ君つて呼ぶから、キャラ付の一環で。」

ここで特別扱いを喰ぐわせる、やな手口だ。

殺し屋としての下心しか見えない。

「あれ。疑ってる？ 私仕事とプライベートは分ける方だよ？」

「プライベートで俺殺そうとしてんだろ。」

俺は吐き捨てるように言う、とりあえず戦う気が無いなら無理に殺したくは無い。ど
うせいつかは殺し合うだろうけれど。海老名さんは一応由比ヶ浜の友達でもあるし、今
はどうこうとはいかないだろう。

「んー、本当に君の事気に入ってるんだけどなー。

あ。」

海老名さんが何か思いついたのかすっと身体をあげて、顔を俺の耳に近づける。
何、やつぱりやるのか、やるのかおらあ！

そんな俺の動搖など構い無しに、彼女は艶っぽい息を吐いて囁くようにこう言つた。

「私まだ処女だよ？」

俺はもう一度固まつた。

“禁忌の愛”からメールが来て次の月曜日、学校に元から目をつけていた男子生徒が遅刻して登校してきた。

顔は明らかに殴られた跡があり、脇腹も庇いながら歩いている。間違いなく彼だ。

すごい偶然もあつたものだと思う。まさかあの影喰らいがクラスメイトとは。

彼の資料を読んだ。彼の事は一年の頃からなんとなく見ていたが、あんな馬鹿みたいにきつい仕事を捌いていたとは知らなかつた。

まるでヒーローみたいだ。

自分の身を省みず、彼は沢山の人を助け、同じくらい殺してきた。

すごいなあ。こんな人が現実にいるんだ。

見たい、すごく見たい。

比企谷君が壊れちゃうところが見てみたい。

私はまだ手を出さないでおこう。敢えて正体をバラして一番近くで見ることにする。

“蜂”ちゃんには悪いけど、彼がおかしくなつちゃうところが見れるように、いい感じに立ち回ろう。

ああ、神様はきつといいるのかも知れない。丁度学校に飽きてきてたとこだつたんです。

楽しいなあ。本当に。

最愛にして唯一の家族

「ヒツキー！ 怪我大丈夫なの!?」

「貴方、それは誰にやられたの？」

放課後、奉仕部

扉を開け、顔を合わせた瞬間、俺の挨拶より早く2人は俺に向かって問い合わせてきた。

「ずっと気になつてたんだけどなかなか声かけられなくて…。何かあつたの？」

「貴方は多少心得があるようだけど、敵わない相手とそうゆう事はするべきではないわ。」

心配、してくれてるのだろうか。

まあ本当の事を言うわけにもいかない、適当に誤魔化すしか無い。

「いや、階段から落ちたんだよ。うちのマンションの。」

「嘘ね、殴られた跡かどうかくらいわかるわ。今回はその程度の怪我で済んだからいいものの。平塚先生も心配してたわよ？」

「そうだよ。ヒツキーあんまり強くなさそうだし、やめといた方がいいよ。」

その程度っていうかお腹に穴空いてるけどね。もちろん言わないけど。

もうめんどくさいからそういうことにしどこう。て言うか負けた前提なんですね。
まあ分かるけど。

まあ思春期の男の子だし、これからはそういう路線で誤魔化していくか。

その後は雪ノ下から効果的な護身術だつたりを習っていた。まあ正直、自分で言うのもなんだが釈迦に説法だ。殆どの技術は俺も知っているものである。

しかし、女性特有の力のなさなどから来る工夫など、まあ知つてはいたが参考になるところもあつた。

最後らへんはほぼ由比ヶ浜への講義だつた。

由比ヶ浜も興味のあるところらしくきやつきやつ言いながら習つていた。雪ノ下も教えるの上手いしな。

その日は特に依頼人も来ず、下校時間となつた。

（

放課後、サイゼリヤ

俺は妹の小町から今日は外で食べるのでお兄ちゃんも適当に食べてきてと言う絶望的なメールが来ていたので、しぶしぶファミレスに来ていた。

まあ良いけどね？サイゼ好きだし、小町も学校の友達とかいるだろうし。

小町はいろいろあつて最近まで俺に依存気味だったのだが、最近は少しづつ昔の明る

さを取り戻しつつあり、友達と遊びに行つたりもする様になつた。

喜ばしいが、少し寂しかつたり。

まあ、小町の事はいつたん置いておこう。

ミラノ風ドリアをつつきながら考えるのは『蜘蛛』の事である。

彼女の目的は何なのか。本当に面白い事をしたいだけだとして（ふざけだ理由だが）、何をして来るのか。

報告すべきか？あのままにして良いのだろうか。やはり殺すべきか。手荒になつても情報を引き出すべきか？

クラスメイト、しかもあの由比ヶ浜の友達だと言う事が、俺の判断を鈍らせる。

早く手を打たなければ、俺の身の回りの人に危害が及ぶかも知れない。家の場所も特定されかねない。一応学校にはダミーの住所を使つてゐるが、彼女相手には意味を成さないだろう。

小町に危険が及んでしまうかも知れない。

考えれば考えるほど戦うという選択肢に絞られる氣がする。

そう、躊躇う必要があるのか？何時ものように証拠を残さず、パツとやつて仕舞えば——

「怖い顔してるよ？ヒキタニ君。ちよつと自分の世界に沈みすぎじゃない？」

彼女の声が真横から聞こえた。

俺は瞬時に背中の腰からナイフを抜く。が。

「ワンキル」

俺の目の前にピストルの形を取つた手の指先があつた。

「だめだなあー、油断しちゃだめだよ。私だから良かつたものの、他のラバーズだつたら殺されちゃつてたよ? ここがファミレスとか関係なく。」

彼女は勝ち誇つた表情で、指先をフツと硝煙を吹き飛ばすような仕草をし、俺の対面に座つた。

全く気配が無かつた。油断してた訳ではないのに。

昼のは本気じやなかつた?

その気になればいつでも殺せるつてことか?

背中を嫌な汗が通る。彼女の言う通り、もしあれが俺に敵意をもつていたやつだつたら。

「まあ、気付かれなかつたのは私に殺意が一ミリも無かつたからつて言うのもあるかも知れないけど。それにしたつて警戒度低いよ? そんなんじやこの先生き残れないぜ?」

海老名さんは机に両肘をついて指を組み、それに顎を乗せる。

俺の顔を覗き込むその表情は、まさしく人殺しのそれだつた。

「何の、用だよ。」

この人には最初から上を行かれている。俺は本当にこんなひとがいながら気付けていなかつたのか。

「別にー？ たまたま見かけたから声かけただけだよ。暇なら私とお茶しようぜー。」「ふざけんな、そんな仲じやねえだろ。」

「ありや、嫌われてるなー、私。まだ何もしてないじやん。と言うか、本当に敵意とかないよ？ 仲良くなしたいって思つてる。」

信じられるか。

くそ、ペースが乱れてる。何を、何をすればいい。

そんな俺を彼女はじっと見ている。

「…ラバーズ内での影喰らいの評価は”高い潜在性を感じさせるが、精神面が未熟。その戦闘技術は既にある程度完成されており、単独で組織単位の敵と交戦し勝利を收める程であるが、時として冷静さを欠き、その身を危険に晒すことが多々ある。本質的に正義感が強く献身的。他人の心に寄り添う共感性を持つている。”つてどこ。」「…は？」

「これまでの貴方の経歴とかを調べたラバーズの1人がそんな感じの評価を出した。

まあ、私も見てみておんなじイメージを抱いた。見るからに強いし、私なんか到底及ばないけど、自分の家族とか友人のことが絡み始めると途端に冷静さを欠く。失うのが怖いんだね。他人が苦しんでても心が痛むのに、それが身近な人だつたら君は耐えられないかも知れない。今だつて何時もの君なら多分気付けてたのに、自分の生活圏で事が起ころてるから集中力を欠いてる。」

「…俺に友人なんかいねえし、大切な人もいない。勘違いすんなよ。自分以外の人間にかける程余裕ある生活してねえし、仮になんか思うとこがあつたとしてもそこまで必死になつてねえ。」

その言葉に海老名さんは、やはり妖しげな笑みで俺を見る。

「その怪我で何言つてるのかなあ。まあ、君はご両親を事故で亡くしてるもんね。妹さんの学費も稼がないといけない。若いのに苦労が絶えないねー。でも、例えばあそこのいる君の妹の小町ちゃんがラバーズの誰かに酷いことされたら君はどうする？何故か偶然ここに来てる結衣や雪ノ下さんがそうなつたら？」

海老名さんは、俺の左肩の後ろに目をやつた。

俺は跳ねる様に目線の先に顔を向け、そこに小町達の姿を確認する。

「…お前…！」

「わーわー、待つてよ。私なんにも関与してないよ？ただの偶然だつてば。」

すると、俺の背後から誰かが近寄つてくる気配がした。

もう一度俺は後ろを見る。

「あれ？ やっぱりヒツキーだ。どしたのこんなところで…。と、ひ、姫名…え、二人つて、え…？」

近づいて来ていたのは由比ヶ浜だつた。俺と海老名さんが一緒にいるのを見て困惑しているらしい。

「はろはろ。いやあヒキタニ君とは昼休みにお互いの共通の趣味があることを知つてねー。たまたまここでも会つたから、親交を深めてたんだよ。とは言え結衣の思つてる様なことはひとつもないから安心してよー。」

「え？ いや、私は別に…。」

由比ヶ浜はなんかによざによ言つてる。海老名さんはそれをみてなんか知らんがにやついている。

すると由比ヶ浜の後ろから今度は黒髪ロングの女子高生が出て來た。

「貴方はたしか…、由比ヶ浜さんと同じクラスの海老名さんだつたかしら？ その男はやめておいた方がいいわよ？ 暴力に走る危険な男だから。」

やかましい。と言うか、海老名さん相手だとどつちにしろ、いざとなつたら実力行使ぐらいしか出来ないので間違つてはないかも知れないが。

「…まあ、確かに『ちょっと』危険かもねー。」

と、海老名さんは流し目で俺を見る。

俺はその目を逸らしこそしないが、引いてるのがおそらく顔に出てたと思う。鳥肌立ちそう。

そんな俺達を見て由比ヶ浜が焦つた様に切り出す。

「あ、えと。私達も今日勉強会で来たからさ、どうせなら一緒にしない?」

すると海老名さんは笑顔を由比ヶ浜に向けて。

「いいねー。それならあそこにあるヒキタニ君の妹さんも呼ばない?」
と、海老名さんがそんなことを言い出す。

すると。

「あれ? こつちからお兄ちゃんの気配がする。」

「はい? 何言つてんすか比企谷さん。」

聞き慣れた妹の声と、聞き覚えのない男の声が聞こえた。

声のした方向に首を向ける。

小町が、男と一緒に…?

「おお! やっぱりお兄ちゃんだ! 気配までわかるとか小町ポイント高い!」

「え、ほんとにいらつしやつたんですか。」

まず、かなり普通な感じの男子中学生が目に入る。危険度は限りなくゼロ。多分間違いなくカタギだ。

その横にいたのは俺の最愛にして唯一の家族。

「あれ……なんか女の人がいっぱいいるんだけど、比企谷小町、俺の妹である。

「説明あるよね？お兄ちゃん。」

俺の妹はそう言つて凄惨に笑つた。

小町

私の兄は世界で一番強くてかつこいい。

ちょっと目は腐つてて心が捻くれてるけど、誰より優しくて、間違つてることを許せない人なんだ。

お兄ちゃんが小学校六年生の時に珍しく怪我をして帰つて来た時、お父さんとお母さんはとつても怒つた。

もちろんお兄ちゃんに對してじやなく、お兄ちゃんをそんな目に遭わせた人に對して。

いつもはお兄ちゃんのことを探つたらかしてゐる両親だつたけど、ほんとはちゃんと、心からお兄ちゃんのこと愛してた。

“私”は、なんとなくお兄ちゃんが誰かの為に頑張つたんだつて分かつた。

ほんとにしようがないお兄ちゃんだ、きっと最後まで逃げなかつたんだろう。

その日の食卓はいつも以上に幸せだつた。

“私”的一番大切な家族。きっと誰にも奪われないと思つてた。

“私”が中学に上がつて少し経つたある日。

学校の生活も順風満帆。お兄ちゃんと違つて“私”は人付き合いがうまい。いつものように家に帰れば、家族が待つてゐる。両親ともに少し帰りが遅いし、お兄ちゃんもたまに帰りが遅かつたり、どつかに泊まつたりするけど、その日はちゃんと帰つてくるつて言つてた。

今日は先生から“なぜか”早退して良いと言われた。

私は理由がわからなかつたが、まあ早く帰れるに越したことは無いだろう。さあ。お兄ちゃんにご飯を作つてあげなくては。最近は、料理をどんどん突き詰めていて、化学にまで手を出している。

家に帰るのは楽しみな筈なのに、なぜか、足が重かつた。

嫌な予感がしてた。

玄関を開けてはいけない氣がしてしまつた。

知らずにいたなら、昨日と同じ記憶なら、それまでと変わらない日常をおくれたのだろうか。

まあ、“今”となつてはそんな事を望みはしないけど。

玄関を開け、リビングに向かつた。

お兄ちゃんがいる。

真ん中の食卓に座つていて、背中を丸めて、両手で顔を覆つていた。

「お兄ちゃん？ ただいま。えと、お腹空いてる…？」

なんだか、とても声を掛けてはいけないような気がしたけど。その背中を見ていられなくて“私”はそう言つた。

するとお兄ちゃんはびっくりしたのかちょっとだけ肩を揺らして、ゆっくりと振り返つた。

「…小町、父さんと母さんが、死んだ。今日からは、俺と二人だけだ。」

お兄ちゃんは、とても、とても辛そうに。すごく、すごく言いにくそうにそう言つた。言われても、どこか“私”は実感出来なくて。なんと言うか、ふわふわした。地に足がつかない感じ。

死んだ？ 誰が？ お父さんとお母さんが？ なんで？ いつ？ 会えないの？ もうずっと？ 地球を何周しても。宇宙を何億年旅しても、ずっと。

ふわふわしてた体は、みるみる“私”的意識を離れていく。
ずつしりと、ずぶずぶと、身体だけがどこかへ沈む。

でも、心は、お兄ちゃんを見て目を離さなかつた。
体を離れてしまつた私の心は、お兄ちゃんに手を伸ばす。
縋るのか、お兄ちゃんも辛いのに。私は甘えるのか。

私は、『私』は。

お兄ちゃんが立ち上がった。

こつちに歩いてくる。

そして手を広げて、私を抱きしめた。

「大丈夫だ。俺が、お兄ちゃんがずっと居てやるからな。」

私は泣いたのだろうか。前が見えなくなつて、全部の境目が無くなつていく。

私の最愛の家族はたつた一人になつてしまつた。

絶対に失うわけにはいかない。

誰にも、誰にも渡すものか。

（

「なるほど！お二人は、その奉仕部？って言う部活の仲間なんですねー！そしてお兄ちゃんに友達まで出来るとは！しかも女人の人！全員美人！いやー、小町は嬉しいような、寂しいような。」

ファミレスでまたま会つた小町に雪ノ下達との関係を根掘り葉掘り聞かれた。もちろん嘘偽りなく最初から最後まで詳しく話したとも。海老名さんのこと以外。それを聞いた小町はなんかテンションがあがつている。

席順は左側に奥から俺と奉仕部、右側には海老名さん小町なぞのクソ野郎である。

「仲間と言う表現は正しくないわね。あくまで比企谷君は依頼で来た人格に問題のある学生、更生させる目的で仮として奉仕部に置いているだけだわ。ひどくない？まあざつくり言うとそうなんだけださ。もうちょつと言ひ方つて言うかなんていうかさ。」

「私は友達であつてるかなー。数少ない趣味を同じくする同志だよ。」「ひ、姫名！え、えと、ヒツキーはやめといた方がいいよ！ほらあの、目とかアレだし！」

「そうよ海老名さん、この男は本当にやめておいた方がいいわよ。なまじ格闘技をやつていてるから力づくで来ないとも限らないわ。」

「おうおうボロクソ言つてくれるじやねえかお二人さん、喧嘩か？喧嘩大バーゲンか？買い叩いてやるよおら。あるだけ寄越せこら。」

「えー、見た目ほど悪い人じやないよー？本当に、意外なくらい。」

「そう言つて海老名さんはまた意味ありげに俺を見る。やめてくんないかなそりゃの、誤解されかねないから。」

由比ヶ浜もなんかめっちゃ海老名さんと俺見比べて唸つてるし。心配してくれてるんだよきっと。ほら、やっぱ俺より同性の友達の方が良いくつて。

雪ノ下もやつぱなんか毒舌吐いてる。もう内容あんま聞いてないけどそろそろ止めないと、小町の前でこれはちよつとまずいかも知れない。

「まあ、皆さんとの関係とかなんでも良いんですけど。」

あつ。

「兄の事悪く言うのやめてもらつて良いですか？」

ニコニコしてたはずの小町の顔から、表情が抜け落ちる。

「なんか勘違いしてるみたいですけど。兄はお二人が軽く見て良いような人間じやないですよ？世界で一番強くてかつこいい私の兄です。なんですか？笑つて許すと思つたんですか？目の前で家族を悪くいわれて？愚兄がすいませんとでも？」

小町は、真つ直ぐに雪ノ下と由比ヶ浜を見る。

やばいな、ちよつとここでキレられると手がつけられない。

「小町、落ち着け。こいつらも本気で言つてるわけじや…。」

「本気とか建前だとか関係ないよね。ねえ、兄がお二人に何かしました？」迷惑でもお掛けしましたか。」

どうしよう。結構キてるらしい。

ちらと横目で二人を見る。完全に固まつて、そして怯えてしまつている。

どうしよう、こうなつたとき俺の話も全然聞いてくれなくなるしな。力ずくで行くし

かなかいか?

と、場の空気がどんどん張り詰めていった時。

「まあまあ。ごめんね? 小町ちゃん、ちょっと二人とも素直じや無いからさ、口ではああ言つてるけどヒキタニ君の事そこまで悪く思つてるわけじゃないし。でも、二人も悪いからちゃんと謝らないとだよ?」

と、意外にも海老名さんからフォローが入る。

それを聞いた小町は少しだけ視線を海老名さんに向け、また二人に目を戻す。
海老名さんはアイコンタクトで二人に喋るように促す。

「……めんなさい、小町さん。あまりにも失礼だつたわ。」

「わ、私もごめんなさい。ヒツキーも、えと、ごめんね?」

二人はそう言って頭を下げる。

なんか俺も居た堪れない気持ちになる。ほら、あの、学級会で先生に比企谷君にごめんなさいしなさいって感じで教壇に連れて来られるやつ。あんな感じ。

でも今回はそのおかげで助かつたらしい。小町ははあとため息をついて気持ちを切り替えるように口をひらいた。

「いえ、すいません。小町もちよつと過剰に反応してしまいました。でも、小町の前でお兄ちゃんをそういう風に言うのはやめて下さい。絶対に。」

最後の部分だけ強調して小町はそう言つた。

最近はかなり安定していたが、やはりこう言う場面では危ないらしい。気をつけてやらなければ。

今回は海老名さんに助けられた。彼女がフオローをいってくれなければやばかつたかも知れない。兄としても少し小町の手綱を握つてあげなければ。

そして小町の隣の男子中学生は小町がキレかけた段階からずっと顔を青ざめさせて微動だにしない。ちょっと小町の雰囲気に圧倒されてしまつたらしい。

「因みに小町ちゃん達はどうしてここに？そつちの子は友達？」

海老名さんはまたも雰囲気を壊すように話題を変えてくれる。

この人もしかして良い人なんじやないだろうか。チヨロいな俺。そして小町の事に関し何も出来てない自分が情けなく感じる。

「あー・えーとですね、ちょっとこの川崎大志君の人生相談を受けるためにですね。なんかお姉さんが不良化したとかで。」

小町もぱつと切り替えるように表情を明るくする。

名前を呼ばれた隣の男子中学生は、はつと再起動するように身体を跳ねさせる。

「え！あ！川崎大志っす！そ、そうなんですよ。ちょっと総武に行つた自分の姉が、なんか最近不良化したっていうか、朝帰りとかが多くなつて心配というか！」

と、男子中学生は口早に喋りだした。

ふーん、大志君つて言うんだー。俺の妹とはどう言う関係かな？ちょっと俺とお話し
ない？大丈夫大丈夫、ちょっと椅子に座つてくれればすぐ済むから。

と、そこで小町は何か思いついのようにあつと言つて手を叩く。

「そうだ！奉仕部つてお悩み相談とかして下さるんですよね！ちょうど川崎君のお姉
さんも総武ですし、ちょっと相談に乗つて頂けないでしようか。」

雪ノ下と由比ヶ浜はえ、とびっくりした様な表情になる。

海老名さんはお？なんか面白い展開だぞ？とでも言う様に笑みを深める。

「お兄ちゃんも、どうかな？」

小町はそう言つて可愛らしく笑つた。

川崎

「今回のターゲットは川崎沙希。高校に上がつてからバイトを始めたらしく、明け方に帰ることも増えて、今回の依頼人の大志君は姉が危ないバイトをしているのではと心配している。目標はバイト先を特定することと何故自分の睡眠時間を削つてまでお金を稼ごうとするかの理由も探ること。可能であればバイトを辞めさせることだね。」「…なんかノリノリだね、姫名。」

「川崎さんはお近づきになりたいと思ってたんだよねー。裁縫とか得意みたいだし、衣装つくる依頼とかしたいなーと。」

サイゼリヤで小町と川崎大志の話を聞いて、海老名さんがそんな風にまとめた。
家族の心配をする気持ちはわかる。協力したいとも思う。

しかも川崎が勤めているバイト先は名前にエンジエルとつくらしい。もう怪しさしかない。エロい想像しかできない。

いかがわしいものなら、店ごとやろう。

「姉ちゃんは、貧乏な上に兄弟が多いうちで、ずっと俺達下の兄弟の面倒見てくれてました。最近は特に余裕なさそうで、いつも疲れた顔してます。」

「素直じやなくて、他所の人には無愛想に見られるけど、本当に優しくてすごい姉ちゃんなんですね。」

「すいません、どうか、姉ちゃんの事お願いします。」

翌日

学校

か。」

「と言うわけで、彼女が何故バイトをするのか、と言うところから探つてみましょ

う。「まあ学校だとそれくらいしかできねえからな。」

「変な男の人とかに捕まつてるのかな?。」

「結衣は想像力豊かだねー。ありえなくはないだろうけど。」

そんな感じで、川崎沙希の本心を探る戦いが始まった。

「アニマルセラピー。即ち猫よ。」

「アレルギーだつて。」

「…そう。」

始まつたが。

「葉山召喚しよう。」

「ああ。確かにBL嫌いな女の子いないもんね。」

「ちげえよバカ。」

「ダメだつたわね。」

「だろうな。」

「ちよつ、二人とも！ごめんね！ありがと隼人君！」

「あはは…。いいよいよ。」

「やつぱりヒキタニ君とセットで出すべきだつたんだよ。」

「姫名静かに。」

なかなか

「ひ、平塚先生に頼んでみようよ！」

「なるほど。」

「…泣かないで先生。」

「…めんなさい…。」

「うう…。帰る…。」

「もう俺が結婚しそうなんだけど。」

「それはダメ！」

「え？お、おう。」

「おー、言っちゃうねー結衣。」

成果は出なかつた。

「手強いわね…。」

「こりやだめそうだな…。」

「しようがないかー。」

「まあ作戦がアホすぎたのもあるけどね?」

結局学校ではなんの手がかりも手に入らず、放課後川崎のバイト先を探すことになつた。

「川崎さんは閉鎖的だね。いちいち干渉されたくなさそう、と言うか。他の人に相談に乗つてもらつてもどうにもならないとか思つてそうな感じ。」

「かと言つて誰かに依存してしたり、追い込まれてるようにも見えなかつたわね。」「どちらかと言えば真つ当な理由で金が必要な感じだ。」

「家が裕福じやないつことらしいし…。でも借金とかなら弟君が心当たりありそうだもんね。」

放課後、俺達はサイゼリヤで川崎についての所感を話し合つていた。

「食費も十分とは言えなくとも、少なくとも弟君がファミレスに来たりはできるくら

いに一般家庭並みのお小遣い。妥当なところは…。」

「学費…、か。」

「夜から朝にかけてバイトなのも勉強時間を確保するためなのかな。」「結局疲れて寝てるんじや本末転倒だけどねー。」

「私達の内誰も行つてないからわからなかつたけど、彼女は予備校に通つているようね。恐らく、それを続ける為のバイトでしよう。」

彼女は、川崎沙希は、下の兄弟達の学費を少しでも多く確保する為に自分の分は自分で賄おうとしているのかも知れない。

「…とりあえずこの辺でエンジエルがつくお店は二つだけだつた。夜のお店を入れるともうちよつとあるけど、流石にそこまでやるとは思えないから真っ当なところから探してみよつか。」

（

「…それで、此処はなんのお店なの？」

「ふふん！此処こそは！メイド喫茶であらああああああああ！」

なんかいたので殴つた。

え、なに？まじでいつの間に？

「おいおいヒキタニ君、いくら材木君があれだからつていきなり殴ることはないで

しょう？彼は私が呼んだ有識者だぜ？」

え？あ、そうなの？なんだ早く言つてよ殴つちやつたよ。あと座が抜けてるぜ海老名さん。

すると、すつ転んでいた材木座に駆け寄る影がみえた。

「だ、大丈夫材木座君！」

え？この声は？

「なんかたまたま近くに居た彼も連れて来ちゃつた。」

え？まじで？もしかして？

「もう！比企谷君！いきなり人を殴つたりしたらダメだよ！」

戸塚だああああああ！！

「いやもう、メイド喫茶つて時点で呼ぶしかないよね。女装系は邪道だけど二人の関係がマンネリ化しないようにスペースとして入れていくのはアリだよね。」

言つてる事はクソだがグッジョブだ。もうマジ明るい未来しか見えない。

「うわ、ヒツキーキモい感じになつてる…。」

「お久しぶりね、戸塚さん。でも時間もないのに付き合わせていいのかしら。」

「あ、二人ともお久しぶり！僕も皆にお礼が言いたかつたから丁度良かつたんだ！氣にしないで？」

メイド喫茶なんて最初は気持ちが上がらなかつたが、もうやる気しかない。
さつさと突入しようぜおい。

「川崎さん居ないね。あ、ヒキタニ君私のメイド服どう?」

「…良いんじやないすかね。」

「ありがとー☆」

中に入つてみると、お帰りなさいませみたいな感じで出迎えられ席に着いたが、なんか女性限定でメイド体験があるとかで、女子3人は偵察行こうとか言い出した海老名さん連れていかれた。

海老名さんはクラシックなメイド服、長いスカートと、知的な印象を与える眼鏡は、何処か征服欲を刺激されるような美しさと儂さがあつた。

「いやー、良いねメイド服。今度仕事に使おうかな。」

だがその正体は、餉だと思つてのこのこと寄つて來た男を惨殺する殺し屋、蜘蛛である。

「…たまに自分達が何なのか分かんなくなる。」

「お? いきなりだね。でもわかるよ? その気持ち。こうゆう日常が楽しいかは置いといても。私達みたいのがへらへらこんな事してゐのつて笑えるよね。」

俺達がやつてるのは、薄っぺらな日常の真似事なのだろうか。

「わ、海老名さん綺麗。」

「ほむん、なかなかであるな…。」

すると店内を見て回っていた二人が戻つて来た。

「ありがとー。他の一人も可愛いよ？ 戸塚君も着れば良かつたのに。」

「い、いや。まだちよつとそういうのは無理かな…。」

「そつかー、残念。…まだ？」

なんか戸塚がちらつと俺を見た。なんだなんだ。まだつて何が？

「ひ、姫名ー。」

と、その時、後ろからか細い声が聞こえた。

「お、二人も来たな。」

海老名さんが俺の肩を越して後ろを見る。

俺が声のした方を振り返ると、そこには、なんかエロいメイドがいた。

「わ、ヒツキー！ど、どうしよう。えと、どう、かな？」

めっちゃテンパりながら由比ヶ浜が少し手を広げてメイド服を見せる。

海老名さんのスタンダードなメイド服とは違ひ。ある意味現代のスタンダードと言えるミニスカメイド服である。ベストのような部分は胸の下の部分でとめられており、

大迫力の胸部が思いつきり強調されていて、直視出来ないレベルである。

「いや、まあ、別に良いんじゃねーの。」

「ちよつ！もつとなんかないの!?こう、ここがいいとか！」

いや、何処がって言われても胸とかしか言えないし、あと太ももか。捕まるだろ俺。可愛いとは思うよ、うん。

「…目つきがあれだよ、比企谷君。」

いつの間にか隣に来ていた戸塚が何処か責めるような視線を俺に向いている。

意外と女子への視線とかに厳しい系の男子だつたか。いや戸塚（性別）か。

「…あれ？これつてもしかしてもしかするのかな？」

なんか海老名さんがなんか言つてる。なんだ？

「何を遊んでるのかしら。」

「あ、ゆきのん」

え？雪ノ下？

「どうやら川崎さんは此処では働いていないようね。シフト表に名前が無かつたわ。」

「え、あ、そ、そうか。」

「比企谷君？何をドギマギしているの？気持ち悪いわよ？」

「…うるせえ。」

雪ノ下は、息をのむような美しさがあった。とても、静かな、透き通るような美しさだつた。

決して高いものでは無いだろうメイド服は、それでも彼女の元の品を損なわず、彼女に新鮮な、非日常的な雰囲気をプラスしている。

「…なんか私達の時より反応いいね。」

「うう。でもゆきのんすごい可愛い。」

後ろの女子勢のそんな声が聞こえた。

「此処にはもう手がかりはないわ。もう時間も遅いから、今週の土曜にもう一つの候補に行つてみましょう。」

「そうだねー。あ、みんなは結構いい服着て来てね、ドレスコードあるお店だから。」
そしてその日は解散となつた。

「あれ？ 材木座は？」

「あ、材木座君ならあつちで燃え尽きてるよ。」

席を見ると材木座が真っ白になつて座つているのがみえた。

満足したんだな。材木座。

材木座は置いて帰つた。

バーと獣

「ハチ公、さつきゴールデンライアンの部下を見つけて締め上げたんだが。どうもゴールデンライアンの野郎は千葉に行つたらしい。影喰らいが千葉にいることを嗅ぎつけたのかも知らん。」

「ゴールデンライアン、本名はレオン・マルチネス。彼奴はもともとネイビーシールズの隊員だつた。成績優秀、射撃も格闘も上手くて将来有望だつたらしい。」

「だが人格に難ありでな、誰彼かまわずすぐに殴るし、喧嘩つ早くて街でもしょっちゅう一般人と揉めやがる。もちろん彼奴は現役のスペシャルフォースなんだから相手をいつも殺しかけてたんだ。」

「特に女関係が酷かつた。気に入つた女にやすぐに手を出し、ほぼ力づくの時もあつて相手に怪我させることもしばしばだ。」

「んである時だ、中東での任務中。まあスペシャルフォースとかは民家に乗り込んで交渉で泊めてもらうこともあるんだが、彼奴は何をトチ狂つたか、その泊めてもらつた家の娘を夜中にレイプして、首絞めて殺しやがつた。異変に気付いて部屋に入ってきたその子の両親もな。いかれてんだろ?」

「もともとの素行も悪かつたが任務の実績で残された彼奴は、その一件で除隊処分。その後は傭兵になつた。」

「傭兵になつてからは更にエスカレートしてな、制圧した村の女とか、交戦したチャイルドソルジャーとかに手を出すこともあつたらしい。」

「街とかでは、顔だけは良いからナンパしてきたやつをレイプして、その残りをそこらへんで見つけた不良どもに”食わせて”部下を増やす。」

「いいか、ハチ公。彼奴は正真正銘のクソ野郎だが、戦闘能力は本物だ。あいつ一人で小隊規模の武レジスタンスを皆殺しにした事もある。俺もすぐそつちに向かうが、一応気をつけろ。やつは強え。」

土曜 千葉市某所

「待ち合わせは、ここだよなあ。」

待ち合わせ時刻の10分前、おれは、集合場所に指定された公園に来て居た。

目的のバーはドレスコードもあるそれなりに高級な場所だ、一応ちゃんとした服装で来たし髪型も整えた。

まあ、ほぼ小町がやつてくれたんだけどね。

いや、俺もできるよ?仕事でやることもあるし。できなくはないけどね。

まあ、女子のセンスには敵わんということで。

「あ、ヒツキー？」

と、後ろから知つた声が聞こえて振り返つた。

「…よお。」

「…ん」

と、由比ヶ浜は俺を見た後、恥ずかしげに目をそらした。

「…その、似合つてるね。」

「…おう、まあ、小町が選んでくれたからな。」

「そ、そ、うなんだ！ 小町ちゃんセンスもいいんだね！」

そしてまた沈黙。

なんだこれ、なんかめっちゃはずいぞ。

由比ヶ浜もまたそこそこ高価そうなピンク色のドレスに、髪を整え、メイクも場に合わせて大人っぽくしている。

あまりそういうことに詳しいわけではないが、それでも今日の由比ヶ浜がいつもよりも、こう、なんかいい感じなのはわかる。

「…」

「…」

だがまあ面と向かって褒めてやれるほどギザなハートは持つてない。

気まずい沈黙が流れる。

すると俺の右横からにゅつと顔が出てきた。

「だめだなあー、ヒキタニくん。思つてることはちゃんと口に出さないとー。結衣つてば今日の為にすぐーく準備してたんだぜ?」

と、軽い感じで声を掛けってきたのは、海老名さんである。

「ちょ、ちよつと姫名!」

「まあまあ、結衣だつてせっかく頑張つて用意して来たのに、ヒキタニくんにはちよつとは乙女心を分かつてもらわないと。」

え、なに、なにを言えばいいんだよ。

由比ヶ浜は、ううーと唸つたあと、意を決したように、しかし躊躇いがちにちらつと俺を見て、口を開いた。

「その、ヒッキー、どう、かな。」

どうつて言われても…。

「…まあ、いいんじやねえの。」

「…えへへ、そ、そつか。」

いや、はずい。は?はずいんだけど。

「もうちよつとなんかなー。まいつか！それで？わたしは？わたしはどう？」
と、海老名さんは俺の横を離れ、由比ヶ浜の隣に立つた。

ライムグリーンのドレスに、淡いピンクのカーディガン。髪は左肩の近くでまとめて、右側も緩く広げられている。かなり、大人っぽく見える。

「まあいいんじやねの」

「…なんか同じ台詞なのにぜんぜん心こもつてないなー。」

まあ、殺し屋だしな、この人。なにもかも技術だと思えば冷静にいられる。

「何やら浮ついているようだけど、依頼で来ていることを忘れないで頂戴。」
と、後ろから声が聞こえ、振り返る。

「…」

「…」

「…」

「な、なにかしら。なぜ誰もなにも言わないの？」

立つっていたのは、やはり雪ノ下だつた。やはり彼女も綺麗な服に身を包み、そしてやはり美しかつた。

「…ゆきのん、綺麗…。」

シンプルなデザインの深い青色のドレスは、装飾で誤魔化すことなく彼女の完璧なス

タイルをありのままに浮かべさせている。髪はトップでまとめられ、綺麗な耳には、銀色の大きめのイヤリングが下げられ、雪ノ下が動くたびに揺れ動いて光を反射する。

「…ヒキタニくん、感想は？」

「…いいんじやないすかね…」

「…どうも。」

そして場には、本日何度目かの沈黙が流れた。

「目的地はここよ。」

ついたのは、見上げるほどの大層ホテル。川崎がバイトに出てるのはここの中上階にあるバーらしい。

「ほえー、すごいなあー。」

由比ヶ浜は隣でホテルを見上げながらぽけっと口を開けている。
中身はやはり由比ヶ浜である。

「…ヒキタニくん、あれ。」

海老名さんが俺のは袖をちよいちょい引いてホテルの看板を指差す。看板と言うより碑みたいたが。

「…」

「川崎さんは関係ないとは思うけど、ここダイナーだね。」

俺と海老名さんが見つけたのはホテルのロゴに隠されたとあるマークである。
ここが、アウターの休憩所？

「ほら、早く行くわよ。」

「わわ、まつてー。」

雪ノ下は先行してホテルの中に入つて行く。あわてて由比ヶ浜も小走りでついて
いつた。

「…に入るか。」

「ん、そうだね。」

俺たちも、それにつづきなかに入つて行つた。

ロビーをスルーしてバーとかレストラン用のエレベーターに乗る。そのまま途中で
止まることもなく最上階へ。

「結衣と雪ノ下さん、入る前にちょっとお花摘みに行かない？身だしなみの確認も含
めてさ。」

エレベーターから降りたとき、海老名さんがそう一人に声をかけた。

「…そうね。比企ヶ谷君、少し待つてもらつてもいいかしら。」

「ん、その辺にいるわ。」

三人は化粧室の方へ向かつて行つた。多少の時間は海老名さんが稼いでくれるだろう。

俺は目的のバーに向かつて行く。

するとかなりきつちりした服装のボーアに止められる。年齢は40を超えていたんだろうか、そして同業者の匂いがする。

「失礼ですがお客様、年齢を確認できるものをご提示いただけますか。」

俺は無言で、用意していた百円玉三枚を取り出し、上から裏裏表の順で重ねて手渡す。ボーアは手元を見ずに背筋を伸ばしたまま受け取り、親指で百円玉をずらして一瞬だけ目を下に向けて確認する。

「失礼致しました。右奥の扉をお使い下さい。」

「いや、今日は普通の席を使いたい。あと、この後もう三人来る。内二人は一般人だ。」「かしこまりました。」

だいぶ前に師匠から教わった”アウターのルール”が役に立つた。

俺は横目で店の中を見る。

奥の方のカウンターに川崎の姿を確認した。

「あのカウンターのバー・テンダーは?」

「一般人でござります。」

「嘘ではなさそうだ。川崎は白か。」

「ヒキタニくーん」

そこで、三人が戻ってきた。

「それでは、こちらです。」

ボーイが迎え入れてくれる。

由比ヶ浜と雪ノ下は俺がエスコートするが、余つてしまつた海老名さんはボーイがそのままエスコートしてくれた。

俺達はカウンターに座る。女性の席を引くのは久しぶりだつた。相手が雪ノ下達なのもあつて変な汗が出そうだつた。

ボーイは一礼して帰つて行く。

「なんか、きょうしゆくしちやうね。」

あれ？ 今誰が言つた？ 由比ヶ浜？ まじで？ 恐縮つて言つた？

「ご注文はいかがいたします…」

青みの混じつた髪のバー・テンダーは、俺の顔を見て硬直する。

「あははー…。どうもー…。」

「こんちには、川崎さん。年齢を詐称してのバイトは、あまり関心しないわね。」

二人が川崎に声をかける。

川崎はいつかのような 冷めた目で俺達を見る。

「…あんたらこそ。未成年が入れるお店じゃないけど？」

「今日は依頼で来たのよ。他でもない貴女の弟さんにね。」

その言葉を聞いて川崎は顔を歪める。家族の名前を出されるのは気に触るらしい。

「何しに来たの。」

「弟さんから川崎さんの帰りが遅くて心配だつて相談を受けたんだよね。結構心配しててみたいたつたよ？」

川崎は今度は少しだけ顔を俯かせる。

本人も仕方なくでやつてているバイトなんだろう。兄弟も多いと言つていたのでおそらくはお金の問題だろう。

「…うちがあんまり裕福じやないからさ、学費とかまで出せる余裕がないんだよ。でも進学はしたい。なら自分で稼ぐしかないじyan。」

「でもこのバイトで勉強時間が削るられているのでは本末転倒でしよう。予備校に通つていいだけでは志望校には受からないわ。」

「あんまり無理ちやうと体も壊しちやうし、こういうのはやめておいた方がいいんじゃないかなー、と…。」

雪ノ下はやはりすっぱりと、由比ヶ浜はおずおずと川崎にバイトを辞めるように促す。

だが、それでは一番の問題が解決しない。

「じゃあどうしろっての？あんたらがわたしが進学するまでの予備校代とか、大学の学費とか払ってくれるの？できるわけないじやん。どつちにしたつてお金が必要。自分でやるしかない。私は志望校を変えるつもりは無いし、多少無理したつてやってみせる。」

川崎は強く言い放つ。曲げる気は無いだろう。当然だとは思う、たつた一度の人生で、高校生時代の数年間でその後の人生が決まってしまうのだ。すこしごらいの苦労なら喜んでやるだろう。

誰だつてそうだ、お金に困るなんて事はよくある、川崎はまだマシな方とすら言える。俺ならば一人ぐらいの学費ぐらいは貯まる金を出す事はできる。だが、それではやはり意味がないのだ。

あくまで川崎の力で、川崎が出来る事で打開するしかない。

俺達はその手伝いをするだけ。背中を支えてやるだけなのだ。

「川崎」

「…何？」

川崎が俺を見る。話は終わった早く帰れと言わんばかりである。

「…うちはな、両親が居ねえんだ。」

まさかこんな話をする事になるとは。まあ、学校にも言つてあるし特別隠す事でもない。変に気を使われるのが嫌だつたから言わなかつただけで。まあ言う相手もいなかつたんだけどね！

由比ヶ浜と雪ノ下は目を見開く。まあ、ちよつとはびつくりするだろう。

川崎もは？つて顔で見てる。嘘だと思われてるらしい。

「俺が中3の時に事故でな、だから俺は結構家族の大切さつてやつを知つてるつもりだ。お前の弟がお前をどう思つてるかも。」

そしてそれは、俺が小町に思われることもきつと似てて。

「そしてお前がお前自身の為じやなく。下の兄弟の為に学費を残そうとしていることも。」

川崎はバツが悪そうに目をそらす、

「大志からお前の分の学費はあるはずつて聞いてたからな、一番下の兄弟とかはお前が働いて賄うとしても、大志の分は追いつかない。おそらくお前が妥協して低めの大学狙えば予備校代も浮いて二人共行けるのかもしれないが、あいにくお前には妥協つて選択肢は無いんだろうな。」

「…そうだよ。私は志望校を諦めたくないし、かと言つて大志にその分を押し付けたくない。ならもう、自分でやるしかないじやん。」

俺はケータイを出してブックマークから川崎の通つている予備校のサイトを出す。

「お前スカラシップって知つてるか？」

川崎は俺の携帯を覗きこむ。

「一応そう言うのがあるのはね。でも、私じゃそんなの狙えないよ。」

「そりやバイトのせいだ。お前の一年の頃の成績とか、中学の頃とかを大志に聞いたけど、そこまで悪くなかったぞ。むしろ学年でもトップクラスだつた。でもそれは自主勉強の時間が十分に取れてたからだろ？志望校に受かりたいが為に無理して予備校に通い始めたらしいが、ありやレベルの高いのを習つて、それを予習復習で定着させなきや意味がねえ。授業のペースも早いし、理解出来ないまま進まれたつてもつとわからなくなるだけだろ。」

そこでとなりにいた雪ノ下も口を挟む。

「なるほど、奨学金ね。予備校で使う教科書も自習には向かないらしいものね。やはり基準も高いようだし、バイトを続けていても学力は下がる一方かも知れないわ。」

それを聞いて川崎は顔を青ざめさせて目を見開く。

「でも、そんなのどうすれば…。」

そう、そこで、だ。

予備校はしつかり活用できればもちろん合格の確率も上がる。しかしその学費を賄うと言う問題を解決するにはもうスカラシップを取るしかないのだ。

その為に。

「そこで、だ。川崎、お前奉仕部で勉強しねえか？」

「…は？」

「え？」

「うん？」

「ほー」

全員が何言つてんのこの人と俺の顔を見る。海老名さんだけは関心したように俺を見ている。

「バイトを辞めて、奉仕部で集中勉強。雪ノ下は学年トップの成績だし、俺も文系科目なら学年3番だ。川崎の志望校も文系らしいしそこそこ役に立てると思う。」

「ちょ、何言つてんの？あんたらだつて受験だし他人に構つてる余裕なんてないでしょ。それにそれで学力が上がる保証も…。」

川崎は焦つたように反論するが、雪ノ下と由比ヶ浜が俺の案を肯定した。

「いえ、私は良い考えだと思うわ。貴女の成績がいいことも聞いているし、私も志望は

文系だから都合がいいもの。貴女から予備校の資料も見せて貰えれば私にも得はあるから遠慮はいらないわ。」

「…うん！私も良いと思う！ゆきのんすつごく教えるの上手だし、みんなで勉強したらとっても良いと思うよ！川崎さんもきっと1人だと理解しにくいところもいっぱいあると思うし。」

2人の言葉に川崎は目に見えて狼狽える。

「で、でもそんなの。」

「川崎、どつちにしろ今のまんまじや勉強時間が削られて悪循環だ、学校での評価にも影響する。」

川崎は悩むように顔を俯かせて眉を寄せる。

数分ほどそうしたかと思うと、躊躇いがちに俺達を見て口を開く。

「…じゃあ、ごめん。お願ひする。」

「ん、了解。」

「任せて頂戴。」

「頑張ろうね！」

そうして、俺達の依頼は終了となつた。

（

何も注文しないのも申し訳ないのでジンジャーエールとか頼んで、それを飲みながら奉仕部の場所や、特に勉強したい範囲などを話しあつた。

そういうえば川崎の仕事をかなり止めてしまったと思ったが。どうやら最初のボーアイが気を利かせて他の客の対応をしてくれてたらしい。ダイナーのスタッフはかなり良い人達と聞いていたが本当だつたようだ。

と、そこでかなりほつたらかしてしまつていた海老名さんが目に入る。

「…？ 姫名何見てるの？」

「ん？ あ、いや別に？ あ、その勉強会私も行つていい？ 私も結構行き詰まつててさ。」

「へ？ もちろん！ いいよね、ゆきのん、川崎さん。」

「構わないわ。」

「うん、私も別に。」

「ありがとー！ あ、川崎さんサキサキって呼んでもいい？ なんか語呂いいよね。」

「あ！ いいねサキサキ！」

「え、ふつうに嫌なんだけと…。」

「サキサキこれからよろしくねー。」

「ちょ。」

そんな会話を聞きながら、ふと海老名さんが見ていた方を横目で見る。

そこは金髪のガタイのいい男が出て行くところだつた。

「…？」

何となく気になる背中だつた。あれはまさか。

「ヒツキー、帰るよ？」

「あ？ ああ…。」

海老名さんは何を見てたんだ？

「いやー、一件落着だね！ 私何もしてないけど。」

「うん！ 私はこれからも何もできないけど！ 勉強会的な意味で！」

バーから出た俺達は暗くなり始めた道を駅に向かつて歩いていた。

「次の電車は、えと、これかしら。」

「こつちだよゆきのん…、それ東京行っちゃう。」

「え、ええ。もちろんわかつてるわ。言つてみただけよ。」

雪ノ下と由比ヶ浜は時刻表を見ながら次の電車を探していた。

「わり、俺買うもんあるからそこ寄つてから帰るわ。」

「そう？ わかった！ また学校でね！」

そう言つて俺は別れる事にした、千川さんからの事もあるしさつきの男のことも気に

なる。

「結衣。私もこれから家族と用事があるからタクシーで帰るね、丁度こつちの方なんだ。」

「え？ そ、 そう？ わかった。姫名も気をつけて帰つてね。」

「うん。雪ノ下さんもまた学校でね！」

「え、 ええ。 また…。」

雪ノ下はなんだかぎこちなく手を振る。

2人はその後改札に入つていった。

残つたのは、俺と海老名さんである。

「海老名さんはなんで残つたんだ？」

「んー？ 本当に用事があるんだよ。」

「そりやバーで見てたやつに関係してんのか？」

「まつきかー。私がそんな惚れっぽく見える？」

「そんな話をしてもんじやねえ。」

海老名さんは、口角を上げて目を細める。

「ふふ、まあ、ちょっと知つてる顔が居ただけだよ。別にそう言うんじやないから安心して？ 君を殺せっていうようなのも来てないし。」

さつきまでとは雰囲気が違う。

「んじやあ用事つてのは？ 悪巧みか？」

「いつもなんか企んでると思わないで欲しいなー。まあ次の仕事の打ち合わせだよ。丁度先方がこっちにいるらしいから会つてくるの。服装もしつかりして来たしね。」

そう言つて彼女は身体を確かめるように腰を回してスカートを揺らす。

「まあそんなに心配しないでよ。私はゴールデンライアンとは関わりないし。話した事もないしね。」

その名前が出て来て俺は警戒度を高める。

「やつぱり居たのか、そいつは。」

「さて、どうかな。さすがに仲間売つたりはできないよ。」

挑発するように彼女は笑う。

「喋らせるつて言つたら？」

「本気かな？ 色んな目があるこんなところで私を押さえられる？」

ただでさえ目立つ格好をしてる俺達は特に何もして無いが周りから見られている。

「ふふ、まあまたね。勉強会楽しみにしてるから。」

「…ふん。」

海老名さんはそう言つてタクシーの方へ歩いて行く。

俺はタクシーが出たのだけ確認すると、とりあえずゴールデンライアンの手掛かりを捜すために歩く事にした。

さつきのバーにもどつて話を聞いてみるか？いや、彼らは喋らないだろう。今日あたり千川さんもこつちに着くはずなので、落ち合つてみようか。

ラインで知らせとこう。

とりあえず座れる所をと思ってマ○ドナルドに入った。結構並んでる。

そしてあと1人というところで俺の携帯がポケットの中でプルプル震えだす。もう千川さんから連絡が来たのかと携帯に出すと意外な名前が出てきた。

「はろはろー。さつきぶりー。」

「…なんだよ。」

「いやさー、ゴールデンライアンの事なんだけどさあ。まあちょこつとなら教えてあげようかと思つて。あれ？今マツ○いる？」

「どういう風の吹き回しだよ。とつとと教える。」

「えー、もうちよつと態度とかさー。」

教えるこらさつさとしろよ。

「まあまあ、えーとね、彼はーーわつ」

そこで、車のブレーキの音とタクシードライバーの怒鳴り声が聞こえた。

「おい、どうした。」

「わかんない。なんかいきなり車が突つ込んで来て。」
ガシャア！と窓が割れる音がした。

「なん！」

ゴツつと言う鈍い、そして俺の聞き慣れた人を殴る音が聞こえた。

「よつすー、あれ？誰かと電話してた？彼氏？」

携帯から耳を離す。どうやらテレビ電話にされたらしい。

そこにはタクシーの車内に、鼻から血を流し、右目の下あたりが赤くなつて髪を掴まれた海老名さんと、ニヤニヤ笑つた外国人が写つていた。

「よお。悪いけど彼女借りるわ。」

底の住人達

プツツと音と画面が切れた携帯を見ながら俺は考えを巡らせる。

海老名さんと別れてから10分も経つてない。まだそう遠くない筈だ、出た方向だけは見ていたが目的地しかわからない。

だが恐らくは人通りが少なく、ある程度道路の幅があるところだろう。公園の近くか?

携帯でそれらしい場所を探すが、そもそもがオフィス街なので休日のこの時間では候補が多すぎる。無駄に広い場所や、人の来ない所が多いのだ。

虱潰しにしている時間は無い。

一分一秒で、あの人は。

気が焦る。いや、助ける意味あるのか? 敵だぞ?

浮かんだ考えを振り払う。

ちがう、俺はそんな考え方で今までやつて来たのでは無い。

海老名さんは由比ヶ浜の友達もある。行かない理由なんかない。
連絡先からある人物をだす。

「あれ？ ハチくん？ どう…したの？ えへへ。連絡くれるなんて珍しいね。」

調べ屋である。あの人ならば、どこかで見ていてもおかしくはない。

「砂上さん、千葉市でたつた今起きたタクシージャックの場所つて分かりますか。」

「…なにそれ？」

砂上さんはどこかムツとしたように返事をする。挨拶すらしなかつたのが気に障つたのかもしれないが、今はそんなことを気にしてはいられない。

「すんません、時間がないんです。駅からあまり遠くはないと思います。」

「…ああ、蜘蛛ちゃんが襲われてるみたいだね。これがどうかした？」

いや、どうかした？ ジゃなくて。

「その場所を教えて下さい。」

「…なんですか？」

砂上さんは嫌味なんかじやなく。本当に分からぬという声でそう言つた。

「助けに行くに決まってるでしょ。敵だとかどうでもいいから早く教えて下さい！」

そして、砂上さんは沈黙する。何を考えているんだろうか。

苛立ちが募る。

「…やっぱりヒーローみたいだねー。あれ、”救世主”だつけ。」

「だからあ、わけわかんないこと言つてねえで。とつとと教えるつて言つてー」

そして砂上さんは俺の言葉を遮るように言つた。

「ああ、さつきのなんでつていうのはね。なんで助けようとするのかつて意味じやなくてー。」

君が行くまでもないよつて意味だよ。」

狭いタクシーの車内で私はぐらぐらする視界の中にいる無駄にでかいそいつを見ていた。

既に運転手さんは左の側頭部から頭の中身をだらしなくぶら下げて絶命していた。
私がやつたのではないが、とても申し訳なく思う。

まあどうでもいいか。

「わりいな。結構つつうかかなりいてえかも知んねえけどよお。まあ俺の後にちゃんと日本人サイズの奴らが可愛がつてくれつから安心しろや。」

そういうつてそいつは私の脚に手を這わせるようにして私の下着に手を伸ばす。

私は今、殴られてシートの部分に横たわっている状態だ。頭は助手席側。男はニヤニヤ笑いながら私の身体をジロジロ舐めるように見回している。

さて、今日はどんなのを履いて来ていたらうか。よく覚えていないが確か気に入つていたやつだった気がする。

となれば、触られるわけにもいかないか。

それにもしても、色々とがつかりである。

雑というより慢心が過ぎる。

女は抵抗なぞ出来ない。もししても簡単にへし折れると思つてているのだろう。女を性玩具としか思つてない。好みか否かでしでか判断しないのだろう。

だが、それがいい。そういう奴がいい。

私が殺すならそういう奴でなければ。

「…あ？ お前何笑つてやがる。」

笑つていたかな。まあ笑えもするだろう。体がデカイのにこんなに狭い車内で襲おうとする。私の手さえしばらない。

何より。私の上に跨つた辺りから。死にかけているのが分からぬのだから。

「別に？」

私はそう言つて左手を握りながら軽く引く。

すると、男の首の左側がぱくっと裂けて血が噴き出した。

（

俺は砂上さんに場所を教えてもらい、タクシーを捕まえた。

タクシーの車内で、俺は海老名さんの戦い方について考察する。

全体的に筋肉が付いていて、基礎体力も高いのだろう。

しかし、注目すべきは、服装である。彼女は必ず長袖を着ている。恐らくは腕につけた武器を隠すためだろう。

彼女が体操服を着ているのも見たので勿論怪我や傷を隠す為の長袖ではない。そしてその時に腕を見たが、手首のと肘にかすかにバンドか何かの跡があつた。

おそらく彼女の凶器はワイヤー。あのバンドは糸のリールと巻き取り用のモーターアクションをつけるためのものだろう。巻き取りとワイヤーを出すのの切り替え用のスイッチも何処かにつけてるはずだ。

漫画とかであるようにワイヤーでスパスマッピング切つたりとかはまず無理である。どこかにセットしてトラップとして使えば可能性もあるかも知れんが、格闘戦でそんなことをしている余裕はない。

まあ、彼女自身が室内や”狭い車内”などで待つて戦うのなら、有利なんでものではないだろう。そして、”夜や夕方”など、糸の見えにくい時間帯を狙えばなおさら。初見ではまず対応できない。

勿論それでも切断は容易ではない。だが別に無理して切り離そとしなくてもいい。戦闘不能にさせられさえすればいい。

ワイヤーで首を絞めあげれば、肉に食い込んで外すのは難しくなるし、ワイヤーの表

面をわざと少しだけ粗く作れば、首に引っ掛けたワイヤーの片方を思いつきり巻き取るだけで、全く力を込めずともワイヤーは皮膚と肉を裂き、血管を傷つけ、上手くやれば失血死も狙えるだろう。

問題があるとすれば、袖が汚れることと、絡まるところ大変なところだろうか。

彼女は仕草で誘つたのだろう。バーでの男を。

「が、ああああ!?」

ゴールデンライアンは唐突に吹き出した血に驚き、傷口に手を当てながら軽く仰け反つた。

それに合わせて私は思いつきり上体を起こし、男の鼻つ柱に肘打ちを入れる。
さらに態勢を崩したところで男の左腕を引き足をかけてひっくり返しながらシートの足場に落とす。

男は背中が付いたとともに肩を浮かせて右腕で下から私を殴ろうとするが（腕も長いので座席に膝立ちしている私の顔にも届きそうだ。）、私は当たる前に腕を止める。

遠くから見たら、もしかしたら私が超能力でも使っているように見えるかもしれない。だがなんのことはない。タネも仕掛けもあるただの技術だ。

私が上になつた時点で袖から出したワイヤーを助手席と後部座席の頭の部分に引っ

掛けておき、それの先を腕に巻きつけて巻き取つて締め上げたのだ。両側の輪つかの先を重ねて円のようにしてある。糸をめり込ませてはいるので引くことも押すこともできないだろう。

「申し訳ないんだけど今日はちょっと太めのやつだからさ、結構、というか多分かなり痛いけど頑張つてね。」

「な、やめ……！」

私は手を軽く握り糸の片側を巻き取る。

キュイイイイと音を立てて糸^シが回りながら肉に食い込んでいく。

「ぎ？ がああああああああああああ！？」

「うんうん、痛いねー。」

私は足下でジタバタしている男を見下ろす。多分私は今笑っているのだろう。

「そろそろ骨だよー。舌を噛んだりしないようにね？」

「が、あが、ぎやああああああああああああああ！」

がりがりと、骨を削る感覚が糸を伝つてくる。さてさて、骨を直接削られるつてどんな感じなんだろう。

やがて、ぼきりと、腕が落つこちた。

「ぎい、ひ、ああああ。」

男はさつきまでの威勢はどこへやら。情けなく腕を押さえている。

「ゴーレデンライアンさん。実はねー。わたしのところに貴方を殺すよう依頼が来たんだよね。”見ててつまんないから殺せ”ってさ。」

「…はあ：はあ、は？」

男は息も絶え絶えに聞き返す。

「まあ、貴方はそこそこ強いけど、やつてることがはつきりいって小物だし。まあいらな
いなつて思われたんだろうね。」

「なん、何を。」

私は目を細めて男を見る。

男は何かを思い出したかのよう口を開く。

「まさか、お前、”愛人達の蜘蛛”…」

「せいかーい。貴方が殺される番が来たんだねー。」

私は基本的にラバーズのすぐ上の方からの依頼を受ける。その内容は、今回のように仲間内の肅清が多い。

「ねえゴーレデンライアンさん。私がなんでこんな仕事してるかわかる？」

「何、言つて。」

「私はね、貴方みたいに自分が強いつて勘違いしてる人を殺しちゃうのが大好きなん

だ。圧倒的弱者のはずの女でこどもな私に。」

男は何を言つてるのか分からぬと言う表情で私を見る。明らかな怯えと、混乱に満ちた貌。

「そうそれだよ。その表情が見たかつたんだ。辛いかな、痛いかな、怖いかな、憎いかな。貴方は私に殺される。なんのことはなしに、ゴミみたいにこともなく。」

ああ、ぞくぞくしてしまう。この満足感が、私の生きる意味なのだ。

「可哀想にね。でももう大丈夫。」

私はそこで言葉を区切る。

男は自分が何をされるのかわかつたのだろう。抵抗しようにも彼はもはや助からない。

い。

「それじゃあ、終わろつか。」

私は糸をかける。耳障りな音が、静かな車内を満たしていく。

い。

車を出た私を出迎えたのは表情のない、瘦せすぎな男たちだつた。

「お疲れ様。中にあるから持つてつて。」

彼らはやはり無表情のまま体をいれる袋を持つて車に向かう。

彼らは”地底人”と言われる人たちだ。死体の処理や現場の片付け、後は拷問もやつた

りする。人間の底の住人。だから地底人。

ふと、人の気配を感じて道の先を見ると、そこには影喰らいが立っていた。

「あれ？ 比企ヶ谷君。来たんだね。うれしいなあ、心配してくれたの？」

まあ、襲われるタイミングで電話をかけたのもあるが。

「顔、大丈夫か。」

彼は少し目を逸らしながらぶつきらぼうにそう言つた。

私は一瞬言葉に詰まる。まさか、本当に心配していたのか。私を？

「大丈夫大丈夫。まあ、週明けは学校休むけど、腫れが引いたらメイクで誤魔化して学校行くよ。」

勉強会も行きたいしね。と私は続ける。

そうかと彼が言つた時、比企ヶ谷君の後ろに黒いバンが止まつた。

中からぞろぞろと4人の男が降りてくる。

「あれ？ これどういう状況？」

「あればライアンさんの言つてた女？」

「結構可愛いくね？」

「ドレス着てるし。」

頭がラリつてるのだろうか。私に付いた返り血が処女貫通の血にでも見えるのか。

男達は、今度は手前にいた比企ヶ谷君に注目する。

「何こいつ。」

「お前もライアンさんに呼ばれた奴?」

「なんかヒヨロくね?」

「つーかキモくね?」

男の1人が比企ヶ谷君の左肩に右手を置く。

比企ヶ谷君は無表情だつた。

真つ暗な目で、ただ前を見ていた。

「おい、こつち向ー」

言い終わる前に、彼は男に背を向けたままいつのまにか左手に握っていたナイフで男の首を刺した。

ぶえ、と血の混じつたうめき声。男はきよとんとした顔で止まつた後、思い出したかのように空気を求めて口をぱくぱくさせる。

後ろの男達は丁度影になつて見えないのでだろう。しかし、何か感じたらしく、訝しげに比企ヶ谷君を見ていた。

やがてぐらりと体が傾き、ゆっくりと男は左側に倒れこむ。

倒れるのに合わせ、比企ヶ谷君はナイフを抜き、そのまま立つていた。

ナイフから血が滴る。真っ赤なそれだけが、暗くなつた道で街灯の光を反射していた。

「なつ、何やつてんだてめえ！」

男が比企ヶ谷君に向かつて行く。

ああ、可哀想に。プロに立ち向かうにはあまりに無防備で、あまりに遅い。

比企ヶ谷君はゆつくりと振り向いて、腕は構えずに、自然にぶら下げている。男が右手で殴りかかる。比企ヶ谷君は目で追えない速さで左手を右手に逸らせて振り上げた。

ぱくっと男の右腕の皮膚が縦に裂ける。

男は焦つて腕を庇い下がろうとするが、比企ヶ谷君の右手の指が男の左目に刺さつていた。

ぎいいと男が呻く。比企ヶ谷君が右手を引くと、男の頭がついてきた。

えげつない。中で指を曲げて骨に引っ掛けたんだろう。痛みだけで気を失うレベルだが、逆に痛すぎてすぐに覚醒する。

「あぎやあああああ！！！」

私ですら反射的に耳を押さえそうになるような声をあげて、前屈みになる。そのまま比企ヶ谷君は左手のナイフで腹を突き刺す。

ばたりと男が倒れる。

残りの2人は明らかに怯えた顔になつて足をすくませている。

左にいた男が意を決して比企ヶ谷君に蹴りかかる。

彼は何のこともなくするつと避け、首に何かをかける。

比企ヶ谷君が男の背中に自分の背中をあて、腰を使つて勢いよく背負いあげる。ぐえ、という声を最後に男の首がごろつとどれる。

⋮影喰らいもワイヤー持つてるんだ⋮。

お株を早くも奪われた気分だ。見せても無いのに。もしかして看過されたた？
彼が使つたのは今日私が持つてたのよりかなり細いらしい。細ければ私だつて切り落とすぐらいならできる。

最後の1人は流石に戦意を喪失したらしい。車に戻ろう土佐を向ける。

どつと音がしたかと思つたら、背中にナイフの柄を生やして倒れ込んだ。

「⋮え、えーと。いやー、助かつちやつたなー。ありがとね、影喰らいさん。」
とりあえず私は彼に声をかける。

彼は何も言わずナイフを取りに行く。

もしかして、怒つているのだろうか。
なんのために？

まさか、私のために？

その時、私の後ろから、がつと音がした。

私が振り返ると、そこには意外、ゴールデンライアンが立っていた。顔を腫らし、なくなつた腕はベルトで止血が施されており、首はどうしようもなかつたのか血は垂れ流しである。

「ありやー、生きてたかー。流石の生命力だね。死んだふりしてたの？」さつきの地底人の姿はない。殺されたか。彼ら悲鳴もあげないからなあ。「ごろじでやる。」

血の混じつた声でライアンはそう言つた。

あーあ、見てられない。さつさと殺してあげなければ。

私からライアンまでは4メートル。少し引きつけてさつくりいこう。

私が袖から糸を出そうとした時、唐突に視界が遮られた。
は？何？と思つたら。

それは影喰らいの背中だつた。

「ちよつ、影喰らい君？何を…」

彼は何も言わない。

右手にナイフをぶら下げたまま、軽く体重を落として脱力した立ち方をしていた。

「じゃまazんな!!」

ゴールデンライアンが私を遮つて立つ比企ヶ谷君を殺そと前に体重をかけたと思つたら比企ヶ谷君がゴールデンライアンの懷にいて右手のナイフを左に振り抜いていた。

「え？」

と呟いたのは私だつたかライアンか。

目の前にいた彼が、ライアンが動こうとするタイミングで、一瞬で距離を詰めたのか。ほとんど瞬間移動じやん。

ライアンの赤かつた首に、新しい赤い横線が入る。

ライアンは驚いたような顔をして。その顔は、顔だけでゆっくりと上を向き。そのまま反対側に折れこんだ。

首の断面からびゅーっと血を吹き出して。やがて身体もゆっくりと後ろに倒れていった。

どさつと音がする。

早すぎた。目で追えない。

学校で観ていた分には、そこそこ強そうぐらいにしか思わなかつたが。彼はどうやら無意識にスイッチを入れ替えて いるらしい。

最後のあの速度を初見で出されたら、私は反応出来なかつたかも知れない。
 しかし彼は私の武器に気づいていたようだつた。
 思つていたより彼は強いらしい。付け入るところがあるとすれば、情に流されやすい
 ところか。

「海老名さん。」

「蜘蛛つて呼んで。何かな?」

彼は静かに私を呼んだ。その声の中にある感情はあまりにも複雑で、私は読むことが
 できなかつた。

「やめようとか、思わねえのか。」

彼はそう続けた。

やめようとか、か。

答えは決まつていてる。

「思わないね。」

私は即答する。

「心配してくれてありがとう。変に巻き込んじやつてごめんね。私の代わりにそいつ
 らのことを倒してくれたのもありがとう。」

彼は何も言わず、私を見ていた。

「きっと貴方から見たら私は不幸に見えるのかもね。こんな風に戦うことに、殺すこ

とに取り憑かれた私が。ああいう奴らがいる中で、女一人で戦つての私が。」

彼は何も言わない。

「でもね。私は、私自身は満足してる。そりやそこそこ危ないことも、痛いことも経験したけど。私は私のやりたいことをやれることに満足してる。もしどこかで失敗したって、私は別にいいんだ。」

「私は投げやりに生きてる訳じやない。たまたまやりたい事が人殺しだつただけだよ。」

彼はそこで手元のナイフに目を落とす。

「なら、あんたから見たら俺は不幸か。」

私は笑つてこう答えた。

「これ以上無くね。」

害虫

由比ヶ浜さんとはあの後軽く食事に出かけ。別れた私はタクシーを捕まえて、家の近くのコンビニで降りた。少し買うものがあるのである。

ふと、飲料コーナーに最近たまに、本当にたまーに飲むようになつた暴力的な甘さのコーヒーを見つけた。

それを手に取り、最近食べたものを思い出しながらカロリーを計算する。

大丈夫、運動もちゃんとしているから問題ないはずだ。

コーヒーをカゴにいれ、ガラスの戸を閉める。

閉めた扉に映つた自分の顔と目があつた。

私は笑んでいた。楽しいのだろうか。

カゴに入つたコーヒーを見て、私はあの部室を思い出していた。

テンションが高く、私とは真逆だがとても優しくて、友達想いな少女と。

無口で捻くれていて、そのくせこのコーヒーを勧めていた時は異常に興奮していて。

それでいて川崎さんの悩みを簡単に解決した少年。

ずっと一人でしたが、あの二人と三人でああしてどうでもいいことを話していくれるの

は、幸せなのかもしれない。

会計を済ませてコンビニを出る。ここから私の部屋迄は五分くらいだ。

そういうえば肥満の確率はコンビニからの距離に比例すると聞いた事がある。
：いや、大丈夫。きちんとカロリーは計算している。自己管理は出来ている。

由比ヶ浜さんはよく食べるらしいが、テニスの時一緒に着替えたが、ウエストは美しく引き締まっていた。

なぜかしら。

上も大きいし。

自分の身体をチラツと見る。

姉は高校生の頃には確かもう。

いえ、まだよ。そういう所は遺伝によるところが大きい。

右手に感じる重みを思い出す。

来週分のノルマ、牛乳パック三本。

ええ、大丈夫。望みはあるわ。

私は足を進める。早く家に帰つてパンさんでも見ながらーー。

その時

私の背中に

冷たい感覚が走った。

殺すと、耳元で囁かれたように。

「つ！」

私は前に飛びながら身体を反転させ、背後を見る。

そこには。

誰も居なかつた。

「はろはろー。こんな夜にどうしたのー。」

「もしかして迷子？ なんならおねーさんが送つてくよん？」

私は比企ヶ谷君と別れた後。車を呼んで、急いでこちらに戻つて來た。

色々あつたので間に合うか不安だつたが、なんとかなつてよかつた。

「…何の用ですか。」

私の前にいる少女は不機嫌そうにそう聞いて來た。

「私のセリフだよ。ここ雪ノ下さんちの近くでしょ？ そんな危ないもの袖に仕込んで、何するつもりだつたのかな？」

「貴女には関係ないでしよう。」

「いやいや、雪ノ下さんとは友達になつたしね。それにこの後は結衣のどこに行くつ

もりなんでしょ?」

暗い夜の闇の中にいた彼女は、ゆっくりとこちらに歩きだし。街灯が彼女を照らす。黒髪の先はヘアチョークで黄色に染められており。黒地に黄色のアクセントの入ったポンチョに黒いスカート、黒と黄色のしましまハイソックスに運動靴。

「前から思つてたけど、特徴増やすタイプの変装とはいえ、冗談みたいな格好だよね。比企ヶ谷小町さん?」

あの少年の面影を待つ彼女は、真つ暗な目で私を睨む。

「グラザーコンプレックスもそこまでいくと愛なのかな? 中学の頃から健気にお兄ちゃんに寄つてくる女の子を追い払つて来て。比企ヶ谷君の唯一の友達だつた折本つて言う子も殺そうとしたんだよね? まああの子は調べ屋が貴女から守るために、死なない程度に車で轢いちやつたらしいけど。」

「でも偶然つてびっくりだね。あの”影喰らい”と”蜂”が兄妹なんて」

彼女は、影喰らいと言う単語に反応したのか。ぎりり、と顔を歪ませる。

「同じ兄弟姉妹でも川崎さんとことは随分形が違うよねー。まあ小さい頃からの苦勞を考えばしようがないか。」

「さつきから何訳知り顔でくつちやべつてるんですか? いきなり横から邪魔して来たかと思えば、あの”愛人達の蜘蛛”がお友達の為に來たと? ああ気持ち悪い。あと顔

どうかしたんですか？元から酷いのに、直視出来ないレベルになつてますよ？」

やつと喋り出したかと思えばまあ口がお悪い。猫を被るのは兄の前だけらしい。

あと顔が腫れることにに関しては言わないでほしい。私だつて乙女なんだぜ☆

「まあ、誰が死んでもいいっちゃいいんだけどさー。ちよつと君のお兄さんに借りができてね。なあに。貴女の思つてるようなことはなかつたよ？　ただちよつとした修羅場を一人で超えて、絆レベルがガン上上がりしたぐらいでさ？　この怪我も彼との共闘の証だぜ。いやあ蜂ちゃんにも見せてあげたかつたなー。」

びきり、と彼女から嫌な音が聞こえた。

「まあまあ怒んないでよ。ここは少し私達も仲を深めてさ。なんならお義姉ちゃんと呼んでくれてもいいよ？」

シヤキツと言う音とともに、彼女の両腕の袖から、刃物が飛び出す。

街灯の光を鈍く反射するのは、えーとなんだつたかな。劇薬に強いイリジウムかなんかでできた刃である。刃と言うか針に近い、そしてよく見れば先には穴が空いている。彼女は確かに憎悪と、嫉妬と、殺意を込めて私を睨む。

「殺す。」

「かかって来い。殺さずに終わらせてあげよう。」
さてと、害虫同士馴れ合おうかな。

かつての出会い

月曜の放課後俺は千川さんに指定されたカフェに来ていた。

奉仕部は今日から始まつた勉強会で人口密度が激増し、しかも全員女子なので肩身がせまい。海老名さんは学校を欠席。あの怪我では仕方ないだろう。

そう言えば小町も昨日の夜に帰つてから部屋に閉じこもつてゐる。今までではあまりなかつたことで、何かあつたのかと聴いても部屋にもいれてくれなかつた。

正直言つてかなり心配である。小町に何かあつたらマジでやつた奴ら一族郎等皆殺しである。

だが何か小町には暗いものを感じる。俺には馴染み深い何かー

「ようハチ公、こつちだ。」

と、低い声が聞こえてはつとする。声のした方を見ると、喫煙席に千川さんが座つていた。

「…どもつす。」

「ああ。座つてくれ。」

促され、俺はテーブルの対面に座る。

「なんか好きなの頼んでいいぞ。奢つてやる。」

俺が座ったのを見て、千川さんはメニューをテーブルに置いた。

「いや、俺も財布持ってきてるんで。」

「遠慮すんな。あんだけ啖呵切つといて結局、ゴールデンライアンをお前に任せた詫びの分もある。」

「いや、俺も仕事ですし。」

「いーから頼めってんだ。」

歯を剥かれて威嚇され、俺は取り敢えずとコーヒーを頼む。

「…あざす。」

「…ん。」

そうして千川さんは無言になる。

…早く要件言ってくれませんかねえ…。

やがてコーヒーが来て、俺はそれに角砂糖を打ち込みまくる。
なんかオシャレなカフェの角砂糖つておいしいよね。

「いや、入れ過ぎだろ。」

「そうすかね。」

やがてコーヒーがあとコイン一枚で溢れるぐらいになる。別に脱脂綿で表面張力を

調整したりはしない。

ずずずつと口をつける。

千川さんはそれを引いた目で見ながらタバコに火をつけた。
ふーっと煙を吐く。

あれ？ マジでなんで呼ばれたの俺。

そして、千川さんが口を開く。

「レオンはな。俺のダチだつたんだ。」

俺は千川さんの顔を見る。多分割と驚いてたと思う。

「彼奴は、前は、つつてももうかなり前だが。初めて会つたときやあんな感じじやなかつた。」

「愛国心が強く、眞面目で勤勉。自分に厳しく。仲間に甘かつた。」

「海兵隊に入隊して、三年後にシールズに志願した。俺と彼奴は同年代でな。俺が特殊作戦群にいた時、シールズとの合同訓練で彼奴にあつた。格闘訓練でも俺達は外部の奴らが居るところじゃマスクを外せなかつたんだが。レオンと二人きりでスパーリングしてた時に取れてな。殴り合つて意気投合して、まあいつかと思つて、んで飲みにも行つた。」

「まあ、軟派な野郎ではあつた。酔つたら直ぐ女に声かけに行つて、成功したりひっぱ

たかれたり。」

「だが、彼奴はちゃんとわきまえてた。」

「そうこうあつて、三年くらいたつた頃か。彼奴から、よく分かんねえ姉妹に会つたつづーのを聞いたころから様子がおかしくなつた。」

「俺達は洗脳とか、言いくるめに対抗する訓練もやつてる。拷問にだつて耐えられるんだ。」

「だが、あれはなんかが違つた。どつちかというと宗教みたいな。」

「彼奴にはな。ちょっとした、本当に小さいコンプレックスがあつた。」

「彼奴はメキシコの血が混じつて。純粹なアメリカ人じやねえ。」

「彼奴が育つたところは、特に人種に対する敷居が高い。メキシコからの移民が多く入つて來てたのもあるが。」

「彼奴自身はアメリカを愛してた。アメリカという国を、文化をな。」

「だから軍にも入つた。國を守る為に。」

「それはもしかしたら、劣等感を紛らわせる為だつたのかも知れん。」

「彼奴は少しずつ、アメリカ人以外を憎むようになつた。」

「憎むつてより。人間とすら思わないような。」

「子供の頃、彼奴は母親を殺されてる。アメリカ人にな。理由はメキシコ人だつたか

ら、だ。」

「レイプされ、ゴミみたいに捨てられてたって言つてた。」

「普通ならアメリカ人を憎むだろ？だが、彼奴にとつても、もしかしたら、自分の不遇をどこかで母親のせいだと思つてたのかもしれん。」「もちろん彼奴からその話を聞いた時は、彼奴は犯人達を憎んでた。絶対許さんとも。」

「だが、心の何処かで、純粹ではなかつたことを苦しんでた。」

「誰かが彼奴のそういうところを引き出した。」

「ほんの少しつつかれただけだつたのかもしれんが」

「彼奴はゆっくり変わつていつた。」

「それから少しして、俺からの連絡を拒否するようになつた。」

「そこから彼奴が除隊処分になつたつてのを聞くのは、あんまり期間が無かつたと思

う。」

「南米で再会した時、彼奴はどうしようもねえ奴になつちまつてた。他人種を、発展途上国を何処までも軽んじる、軽蔑するような男だつた。」「レオンじやなく。ゴールデンライアンなんかアホみてえな名前を名乗つて。」

「こんな話しても、お前に嫌な気分させるだけなのは分かつてる。」

「だが、彼奴は、あの時の彼奴は。」

「悪い奴じや、なかつたんだ。」

喋り終わつた千川さんは、結局一口しか吸わなかつた煙草を灰皿に捨て、コーヒーを口に運ぶ。

「俺は、彼奴を殺した事を後悔してません。」

「当たり前だ。ただ謝りたかつた。」

そう言つて千川さんは頭を下げる。

「本当なら俺がケリをつけてやるべきだつた。何度もチャンスはあつた筈だつたが、俺は殺せなかつたんだ。お前の知り合いが巻き込まれたつてのも聞いた。本当にすまんかつた。」

俺はその言葉に応えられなかつた。俺があの男に思うことは特になかつたからだ。

俺が今まで殺して来た人間の中にも、誰かの友人や、家族はいたと思う。

だからと言つて、殺す殺さないの判断はそこではつかない。

ただ、この人が自分の友達だつたあの男を終わらせてやりたかつたのだろう。

あの男は俺と海老名さんに簡単に殺された。

特にドラマもなく、何の言葉も残さなかつた。

ゴールデンライアンの過去は、俺や、そして千川さんも何度も見てきたありふれた悲

劇、よくあるトラウマだつたのだろう。

誰にだつてそういうことは起こりうる。過去を断ち切つたつもりでも、何かの拍子に、誰かの悪意で呼び覚まされる。

「貴方が謝るようなことじゃない。過去にどんな人間だつたとしても、あの時殺されるべきだつたから殺したんです。」

「…ああ、そうだな。」

千川さんは力なくそう言つて。それから俺達は少しだけ今後のこと話を話して別れた。

一人で帰りの電車を待つてゐる間に、千川さんとの会話を思い出していた。
もし俺の周りのやつが、俺の敵として現れたら。

今一番可能性があるのは海老名さんか。

ゴールデンライアンの時は成り行きで庇つたが、彼女は一応敵である。これから殺し合わないとも限らない。

だが、まあ、殺さなければならぬ状況になれば殺す。

いいか八幡、死ぬべき人間なんていねえ。死んだほうがいい人間は山ほどいるけどなー

…なぜ今、師匠の言つたことを思い出したのだろう。

俺には結局、その二つがどう違うのかわからなかつた。

師匠つづけて言つていた。

「死んだほうがいいやつらは、別に生きててもいいんだ。本質的に死ぬべき奴ら、つまり死ななければいけないやつなんかない。殺さなければいけない状況はあつてもな。死んだほうがいい奴らはな、生きてると誰かに迷惑をかけたり、不幸にしたりする。だがもしかしたら、救われる道もあるかもしれない。生まれた瞬間から悪いやつはいない。みんな人生のどつかで悪い奴になる。そして同じくらい、いい奴になつたりもする。八幡、誰かを救うことを諦めんな。違う道も、お前にしかできない救い方もあるかもしれないぜ。」

ゴールデンライアンは、死ぬべき人間では無かつたのだろうか。死んだほうがいい人間で、救われる道もあつたのだろうか。

もしあの男に会つたのが、俺や海老名さんでは無く、千川さんだつたら。
あの人はきつとかつての友を助けたかつたのかもしれない。

俺は何故人を殺すのか。

人は死んだら二度と戻らない。殺す理由には十分である。

手段として殺人を選ぶだけ。

しようがなく殺す。

殺すこと自体にはそこまで意味はないし、殺して快感を感じることもない。

殺することは悪いことだろうか。

罪のない人間を殺すことは勿論悪い。

しかしそれは、罪のない人間の命を奪う、つまり終わらせてしまう事が罪なのであり、殺すこと自体が悪いということにはならないのではないか。

罪のある人間を殺すことは悪いことか。

悪いことをしていれば殺していい事になるのか。

命は平等か？

しかしその問いは、どこまでいつても人間だけのもので、答え合わせをする機会はない。

人を殺すことを正当化はしない。

しかし、殺すしかないことは、必ずあるのだ。

全員が改心するまで付き合うことはできない。

しかも、殺しても意味はないのだ。

何人殺しても何も変わらない。

とりあえず目先にある不幸を止めるために殺しているだけ。

それはあくまで自己満足で。

しかも人を殺して生活している。

つまり俺もあいつらもやつていることは変わらないのだろう。
自分の理由で人を殺す。

なんて卑しくて、救いのない話だろう。

もう俺は電車を降りて、帰路についていた。

少しだけ賑やかな駅前、いつもと何も変わらない。

今日もどこかで誰かが惨殺されていることなんて気にもしていないのだろう。
みんながみんな、自分の人生に夢中なのだろう。

少し遠くに、五人くらいの男に囮まれて路地に入つていく女子を見つけた。

：ありやあうちの制服か？

本当に、本当に度し難い。

どいつもこいつも、なぜいちいち他人から奪おうとする？

命は平等か？

あいつらと、あの囮まれてる女の子が？

軽く走つて路地に向かう。

そこには、先頭の男に肩を組まれた女の子と、その後ろに四人の男。

「あ？ なんだお前。」

一人が俺に気づいて振り返る。

全員多少体は鍛えてるらしいが、武道はなし、喧嘩の経験はあるようだ。

脱力から踏み込んで間を詰める。手前にいた男に足刀蹴りを突き込んで蹴り飛ばす。後ろにいた男に当たると勢いを殺せずすつ転んだ。

「なつ、手前！」

左にいた男が焦つて右のストレートを放つ、それを左手で受け、カウンターで右肘を顎に叩き込み、ふつとグラついたところで左のフックでもう一度顎。すとんと膝から落ちていく。

男の下敷きからなんとか復帰してきた男が走つてくる。

手には、ナイフか？ キレすぎだろ。

腹を狙つて右手で突き出されたナイフを右手で掴む。ぎりぎりと、力を込める。

「いつ！？ だああああああああああ！」

ぐんつと右にふり、上に上げて相手の体が返る。

そのまま手前に引き倒す。四方投げとか呼ばれてる奴である。もしくは片手投げ。仰向けに倒れたところで顔を踏み蹴り、意識を刈り取る。

「な、いきなり何しやがんだ手前！」

残った男の片方が声をあげる。

何しやがんだ？

心当たりはないのだろうか。

「わからんねえか？本当にわからんねえのかお前は。」

俺は静かに言う。

男達は、気圧された様に引く、
さて、女子は未だに肩を組まれたまま、人質のつもりか？
そんな事に意味は無い。

秒で終わらせる。

と、俺が足を踏み込もうとした時。

「ごおつ!?」

女子に肩を組んでいた男が唐突に前屈みになる。
腹を見ると、肘が刺さっていた。

…？え？誰の？いや俺のはここにあるし。
その肘の付け根を見ると。

「なつ？はつ？」

となりにいた男が動搖する。

肩を組まれていた女子は、突き刺していた右肘を引きながら、体を男の正面に回しながら左手で男の後襟を掴み、胸方向に引き込んで左ひざを腹に叩き込む。

「ごほつと息を吐き出して男が倒れこむ。

「ちよつ、何やつて…。」

と言つたもう一人の男が女子に手を伸ばす。

肩に伸ばされた右手を女子は左に軽く避け、またも右肘をその男の鼻つ柱を叩き込む。

ばきやつと、音がする。多分折れたな。

よろよろと後ろに下がつた男に、女子の美しい背面からの回し蹴りが側頭部をうちすえる。

ぱあああんと言う音とともに、男は横の壁に激突し、ずるずると倒れこむ。さらりと、甘栗色の髪が流れる。

しいんと、一瞬の沈黙。

ばつと女子が頭をあげる。

俺は反射的に構えを取つてしまふ。

「危ないところをありがとうございました！」

え？ 危なかつたの今？ むしろなんかごめん。

「この人たちしつこくて困ったんですよー。」
何に？始末に？

「あ！申し遅れました！総武高校一年の一色いろはです！」「確か同じ学校の方ですよね！」

「よろしくお願ひします！」

それが俺の。未来の相棒との出会いだつた。

靈長類最強の女子高生

「せんぱいってー、どこで武道習われたんですかー？」

「なんか最近のスポーツ武道って言うより、軍用格闘みたいでしたよねー。」

「親が自衛官とかですか？」

「最初の踏み込みとかめちゃくちや速かつたですし、しかもそこから足刀蹴りとか結構むずくないですかー？」

「なんか返事して下さいよー。」

なんなのこいつ、めっちゃついてくるしめっちゃ喋つてる。

いやほんと勘弁してくれませんかね、年下の女子とすらすら会話できるほどコミュ力ないんですけど。

「…お前何者なんだよ。」

とりあえずこいつの立場が分からん。こいつもラバーズだつたりしたらマジでうちの学校やばいとこなんだけど。

「いや、わたしは普通の女子高生ですよ？・ちょっとだけ小さい頃から格闘技やってたんですよ！」

いやいや、あれはかじつてたくらいの動きじゃなかつただろ。なんか、生まれた時から戦い方を知つてたみたいな動きだつたぞ。

なんなのまじ、そろそろどつかいつてくれませんかねえ。

「いやー、さつきは助かりましたー。あの人達の一人がこの前声掛けてきてー。適当にあしらつたらなんか増えて戻ってきてたんですよねー。あんまり噂とかされたくなんでしばいたりとかしたくなかったんですけどー、強い先輩に守られてるつてなつたらさすがに諦めますよねー？」

「いや、知らんし。つーかお前一人でなんとかするつもりだつたんだろ。最後の二人も自分でやつてたし。」

「まあ、そうですね。でも助かつたのはほんとですよ？さすがに不意打ちでも五人相手はめんどいですもん。」

「あ、と俺はため息をつく。

うちの学校にまだこんなのがいたとは。

まだこいつが敵なのかわからん。今はとりあえず別れて砂上さんにでも聞いてみるか。

「あ、私こつちなんで。それじゃあまた学校で！明日はちゃんとどこで学んだとか教えて下さいよー？」

そう言つて一色は帰つて行つた。

あぶねー、背中に変な汗かきまくつてた。あいつ俺が苦手なりア充系の奴だわ。男食い物にするタイプだわ。

ラバーズじやなかつたら以後関わらないようにしどこ。

そしてすぐさま俺はスマホを出す。

「あ、えへ。ハチくん。どうしたの？私の、声、聞きたかつたの？……え？……ふうん。また別の女の子の話なんだ。友達が多いね。……うん？別に、何かしたりしないよ？えへ。ほんとに？今度来てくれる？……うん、わかつた。えと、一色いろはちやんだね？」

「て言つても、ネットで調べても割と出てくると思うよ？一色いろはは元総合格闘技世界王者の一色健治と、生きた宝刀つて言われてた坂上香織の娘で、靈長類最強の少女つて呼ばれてた。」

「小学生の頃から色んな格闘技の色んな大会で優勝して、将来はオリンピックに出るつて誰もが思つてた。」

「でも中学生の時、空手の世界大会で優勝してから格闘技界から姿を消したの。」

「理由は知られてないけど。ただ単に、彼女が思春期に入つて、格闘技に人生をかけたくないつて言つたから。」

「ピアスを開けて父親の前に立つた時、父親は激怒して、やめさせようとした。」

「そして二人は決闘したの。一色ちゃんは中学三年生だった。闘いは数時間に及んで、最後は一色ちゃんが勝った。」

「それから彼女はファッショニに気を使つて、流行りの財布を買つて、高校は中学から遠かつた総武高校に、つて感じかな。」

「…毎度のことながら、ほんと見て来たようですね。」

「調べ屋だからね。」

「じゃあ、約束忘れないでね。と、砂上さんは電話を切つた。そそこそ忙しかつたらしい。」

一色いろははラバーズでは無いらしいが、ある意味ラバーズより癖が強い。
波乱万丈すぎんだろ。グラップラーか。

携帯で一色いろはを検索する。

すると、道着を着て、トロフィーをかかる髪の短い一色の画像が出てきた。
目が笑つてねえ。めっちゃ怖い。

ここから頑張つてあんな今時女子高生になつたのかと思うとなんとなくあつたかい
気持ちになつたが、取り敢えず関わらないことにする。

女子高生も大変なんだな。

「あ！こんなところにいた！」

「げ。」

「げってなんですかー、可愛い後輩が来たんだから喜ぶべきだと思うんですけどー？」
ベストプレイスで遭遇してしまった。

くそ、よりによつてここで見つかるとは。場所を変えなければならぬいか？
「いつつもここで食べてるんですか？一人で？」

「…悪いかよ」

「いや、別にいいんですけどー。寂しくありません？」

「別に。お前こそ一人みてえだけど。」

「もう食べ終わりましたー。放課後は部活あるんで昼しか探せませんし。」

「部活？」

「サツカー部のマネージャーです！」

ふふん、となぜか一色は胸を張る。

マネージャーとか。自分でやつた方が強えんじやねえの？

「それで。どこの格闘技なんですか？先輩の？」

「…お前格闘技嫌いなんじやねえのか。」

「…もしかして、調べました？はあー、女の子の過去調べるとかダメですよー？ネット

からは消えないよなー。」

と、一色は、ぐでつとうなだれる。

「まあ、格闘技自体は嫌いじやないですよ。強制されてたのが嫌だつただけで。」

「…あ、そ。」

格闘技は嫌いじやない、か。だが、正直に殺し屋が人を殺すために作つた戦闘術とは
言えない。

「別に、ちょっと近所のおっさんに習つただけだ。」

嘘ではない。おっさんだし。住所不定だからある意味そこらへんに住んでるとも言
えるし。

「えー、元傭兵とかですかね？すごいなー。」

なんなのこいつ。なんで聞いたんだそういえば。

「私もやりたいです！それ！」

あ？

放課後、奉仕部。

「ヒツキーなんか疲れてるね。」

「海老名さんは今日も休みなのね。」

「私のせいかな…。」

あいついくら断つてもそこをなんとかの繰り返しだつた。可愛い後輩と合法的に触れ合えますよとか言つてたけど一切靡いてなどいない。ないつたらない。

海老名さんは腫れはひいても癌が落ち着くまではもう少しかかるだろう。まあ、敵なのでどつちでもいいが。

「あ、ねえ聞いた？ 東京で起きたテロ。」

と、由比ヶ浜が勉強していた手を止めてぱつと顔をあげる。

「確かに自爆テロだつたかしら。馬鹿なことをする人もいるわね。」

「こつちでおきなきやいいんだけど…。」

…テロ、ねえ。

ちょうどその時、右胸に入れていた携帯がほんの少し震える

「…悪い、今日もちよつと用事あるから先帰るわ。」

「比企ヶ谷君、またなの？ 勉強会を言い出したのは貴方なんだから、しつかり参加して欲しいわね。」

「ちよつと私も用事が…。」

「由比ヶ浜さんは一番焦るべきよ。」

「雪ノ下さん思つたよりスバルタなんだけど…。」

「川崎さんは出来るだけ早くスカラシップを取らなくてはならないわ。これ、貴女の苦手な分野の問題集よ。それが終わったらこれに取り組みましょう。」「…みんな、お姉ちゃん頑張るから…。」

そんな会話を背に、軽く挨拶をして教室を出る。

右胸の内ポケットから携帯を出し、アプリを開く。

恵理さんからのメッセージを確認する。

「ラバーズ傘下のテロ集団、”爆弾魔”から犯行声明が政府に送られました。政府は”我が社”に調査と対処を依頼。上部はA—88、”影喰らい”に第三十四種指令下达。目標、及び爆弾を捜索及び確保して下さい。犯行声明の内容は”新しい時代を我々の火で祝福する。”です。装備、及び協力部隊の情報は音声通信で別示します。」かくして、日常は回る。

爆ぜる。

「詩織ちゃん、爆弾魔について説明お願ひします。」

「私、ステアの社員じゃないんだけど……」

「報酬はでますから。」

「はあ、わかつた。」

学校から出た俺は砂上さんの部屋に来ていた。恵理さんは例の「ごとくスピーカー」である。

最初は喜んでくれた砂上さんも、仕事とわかると目に見えて不機嫌になつていたが、「ご飯を作ると言つたら少し機嫌を直してくれた。」

と言うわけで今俺は長らく使われていなかつたキッチンを掃除している。料理以前の問題である。

「爆弾魔は、名前は単独に聴こえるけど、実際は不特定多数の集団だよ、ラバーズの中ではかなり活動が活発な部類だね。その信条はラバーズ共通の”面白いことをしたい”でもあるし、もう一つ、”幸せに死にたい”って言うのがある。ラバーズはどちらかと言うと宗教団体に体型が似てる。彼らは特にラバーズの”教え”に忠実なんだよ。」

あ、ねえ、何を作つてくれるの?」

「ちよつ! 尻触んないで下さい。」

「は!? どさくさに紛れて何やつてんですかこの色ボケ! そんなうらやま:じやなくて
けしからんこと許しませんよ! 私にも触らせろ下さい!」

「本音出てる恵理ちゃん。悔しかつたら出てくれば?」

「私はこぞと言う時に出ることにしてるんですよー!」

爆破テロがあつたのに緊張感なさすぎなプロ達。まあもちろん危機感はあるが、こう
言うときこそいつもどうりでいた方がいいというのもある。

この二人の場合割と本気で他人事にしているのもあるが。

赤の他人のことなどどうでも良いが、仕事なのでやるというレベルだ。

「いいですか? 先日起きたテロは、最近改装が終わり、ようやく再オープンした横浜駅
の改札前で起きました。身体中に10キロのプラスチック爆弾と、パチンコ玉を大量に
くつつけて吹つ飛んだのは昨年2月にリストラされたらしい普通のサラリーマンです。
報道では鬱になつた男の単独犯だとしていますが、リストラの理由も有耶無耶にされて
います。そしてもちろん”爆弾魔”からの犯行声明も公表されていません。」

「使われた爆弾は完全に手作り、作つたのは恐らく本人だね。でもそれを作る方法を
教えた人がいる。」

「今回の依頼は爆弾魔の捕獲が含まれていますが…。」

「それはとつてもむずかしいよ。彼らに明確な指導者はいないから。
けれど、少なくとも今回犯行声明が出されたと言う事は、爆弾魔全体で何かしようと
いう意思があると言うこと。」

「それは”禁断の愛”からの指示によるものだとしても、何を目標とするか、どんな方
法を取るかっていうのを決める個人ないし上位のメンバーがいるはず。」
「もちろん爆弾魔それぞれが好き勝手に至る所で爆ぜまくるんでしたらお手上げです
けど。」

「でも恐らくは今回はそうではない。」

「ええ、大きめの目標を狙うためにある程度団結して来るはず。」

「爆弾がどれだけの規模になるか分からぬけど、とにかく何かしら大きな動きがあ
るはずだよ。」

「となると、何が狙われるかが問題っすね。」

「ここで、キッチンを片付け終わつた俺が会話に入る。」

「はい、犯行声明にある新しい時代、と言う部分。」

「とってもアバウトだけど、その元サラリーマンがテロを起こした場所からすると。」

「新しくオープンしたり、改装が終わつた所…。」

「……丁度今週末、オリンピックに向けて改修してた品川駅の改修された部分が開く事になつてゐるね。」

「成る程、東京自体大開発中ですからね。しかも品川駅は羽田からの電車も通ります。」

「玄関口を吹き飛ばすつてことかな。」

「しかし爆弾魔は人数が多いので他にも目標はあるかも知れませんが、」

「……まじですか。」

「そもそも何回かに分けてと言つこともありますし……。」

「どうかな。他にも調べてみるね。」

「お願ひします。」

「影喰らいさん、今回は爆弾があるということで、ステアの爆弾処理部隊、”緑の心臓”が派遣されます。まあふつうに警察からも派遣されるでしようし、品川駅も今週末は封鎖されるでしよう。ですので影喰らいさんの任務は実行犯ではなく、その上位者を探すことですね。少なくとも品川駅近辺にいるはずです。」

「普通なら違うところにいるはずだけど、彼らは爆破を見たがるからね。」

「影喰らいさんは週末に向けて準備を進めて下さい。」

「了解。」

「それで、ごはんまだー?」

「いまからつす。」

そして、翌日である。

昨日はあの後普通にご飯作つて二人で食つた。終始スピーカーから恨めしげな声が聞こえていたが、出てこない方が悪い。他には砂上さんが俺の分の飯に睡眠薬を入れようとしたところをガチギレしたぐらいである。食べ物は粗末にしてはいけない。

「せんぱい!さあ!私を弟子にして下さい!」

「…また来たのかお前…。」

「はいです!私は諦めませんよ!なんだか先輩が使つていた格闘術が目に焼き付いて離れないんです。責任とつて下さい!」

「やだよ…、帰れよ…。」

「なんですかー。ほら、このとうりですかー。」

と、俺がベストプレイスで飯を食おうとしたらこいつがいた。
すっかり忘れてた。そしてこのとうりと言つた一色は首を軽く傾げ、手を口元に添えてうるうるとした目で俺を見ている。なんかキラキラしたビームとか出て来そうだ
どのへんがどのとうりなの?わざとらしいつつーかあざとい。

はつ、俺がそんな色仕掛けにかかるとでもおもつてんのか？甘えよ、マツカンより甘々だ。

そういう手に、俺が何度遭遇して来たと思う？それも全員プロだぜ？服パツツンパツツンの金髪美女達だぜ？

「…………ダメに決まつてんだろいい加減にしろ」

「かなり迷つてませんでした？今。」

くつ、そういえばこんな小動物みたいなのはいなかつたな。でもこれで耐性出来たし、もう大丈夫だし。まじで。

「……ぐぬぬ、仕方ありません。ちまちま好感度稼いでこいつになら教えてもいいかなと思わせる作戦に切り替えます。」

「それ口に出していいやつなの？」

なんというか、図太い奴だ。

だが、戦闘術は人を殺す、もしくは“生かす殺すを自分で選べるようにするための技術”だ。それに師匠曰く済崎以外には教えてはいけないものらしい。

「あ、そういえば先輩つて部活とか何やってるんですか？」

む、これは答えていいのだろうか。これで正直に答えてあ！じゃあ格闘教えて下さって依頼しますとか言われたらめんどくさい事になる。

「帰宅部だ。」

「あ、そうなんですかー。じゃあ放課後は暇なんですね？」
「なんだ？何を狙つて聞いてるんだ？」

「今日の放課後私と一緒にー」「あれ？ヒツキーじゃん。まだここでご飯食べてたの
？」

と、一色が何か言おうとした時。どこから現れたのか由比ヶ浜の声が被つた。

「つてあれ？結衣先輩？」

「あれ？ いろはちゃん？どしたの？つて、ヒツキーと知り合い？」

「え、ええまあ。ちなみに結衣先輩は比企ヶ谷先輩とどういうつながりで…？」

「え？ああ、奉仕部つて言う部活で一緒なんだよね。」

と言う言葉を聞いたとき、は？と言ふ顔で一色が俺を見る。

バレたあー！一瞬でバレた！

ふつと俺は目をそらす。

「へ、へー。奉仕部ですかー。聞いたことなかつたですけどどんな部活なんですかー？」

「んーとね。困つている人を助ける部活かな？」

「なんですかそれ。」

「私もよくわかんないけどね！」

うぐぐ、しまつた。奉仕部を通されて頼まれるととてもめんどくさい。
と言うか今の俺にそんな時間ねえ。

「そうなんですかー。あ！そろそろ時間なのでこれで失礼します！」

「へ？ああうん。じゃあねー。」

そのまま一色はぱたたたたと走つていった。

あれ？頼まないのん？

いや、そうか。本人からしてもあまり武道やつてると言うことを知られたくないんだつたか。あくまで内々にと言うことか。

「ヒツキー？ いろはちゃんはどう言う関係なの？」

「別に、たまたま前に繋がりができただけだ。」

「…ふーん。」

その後由比ヶ浜とは適当な雑談をして、飯を食つて教室に戻つた。

（

「んんんはちまああああああああん！！原稿を持ってきたぞう！」

「うるせえ、ぶつ殺すぞ。」

「材木座君うるさいわ。」

「誰こいつ？」

「中二」

「おー、材木君久しぶりー。」

けっふるしやあああああとダメージを受けながら材木座が吹っ飛ぶ。
はい、と言うわけで奉仕部である。

着いた途端時間差で入ってきた材木座と、何時もの勉強会メンバー。
今日から復帰した海老名さんの痣は、驚く程目立たず振る舞いもいつも通りである。
「ふ、ふむん。これが、新しい原稿である。いつも通り感想を頼むぞ八幡。」
「ちつ、わかつたよ。」

俺は渋々受け取る。面倒だが依頼だ、時間があれば読んでおこう。

「はあ、貴方も懲りないわね。」

「ふふん、私は諦めが悪い男なのでな。」

「そう…。それより、貴方右肩だけで荷物を持っているでしょう。右肩が落ちている
わ。毎日そんな重いものを持つてているからよ。次からはデータで持つてきたらどうか
しら。ここにパソコンもあることだし。」

「な、なるほど。では次回からはそうしよう。」

：雪ノ下も雪ノ下でそれなりに援助しようと思つてているのだろうか。まさか材木座
を労わるようなアドバイスをするとは。

しかし、一つ引っかかるものがあつた。

：右肩が下がっている？

いや、まさか。でもあるいは。

「それでは！ 我はこれで失礼する！ この後用事があるのでな！」

「ええ、さようなら。」

俺が何かを聞く前に彼奴は帰つて行つた。

いや、流石に考えすぎだろう。そんなことあつてたまるか。

「さて、比企ヶ谷君。貴方も教科書を出しなさい。確か数学が苦手だつたわね。46ページと82ページの章末問題を解いて解答を見せなさい。」

「…うす。」

まずは小手調べと言う訳か。いいだろう！ 俺の解答を見て存分に頭を抱えるがいい

！
と、俺が教科書を出そうとした時。またもやがらつと教室の扉が開く。

「邪魔するぞ、雪ノ下。お前に来客だ。」

「先生、ノックをして下さいとあれほど…」

と、入つてきたのは二人。平塚先生と、もう一人は誰だ？ なんか、どつかで見たことあるような顔だけど。

「どうもー。あ！雪乃ちゃん久しぶり！」

「…なぜここにいるのかしら。姉さん。」

!!?と先生と来客と雪ノ下を除く部屋の全員が、雪ノ下の方をばつと見て、次に来客を見る。

⋮たしかに、ている。

「いやー、うちの大学のパンフレット持つてきたついでにね？元気にしてるかなーと。」

「そう。私は元気よ。要件は終わつたわねさようなら。」

「あーん。もうちよつといさせてよー。」

「私には話すことはないわ。こちらも忙しいからさつさと帰つて貰えるかしら。」

なんだか。雪ノ下の方は完全に壁を作つてる感じだ。

「いやー。それしても雪乃ちゃん友達増えたね！しかもみんな可愛いし、男の子もいるー！」

と来客は俺の方に近寄つてくる。

「どもどもー。妹が世話になつてますー。姉の陽乃です。」

言いながら、陽乃と名乗つた女性は俺の前に立つた。

「いやー、男の子の友達なんて隼人以来だねー。」

「姉さん、その男は私の友達などでは無いし、彼も友達ではないわ。」

「えー。じゃあそつちの女の子達は?」

「彼女達は、その…。」

「ゆ、ゆきのん…?」

「そんな、雪ノ下さん?」

「いや、私はどつちでもいいんだけど。」

「…友達と、呼ばなくは無いわね。」

「ゆきのーん!」

「いえーい。」

「いや、だから私はどつちでもいいんだけど、勉強会は?」

なんかゆりゆりしている。川崎はいつも通りである。

その人は、やんわりとした笑みを崩さない。

「そつかー。まあ、お姉ちゃんは安心したよ! ま、それじやかえろかつなー。あ、雪乃

ちゃんあれ忘れないでよ?」

「わかっているわ。さようなら。」

「あ、えと。お疲れ様でした?」

「目上の人にはそれでいいんじゃない?」

ふふふ、とそれをにこやかに見ていたその人は、ふと俺の方を見た。

「雪乃ちゃんのこと、おねがいね？」

そう言つて雪ノ下さんは帰つて行つた。

：最後のあれは一体。

「なんか、すごうな人だつたね。」

ぱつりと、由比ヶ浜が言葉を漏らす。

「…ええ。姉は、そうね。誰からも期待されて、その期待に応える力のある人よ。おおよそ、なんでもできる完璧な人。」

と、雪ノ下が返す。

「…そりやお前も変わんねーだろ。ありやなんつーか、強化外骨格みてーな笑顔だつたけどな。」

「…はい？」

「うん、なんか怖かつた。」

「世渡り上手っぽいよねー。」

俺達が、雪ノ下さんへの所感を述べる。

「…そう、貴方達にはそう見えるのね。」

そう言つた彼女の横顔は、何を思つていただろうか。

少しだけ雪ノ下は目を閉じて、またふと開けた。

「さあ、続きをしましよう。比企ヶ谷君、答えをみては駄目よ。」「…わかつてるつつの。」

それから、俺達は勉強して、その日はもう誰も来なかつた。

はい、わたしです。

あら、これはこれは。貴女様から直に電話があるとは。
ご安心くださいな。必ず成功させてみせますとも。

いよいよ今週末です。

ああ、ああ！今から想像だけでイッてしまいそうです！

彼は一体どんな顔をするでしようか。楽しみで仕方がありません！
こんな最期をくださった貴女様に感謝を。

幸福に爆ぜてみせますわ。禁断の愛様。

ああ、私の、私達の救世主様。

恋の爆弾魔

平日の残りの2日を、俺は部活を休みたいと進言した。

「またなの？そんな気楽に休めるものと思われては困るのだけれど。
「すまん、だがこのバイトを続けねえと困つたことになる。」

「…貴方バイトしてたの？」

「…言つてなかつたつけ？」

「言われてないわ。…はあ、まあ貴方の家は事情もあるし、特別に許可します。でも家
で昨日渡した問題集を完璧に解けるまで反復してきなさい。…まさかあんなに酷いと
は思わなかつたわ。」

「…俺は文系狙いですんで…。」

「それ以前の問題よ。まあ、無理はしないように。」

「…おう。」

そう言つて俺が荷物を持つて帰ろうとした時、雪ノ下が俺を呼び止めた。

「ねえ、貴方週末は空いてるかしら？」

「？いや、すまん。週末もバイトだ。」

「そう…。」

「なんかあるのか？」

「いえ、ただの家族の行事よ。姉から知り合いを呼んでもいいと言われたから。」

「…東京とかでやんのか？」

「え？ いえ、千葉よ。」

「そうか、すまん。」

「いえ、いいのよ。由比ヶ浜さん達は来てくれるそうだから。」

「そうか、まあ、楽しんで来てくれ。」

「ええ、そうするわ。」

と、彼女は少しだけ微笑んだ。

土曜 朝 セーフハウス

「影喰らいさん、必要なものはありますか？」

「いや、いつも持つてるやつで行きます。」

今回の俺の装備は、ミリタリ系の黒のズボン、アンダーシャツの上に防弾ベスト、その上に更に厚めのシャツを着て、左の脇にワルサーPPK、ワイヤーにアサシンブレード、パークーを羽織りチャックを閉める。そしていつものナイフである。

爆弾魔に会うには紙装甲だが、街中で目標を探すとなれば偽装のために薄くなるのは
しようがない。

「あと十分でヘリが到着します。品川駅は閉鎖できませんでした。警察犬を大量に配
置し、爆弾処理班が待機。事前の搜索では爆弾は発見されなかつた為。前回と同じ手口
を使うと思われます。」

「なぜ閉鎖できなかつたんですか。」

「起こるかどうかも分からず、今日かどうかも分からぬのに閉鎖は出来ないという
ことだそうです。」

「…くそつ」

「品川駅は一日でも機能しないと大変な経済的損失に繋がりますから…。」

「…わかってます。」

「…今日仕掛けてくると思いますか？」

「わかりません。しかし対処しないわけにはいかない。」

「…それも、そうですね。」

そう、俺も、多分恵理さんも、何かが引っかかっている。

本当に合つてゐるのか？このままでいいのか？

「影喰らい！待たせたな！リムジンの到着だ！」

ばららららららと言う凄まじい音と共に、TV局に偽装されたヘリが到着する。

「見てくればだせえのは悪りいが。乗り心地は保証するぞ！」

「どーも。」

ヘリを乗つて着たのはいつかの”従業員”。大体の乗り物は何でも操縦できるらしい。

「緑の心臓は現在待機中です。警察では対処不可能となれば即座に出動します。まあ、サブ要員なので数は少ないですが腕は確かですよ。」

：待機、か。

大元の爆弾魔に警察を当てるのはきついだろう。今までわけわからん強さのラバーズもいた。もしそいつが海老名さんレベルの人殺しだったら、死体の山ができる。

かといって自衛隊のS部隊を派遣できる規模でもない。

そこで、今までも何人かとやつてた俺が選ばれたんだろう。
いや、ステアから来た、”国内でのラバーズの案件は影喰らいを当たらせろ” ってやつか。

ぐんつという下向きのGを感じ、ヘリが離陸するのを感じる。

ここからは、あまり時間はかかるんだろう。

ヴヴヴヴと、携帯が震えているのに気付く。

こちらは、プライベート用か。
画面に表示されていたのは。

「……はい。」

「あ、はろはろー。比企谷君いまどこ?」

「どこに聞こえる。」

「ヘリの中かな。うるさすぎて耳やばい。」

海老名さんだつた。

なんだ?なんのようなんだこの人。

他の相手だつたら出ないが、この人だつたらまあヘリの中でもいいだろう。

「何の用すかね。」

「いやー、今日空いてるかなって。」

「空いてるよう思うか?」

「あははは。いや、今日さー。雪ノ下さんに誘われてサキサキと結衣と一緒に雪ノ下
さん家が建設に関わつたつて言う建物に来たんだけどー。」

「あ、そう。それで?」

「あー、そう言えばそんな話あつたな。雪ノ下姉が言つてた雪ノ下への週末どうこうは
これか?」

「空いてたら比企谷君もどうかなつて。」

「だから空いてないつて。」

「そう？ 残念。あ、因みに、その建物がさー。ホテルとオフィスビル、それからショッピングモールの複合なんだけど。なんと名前がねー。」

「人の話聞いてた？ だから行けないつて……」

ほんとマイペースに喋るなこの人。何が言いたいのだろうか。

「ニユーエラって言うらしいよ？」

「……は？」

「日本語だと”新時代”、だつけ？」

「なつ！ それって……！」

「あと一時間半くらいでテープが切られるんだけど、結構人も集まつてるね。テレビも来てる。」

「海老名さん！ そこを——」

「来るなら早めにね？」

「ぶつぶつと電話が切れる。」

「今のは、まさか。」

「従業員！ 行き先変更だ！」

「あん？ どちらまで？」

「今日オープンの千葉の高層ビル、 ニューエラまで！」

「あいよー。」

「まずい、 まさかそんな。

「ちよつ、 影喰らいさん!? 何をー」

「あいつらの狙う場所がわかつた！ 今日オープンするのは品川駅だけじやない！」

「すると、 無線に砂上さんの声が入る。

「千葉市に出来たビルだね。 雪ノ下建設と他三社が建設して、 アメリカのロス・イーストが投資、 オフィス部は完売の期待の星だよ。」

「彼奴らの狙いはそこだ！」

「一つ!! 緑の心臓を派遣します。 影喰らいさんは目標を捜索して下さい。」

「いや、 ビンゴだね。 誰も入れない筈のビルの屋上に誰かいる。」

「はい!? 誰ですか!?

「いや、 上からじや顔わかんないね。 ヘリポートの方に座つてる。 これは…、 妊婦、 かな?」

「意味わからんこと尽くしじやないですか！」

「爆弾はどこに?」

「ビルは55階建、上30階はホテルだけど、これでオフィス完売って相当だよ。」「そんなもん倒壊せんのどんくらいいるんですか。」

「うーん。いや、玄関側だけ吹き飛ばせば瓦礫で下の人達は大体死ぬね。」

「んじゃあ、それが狙いか…。」

「ではその仮定で捜索させます。とりあえず下の人の避難を…。」

「いや、間に合うかな。仕込みは終わってるだろうし、下が動き始めた時点で爆破させ

るかも。」

「くそつ、じやあ知らせやるしかねえのか。」

「私が話を通しておきます、影喰らいさんは屋上の人間の方に行つてください。」「了解。」

「ばらららららと、ヘリが進む。」

「くそが、なんでもつと早く気付かなかつた！」

（

「姫名一、どうしたの？」

通話終了の画面が表示される携帯を見ていた私は結衣に呼ばれて振り向いた。

「…いや、なんでも？それよりここ人いっぱいで見えにくいからさ、ちよつと後ろのあの高くなってるところ行こうよ。」

「えー、ゆきのん遠くならない？」

「ちゃんと双眼鏡も持つて来たからさー。」

「…あなたなんでそんなもん持つてんの…。」

そんなことを言いながら、私たちは後ろに下がっていく。

雪ノ下さんは関係者席、かなり前の方にいる。

少し前の彼女なら、家族の行事に友達を連れて来たりはしなかつたろうけど…。

私が爆弾魔の犯行予告を知ったのは今日の朝。このビルのオープンには、結構な数の人がいた。ビルの売名の意味もあるのだろう。

…さて、流石に雪ノ下さんは連れ出せない。よろしく頼むよ？・ヒーロー君。

（

「はあっはあっ…、くそつ！」

俺は走っていた。流石にこのビル自体にヘリをつけるわけにはいかず、近くのヘリポートから車を使い、ビルに入った。

ビルの屋上に直通するエレベーターは無い。いくつかのエレベーターをあみだくじのように経由する。

フロアを走り回るせいで無駄に疲れる。だがもう時間はない。

カンカンと屋上につながる階段を登る。お偉いさんも使うだろうに、味気のない階段

だ。

屋上に出る扉のパスコードを砂上さんが解き、扉を開く。

目を覆いたくなるような、日の光。その奥に、椅子に座った女性を見つけた。
「お待ちしてました。影喰らいさん。」

その人は俺の姿を見て、すっと立ち上がる。

一番目を引くのは、ポツコリとした腹部。胸ぐらいまである髪と、大きめな胸。母性
と言うものを体現したような、柔軟な笑みを浮かべた女性だった。

俺は銃を抜き、女に向ける。

『“爆弾魔”だな。お前を捕獲する。』

それに対し、やはり女は微笑んだまま。

「あらあら、捕獲だなんて。珍獣みたいな扱いですね。』

「似たようなもんだろう。無駄に抵抗すんな。』

女は、微笑んだまま、すっと目を細める。

「私は貴方が来るのを待つてたんですよ？少しぐらいお話をさせてくれてもいいじゃな
いですか。』

「だまれ、俺がお前に聞きたいことなんて——。』
と、俺が言いかけた時。無線に恵理さんの声が入る。

「…やられました、影喰らいさん。品川駅でテロが発生しました。」

「…なつ」

俺は女に顔を向ける。

「品川駅に電車が入るタイミングで、二階を走る線路の柱が爆破され、脱線した電車が駅に突っ込んだそうです。」

「そんな、どうやって…。」

「間違いなくそれまでは爆弾はありませんでした。しかし爆破の直前、大量のドローンが飛んでいるのを見たと。おそらく爆弾を括り付けたドローンを柱に…、被害は甚大、だそうです。」

俺は女に銃を向けなおす。

「てめえ！」

ぎちり、と、女の笑みが色を変える。

「ああ、向こうも上手くやつてくれたのですね…。それは、それはとてもいいことです。自分達が死ねなかつたのは悔しいでしようが…。」

「ふざけんじやねえ！自殺ならてめえらだけでやれ！」

女はそつと、お腹を撫でる。

「ああ、そういえば自己紹介がまだでした。私は、暫定的に”爆弾魔”の指導者をやら

せていただいております。」

女は少し顎を引き、艶めかしく上目遣いに俺を見る。

「新堂加恋と申します。これから少しの間ではありますが、どうかご記憶なさいませ

？」

生の意味、死の価値

新堂加恋と名乗った女は、真っ直ぐに立っていた。頭のおかしい爆弾魔とは思えないような確かさで。

「爆弾はどこだ。」

「さあ？ でもすぐに見つかるでしょう。肝心なのは閃きですよ？」

俺は爆弾の在り処を問うが、はぐらかされる。

苛立ちがつのる。ここで、ここだけでは爆弾を起爆させるわけにはいかない。

「なら、喋りたくするまでだ。」

「あら。可愛がつてくれるんですか？ さて、私はあまりの幸福に不確かなことを喋つてしまふかもしません。」

「クソマゾ野郎が、どつちみちお前はここで捕らえる。」

「ああ、それは遠慮したいですね。私も最後は見たいので。あ！ 爆弾の在り処は言えませんが、起爆の方法だけは教えて差し上げましょ。」

すつと、女はマタニティドレスのポケットから小さいリモコンを出す。

「このスイッチが押されるか、私が死亡すると起爆する仕組みです。もちろん自殺用

のカプセルも歯に仕込んであります。なんだか、私が小さい頃の映画みたいですね。」

俺は表情にこそ出さないが、内心舌打ちする。

手が、出せない。リモコンを撃つ？いや、どつちみち自殺されれば終わりだ。どうする。いや、緑の心臓が爆弾を発見して解体すれば、この女が死のうとどうともなる。

俺のやるべき事は、こいつを引きつける事。無駄に刺激してはいけない。

「お前らの目的はなんだ。禁断の愛つづーのは誰なんだ。」

「あら？いやに話が変わりましたね。もしかして中で爆弾を探して回つてる方々をしてにしてらつしやいますか？だとしたらそれは無駄でしょう。爆弾を見つけられるのは、貴方だけです。」

内心を見透かされた焦りと、意味不明の発言。どういう意味かと俺が言いかけた時、女の言葉を裏付ける様に無線に恵理さんの声が入る。

「影喰らいさん、現在緑の心臓が肝要な箇所を捜索していますが、それらしいものは無いと…。」

な…に？いや、まさかこの建物じや無い？品川みたいに、ここにこいつがいるのはただの陽動？

まさか、違う。こいつは、間違ひなくこの建物にしかけてる。それだけは、根拠はな

いが断言できる。

「兎に角、引き続き捜索させます。」

無線が切れる、俺から返答するわけにはいかない。

そんな俺の顔を、女は何か、見下す様な、慈しむ様な目で見る。

「影喰らいさん、死ぬとは、どういう事だと思いますか？人は死んだら、どうなると思いますか？」

女は唐突に、そんな事を聞いてくる。

「…あ？俺がどう言おうが、てめえらはてめえらの信じる禁断の愛とかの為に死んで、死んだら魂は救われてヴァルハラにでも行くとか言いてえんだろ。」

「いいえ？ラバーズの信仰に、そんな言葉はありません。ただ、好きなように生きるというだけ。」

「影喰らいさん。人の生きる価値とはなんだと思しますか？生きる意味とは。」

「私達は平和な国に生まれ、何不自由なく生きてきました。」

「だからこそでしよう。生きる意味など、愚かな事を考え始めたのは。」

「今下にして、このビルの創業を祝う人達も、幸せそうな笑みを、新たな風に期待を寄せてている彼らも。大なり小なり考えた事だと思います。」

「生きる無意味さに絶望し、死の後にくる不確かさに恐怖した事でしょう。」

「しかしそれも、ほんの一時期だけ。今はもう忘れたか、彼らなりの意味を見つけたのでしょうかね。」

「影喰らいさん。人の命に、いえ、全生命に本質的な意味や価値などないのです。」「そもそも、余裕のある人間以外、考えようともしない。」

「自分の生に意味を問うなど、贅沢な思考は他の生物にはないでしよう。」

「所詮は人間で始まり、人間で終わる非生産的な禅問答です。ならば、生命に価値などないこと、そこの無機物と本質的には同列と分かるでしよう。」

「そしてまた、人間自身、その個人個人にとつても、他の人間の決めた命の価値など、何の意味も持ちません。」

「禁断の愛はおつしやつたのです。自分の決めた命の意味に従つて生きなさいと。」

「そうして生きた先にも結局は何も残らず、骨になり、私が生きた痕跡は、土に還るか、人間社会に情報として還元していくでしよう。」

「それでもいい。生きたことに満足できればいい。死ぬ事に納得出来ればいい。」

「ねえ、影喰らいさん。人間は死んだら、どうなると思いますか？」

「天国や地獄はあるのでしょうか。先に死んでいった方々に出会えるでしようか。」「死んだ先にも、魂の世界が、社会があるのでしようか。」

「死んでそのままの魂達が、善に悪に分けられ、死後の世界でその二つのどちらかに

よつていく先が変わつたりするのでしょうか。」

「それとも、魂は輪廻し、迷いの答えを得るまで、あらゆる生物を経験しなければならないのでしょうか。」

「私は、そうは思いません。」

「だって、ありえないじやないですか。死んだら肉体という他者とを隔てる壁を超えて、死んでいった魂と一つになるなんて。生前に犯したどうこうを、裁く役柄の魂がいるなんて。」

「かと言つて、死後の世界は無でもないと思うのです。」

「こんなに複雑な生命が、こんなにも、恐ろしいほど緻密に作られた頭脳が、壊れたら再也いで、ぐちやぐちやになるぐらいでその機能の全てを失うなんて事あるのでしょうか。」

「私はこう思うのです。死とは、その人以外の人にとっては明確に死んでいても。その人の魂は、死なずに、死んだ瞬間に囚われるんじゃないかつて。」

「死ぬ瞬間まで、機能してなかつた脳の全てを、死ぬ瞬間にやつと知覚できるとしたら？」

「140年分、一分一秒、漏らさず記憶できる脳の機能を、死ぬ瞬間の刹那に見て回ることができるでしょうか。」

「ねえ、そうは思いませんか？脳が、死ぬときになつてやつと全てを見せてくれるんです。」

「死が来たその時、死んだ瞬間を永遠に感じ続けるんです。」

「ああ、そう。ずっと覚めない夢を見るんです。」

「夢とは、起きる寸前の少しの時間で見てているそうです。体感では、とても長い時間を経験したはずなのに。」

「死ぬ瞬間もそれが起きるのです。脳が、夢を見せてくれるんです。死ぬ時、その人が一番強く思っている事を土台に。」

「人生を幸福に生きた人は、何の悔いもなく。美しい夢を。」

「沢山の罪を犯した人は、その罪の意識に苛まれ、責められる夢を。」

「それこそが、天国と地獄の正体だと思うのです。」

「…なら、お前は地獄の夢を見るんだな。」

「さて、どうでしょう。それこそが私の、私達の目的でもあります。」

「…あ？」

「私達は、死のために生きる。生きているかぎり死ななければならず、いつか死ぬために生きなければならない。」

「生と死は隣り合い、決して切れない繋がりを持つ。」

！」

「お前は…、何を…。」

「産まれ方を選べなかつた私達が！生き方を決められなかつた私達が！」

「生まれ落ちた瞬間に！死ぬ運命を押し付けられた私達が！」

女は何かを押しとどめる様に、堪え切れない何かを飲み込み戻そうとする様に胸を抑える。

「死を受け入れ、幸せだつたと笑つて爆ぜる。そして、永遠にその幸福感を繰り返すのです！それつて、ああ、それはそれは素晴らしい事だと思いますんか？」

すうつと、女は表情を戻しながら上体を起こしながら俺を見る。

その目は、何の揺らぎもなく。俺を真っ直ぐに見据えた。

「お前は、お前らは。何でそうやつて生き急ぐ！なんで他人を巻き込もうとする！お前らの信仰など知つたことか！幸せに死にたいなら勝手にすれば良い！俺は！お前の考え方で！結果を他人に押し付けるなど言つている！」

「下に生きる人々に価値などないでしよう？貴方となんの関係も無いはずです。貴方は何故。今までして他人の命に必死になれるのですか？」

「俺は、お前らみてえな独りよがりのクソ野郎どもに、いちいち誰かが苦しめられるの

を見てられねえだけだ！」

「ああ、素晴らしい信念です。あの方が貴方のことを救世主になりうると言つていたのは、こういうことだつたのですね。なら、早く独りよがりのクソ野郎どもの信仰を叩き折つて下さいませ。さあ、爆弾を見つけなければ、下にいる貴方のお友達も死にますよ？」

「…つ！？こいつ…！」

「お前、どこで…！」

「ほら、もう直ぐテープが切られます。時間がありませんよ？早く、見つけなくては。緑の心臓は未だに爆弾を見つけられてない。

まさか会場にあるのか？

いや、待て。こいつは、こいつらは死にたがつてゐる。自分で吹つ飛ぶ事に価値を見出している。

なら、こいつも？

だけど、こいつが着てるのは身体のラインが出るマタニティドレス。

隠せるところがあるとは思えない。

”不自然な膨らみなんて” …。

…え？

いや、まさか。そんなわけない。

だつて、そんなの。人間に出来る事じゃない——！

しかし、俺の心とは裏腹に、俺の表情の変化を捉えた女は、にたりと、笑みを、深め
る。

「ああ。やつとわかつたんですね？」

「そう、そうです。その通りです！ 今私のお腹には、私達の可愛い可愛い傑作が入つて
るんです！」

「そんなわけ……だつて、皮膚だつて、そんな簡単には……。」

「ええ、ですから本当に妊娠して、一昨日墮胎して爆弾を入れてきたんです。」

その言葉に、今度こそ俺は閉口する。

「……お前らは。お前らは狂つてる！」

俺の叫びに女はやはり笑みを崩さず、愛おしげに腹を撫ぜる。

「ええ、私達は狂つているのでしょうかね。私の中に新しい命が芽生え、計画の為だと思
いながらも、愛が育つのを感じました。」

「じゃあ……、なんでお前は……。」

「でもいきなり、どうでもよくなつたんです。今まで、全てにおいてそうでした。価
値を感じなくなつたんです。」

「ふざけんな！そんな、そんなことでお前は！」

「ずっと早くこんな下らない自分を卒業したいと思つていきました。」

「ああ、なんて素晴らしい最期なんでしょうか！たくさんさんの命と、未来の救世主のどちらかを道連れにしていいだなんて！」

「さあ！選んで下さい比企ヶ谷八幡さん！ここで私を撃つて下の人々の身代わりになるか！私を見過ごし下の人々を見殺しにするか！逃げ場はありません。私に背を向けた時点で私は飛び降り、転落死と同時に起爆します！」

「さあ、貴方の生に価値はあるでしようか？」

最後の銃声

命は平等か？

そもそも何を基準に考える？

客観的になんて無理さ。どうしても主觀で見るしかない。

他人と自分、どっちが大事だ？

：ああ、まあ自分だろうな。

なら他人百人と自分一人なら？

命は平等か？

お前にとつてお前自身の命は他人何人分だ？

お前は何になら自分の命をかけられる？

かはは、お前は自分が一番だつて言うけどな、きっとお前は、本当に選ばなきやならなくなつたら自分を捨てるよ。

それが合理的だとか言つてな。

なあ、お前は、自分を大切にする事を覚えな。

安心しろよ、お前が思つてる以上に、いざつて時は誰かが助けに来てくれるもんさ。

命は平等じやあない。

だがな、そりやあ軽んじて良いつて意味じや無い。そう言うのを履き違える奴らが大勢いる。

俺達は人殺しだ。

だからこそ、命の重さつて奴をお前なりに考えろ。

お前自身の命も含めてな。

（

「さあ、どうします？選んで下さい。無辜の市民か、貴方一人か。このビルはここらで一番高く、海も近いので勿論狙撃なんて出来ませんし、へりなんか来ようものなら直ぐに飛び降ります。」

「貴方が、選ぶしか無い。貴方の価値を、命への価値観を教えてください」
女が、俺に選択を迫る。

どう、する。

俺か、数百人か。

いつかの、師匠の質問を思い出す。

死ぬ？俺が？

いや、覚悟はあつた。

後悔もない。

俺は、他人の為に死ねる人間か？
いや、いやだ。死にたくない。

死ぬわけにはいかない。

小町が独りになつてしまふ。

両親が死んで、小町は心が壊れてしまつた。

俺まで居なくなつたら今度こそ戻れないだろう。

残していけない。まだだめだ。だめなんだ。

銃を、下ろす。

女が目を細め、にいと口を割る。

無理だ、他人の為に死ぬなんて。

会つたこともない奴らだぞ？確かに、雪ノ下達もいるが、そんなに仲が良かつた訳で
もないし。

悔いは、残るだらうけど。

ても、無理だ。すまん。俺には、死なない理由が。

そもそも、出来る範囲でやるつもりだつたし。俺は聖人じやない。命を代償になんて、そこまで思つてなんかなかつた。

俺はなんで戦つてたんだつたか。

なんで今まであんなに苦労して走り回つてたんだつたか。
俺は他人を助ける為に生まれてきたのか？

救世主なんて、ふざけるな。

期待するな。出来るわけがない。

俺は、なぜ。

夕暮れの公園を思い出す。

ただ殴られていた彼を、放つておけなかつた。
なぜ？

雨を思い出す。ぼろい小屋を、何かが折れる音を。

助けを求めてた。その人だけじやどうしようもなかつた。

理不尽に誰かが苦しめられるのを。

誰も助けてくれない苦しみを、俺は知つてたんだ。

助ける力があるなら。力になれる場所にいるなら。

少しぐらい何かしてもいいつて思つたんだ。

そして俺にしか出来ないなら。やるのは当たり前だつて思つた。

理想の為に生きる少女を見た。優しくて、騒がしい少女を。兄弟の為に頑張る少女

を。

そして孤独な殺し屋の少女を。

彼女達が、下に居る。

誰かの為に死ぬのは美しいだろう。そうやつて生きれたら素晴らしいだろう。

俺は何の為に生きる。なぜ戦ってきた。

他人の為？ 俺の為か？

下にいる人達と、俺。

重さの違いは歴然だろう。

ああ、すまん小町。俺は駄目な兄だ。

事ここに至つてなお、俺は家族を優先できないのか。

放つておけない。死なせたくない。

こんな奴らの快楽の為に。誰かの都合で人が死ぬのを見てられない。

ここで引けば。俺は二度と立ち直れない。

俺はこいつらとは違う。

ああ、くそ。死んでやるよ。一人も死なせてやるか。

お前らみたいなやつが、いるから、どいつもこいつも不幸になんなきやいけねえんだ。

「残念です、影喰らいさん。でもそれもまたいいでしょう。そう、他人の為に死ぬこと

なんてないんですよ。みんながみんな。無関係に、無責任に生きるのです。生きて、死ぬんです。」

女が、一步、一步と後ずさる。あと数歩で、落ちてしまう。
俺は銃を女の頭に向ける。

「！あら？ 考え直したのですか？」

「…ああ、付き合つてやるよ。クソ野郎。」

女が、今度こそ、声を上げて笑つた。

「あはは、は、あはははははははは！ そう！ そうですか！ ああなんて素晴らしい人生でしようか！ 一緒に死んでくれる人がいるなんて！ それが貴方とは！ 私は！ 私の人生は幸福だつたと心から言える！」

「なつ!? だ、駄目です！ 影喰らいさん！ そんなことする必要ないでしよう！ なんで貴方は自分をそんな簡単に割り切れるんですか！」

簡単なんかじやない。

ああだめだ。手が震える。

死にたくねえなあ。

ごめんな、小町。本当に、ごめん。

「恵理さん。小町を頼みます。」

「ふざけないでください！そんな、そんなの…！」

俺が命を張ることなど誰も知ることはないだろう。ステアが隠滅して、俺は違うところで事故死したことになるだろう。

それでいい。知られたくない。こんな死に方。

俺が今まで貯めた金で小町は大学までいけるし、それからもそこそこ余裕を持てるだろう。

「ああ、素晴らしい。あなたに、感謝します。そして、貴方にも、良い最期を。」

後悔ならある。

だが決めた。

女が手を広げる。

「さあ。どこでもどうぞ？一発で、終わらせてください。」

狙いを定める。

「ああ、あばよ。」

そして、俺は、ゆっくりと、引き金を

「死なせはせんさ。友よ。」

その時。無線に男の声が入った。

ぱああんと、銃声が響く。

血が舞う。くるくると、”リモコンを握っている女の手”が飛んでいる。

「——え？」

呆然とした、女の声がする。

「合わせろ！影喰らい！」

さつきの声とは違う男の声がした。これは、従業員か！
ドンッ、と駆け出す。女がこちらに目を向けて、即座に歯を噛み締めようとする。
かごつと口に手を突つ込む。

そのまま、俺はビルの縁から飛び降りた。

「——!?!?」

女が目を剥く。何の、つもりかと。

がんつと女の背が、”ヘリの床にぶつかる”。

女が状況を理解し、俺を思いつきり睨みつける。

「俺も予想外だつたよ。」

ごつと女の頭を殴りつけ、女は意識を手放した。

（

ぱら、ぱら、ぱらと、はるか上空で飛ぶヘリを見ていた。

ほんの少し前、ビルの縁から、二人の男女が飛び降りていた場所だ。

「無茶するなあ。まあ、ありがとね。」

ふ、と目を前に戻すと。

ぱつ、とテープが切られ、拍手が上がる。

みんなが、新しい物を見て、上を見ている人なんて居なかつた。

結衣とサキサキも、すごいねと言いながら私の渡した双眼鏡を覗き込んでいた。

「君の献身を誰も知ることはないけど。君はそれで良いんだよね。」

誰にも見えないところで戦つた少年と思う。

さて、彼は君の助けになつたかな。

狙われるところが幸いして彼への依頼はすんなり行つた。

まあ、彼一人でも、比企谷君だけでもどうしようもなかつただろう。

関係者席に目を向けると、ある女性が雪ノ下さんを連れて歩いてきた。

「あ！ゆきのんだ！」

「うわ、高価そうなドレス…。」

「川崎さんも似合うと思うよ！」

「い、いや、私は別に…。」

彼女が雪ノ下さんを連れ出してたか。

さあ、比企谷君の守つた場所だ。ありがたく出店でも回ろうかな。

「はつはつはーかなりひやひやしたが。何とかなるもんだな！」

従業員がげらげらと笑っている。

こいつは俺が飛び降りるタイミングに合わせ、ヘリを高速で近づけつつ機体を傾け俺たちをキヤッチした。

死ぬかと思った。いや、死のうとしてたんだけども。

「二度とごめんだくそ。」

「ほんとですよ！もう絶対勝手に死のうとなんかしないで下さい！貴方はもつと自分を大切にすべきなんです！」

「いや、あれはしようがないというか…。」

「何百人死ぬぐらいなんですか！私は貴方の方が大事です！」

「…すんません。」

ふうふうと、無線から恵理さんの息が聞こえる。

ふと手を見ると、震えているのが分かつた。

ああ、本当に、二度とごめんだ。

帰つて小町抱きしめたい。

「…はあ。それにしても。さつきのは一体…」

…くそが、本当にうちの学校魔境すぎんだろ。

「さあ。他にも誰か雇われてたんじやないすかね。」

「ステアではなさそうですが…。取り敢えず調べておきま…」

「ハチ君、大、丈夫…!？」

「あ！詩織ちゃんちよつと…！」

「良かつた…！良かつたよお…！」

「…すんませんでした…。」

「無理しちゃ、だめ、だよ…。」

「…はい。」

「ちよつと！なんで私の時より殊勝な態度なんですか！あとで話があります！」

ちら、と。女を見る。

「それで、こいつはどうなるんですか。」

「…取り敢えず外科手術で爆弾を取り出して、その後は警察に引き渡しですね。向こうもバタついてはいると思いますが、一応、ある程度依頼達成、ですね。」

はあ、と息を吐く。

阻止できなかつた品川駅では。かなりの人数が死んだらしい。

なんとも、嫌な気分の最後だつた。

その後のことについて、少し恵理さんと話をして、俺は帰路についた。ぶるる、と俺の携帯がなる。プライベートの方だ。

出ると、嫌に良い男の声が出て来た。

「比企ヶ谷だ。」

「八幡か。」

「…あん時は、お前だな。材木座。」

俺はその男の名前を呼ぶ、あのメガネをかけた、あの冴えない、あのデブの、材木座義輝だ。

「…そうだ。」

「…知つてたのか。」

「当日になつて会社を通して依頼が來た。上司があの建物の関係者でな、休みだつたところを叩き起こされたのだ。」

軍用銃を長く使う奴は肩が下がる、反動の大きい狙撃銃なんかは特に。

「あのふざけた手袋も豆や癌を隠すためか。」

「ああ、まあな。」

「どこの所属だ。」

「A & Aだ。」

あんな条件で当てられる奴が居たとは。しかも腕を正確に撃ち抜いて、吹き飛ばした。

「…なんで無線に割り込んだ。声でバレかねないとは思わなかつたのか。」

「お前たちの近くに飛ばしていたドローンで状況は把握していた。せっかく女がビルの縁に立つて狙える様になつたのに。八幡が死のうとしていたのでな。口を挟ませてもらつた。」

「…」

「八幡。お前ならそうするだろうとは思つていた。」

「…うるせえ。」

「ふつ。義を見てせざるは勇なきなり、だ。友の危機なら、手ぐらい貸すさ。」

「…ああ。」

くそつたれ、どいつもこいつも、人のこと大事にしやがつて。

「…ありがとよ。」

「ふむん。なりたけ一回で手を打とう。」

「ああ。わかつた。」

だが、助かつた。本当に。

死にたくは、なかつたからな。

「して、八幡よ。お前に会わせたい人が居る。」

「あ？」

「お前も面識はあるだろうよ。」

「…？」

その時、後ろから車のライトが近づいて居るのが分かつた。その車は、俺の横に停車する。

「その車だ。」

「…見てんのかよ。」

「まあな。」

がちゃりと、ドアが開く。

「ひやつはろゝ。今回はありがとね。比企谷八幡君。」

降りて来たのは、とても、とても見覚えのある顔にそつくりな。しかし首から下がか
け離れた女性。

女性的な、美しいスタイルに、高価そうなドレスを着ている。

「雪ノ下、陽乃…？」

「はいはーい。A&A所属のオペレーター兼雪ノ下建設専務の、雪ノ下陽乃だよ。」

にこりと彼女は微笑んだ。

「ちよつとお姉さんとお茶しよ？・影喰らい君。」

”凶弾”

「まずはお礼からだね、私達を守ってくれてありがとう。」

「いや、別に…。というか絶対あんた下にいなかつたでしょ。たぶん雪ノ下も。」

「まあねー。雪乃ちゃんは私が安全が確認されるまで適当なところに連れ出してた。」
あれから車に連れ込まれ、着いたのは洒落たレストランの個室である。まあ、周りの
席には護衛が陣取つていいようだ。

「…」

「ああ、両親はどうしたつて？まあ、どうでもいいかなー。あの二人がいると色々面倒
だし。」

「…へえ。」

家族がいると面倒ね。まあ、そう言う考え方もあるか。
すると、雪ノ下さんは俺の顔をみてにやあと、笑う。

「ああ、ごめんね。影喰らいの前で家族を軽んじるのはご法度か。」

「…いや、別に…。そこはそれぞれの価値観なんで。ていうかなんで俺呼ばれたんで
すか？わざわざお礼言うために連れて来たんですか？じやあ終わつたみたいなんで

帰つていいですか？」

「まあまあまあ、少しごらいなんか食べていきなよ。ここのおいしいよ？」

と言つて、彼女はメニューを開く。

「えーと、これとこれとこれ…んー、君お酒飲める?」

「飲めないんで帰つていいですか?」

「ちよつ、そんな直ぐ帰ろうとしないで!私の乙女ハートにヒビが入るから!」

ねえだろそんなもん、と言おうとした時。個室のドアががらっと引かれた。

「貴様にそんなものはないだろう。」

「おー、お疲れ様、”凶弾”君。」

そうして入つて来たのは、眼鏡を掛けた太めの男。左脇にはオートマチックを入れて
いる。

「材木座、か。」

「材木座…。」

「八幡。色々聞きたい事があるだろうが、また今度話す。」

言いながら材木座は、ドア側の椅子に腰を掛けた。

「凶弾こと材木座義輝君は、我がA&Aの稼ぎ頭。今回は依頼が急だつたから彼しか
来れなかつたけど、影喰らいが來てるつて聞いて少し安心したんだよねー。君には、我

が社は何度も苦渋を舐めさせられてるから、その有用性は良く知ってる。」

雪ノ下さんは両肘をテーブルに置いて、指を組んで顎をのせ、俺の顔を覗き込む様に目を細める。

「なら、見捨ててた方があんたらのためだつたんじやないのか。」

「そんなことしたら上か下かで彼女が爆発してたし、私は上の人達と違つて、君とはい関係を持つた方がいいって思つてる。」

「…はあ？」

何言つてんだこの人。俺とそんなもん持つた所で、大した利益は無いだろうに。

「いやあ、君は確かにうちの邪魔をして來たけど、それはお互い様でしよう？私達はライバルであつても敵じや無い。正直任務先で君とぶつかるのは懲り懲りなんだよねー。でもまあ、前回の港での戦闘で”悪逆”に壊滅させられた時の担当は首切られて、後釜は私になつた。そこは感謝してるけど、私の時もそんな事になつたら最悪だしね。」

「ああ、なるほどね。用はブツキング回避したいと。
俺はふんと鼻を鳴らす。

「貴方のどこはさぞ俺を憎んでるでしようね。」

「それがそうでもないんだよねー。」

と、彼女はこめかみに指を当てる。

雪ノ下と同じ仕草だ。

「確かにだいぶ頭來てる幹部も多いけど、実は影喰らいの隠れファンも多いんだよねー。たまに記録映像とかあるから。」

「は？」

「いやいやまじで、極秘にファンクラブもあるし。」

「いやいや。は？」

と、俺は材木座に目を向ける。

すると材木座はつまらなさそうに鼻を鳴らし、

「そう言うものがあると聞いたことはあるな。」

と言つた。

つーかこいつ仕事の時キャラ変わりすぎだろ。めっちゃクールなんだけど。

「ま、と言うわけで君のブロマイドとか貰えればなーと。」

「ふざけてんですか。」

つい先ほどまで命がかかつていたとは思えないぐだぐだ感である。

なんだファンクラブつて。

「でもまあ、私も君のことは凄いって思つてる。普通出来ないよ。他人と自分で他人

選ぶとか。」

「…」

「戦場で、弾に当たったとか、罠にかかつたとか、誰かをかばつてとかならまだ、割り切れるかも知れない。その特殊な環境で、覚悟の上ならね。でも、選べと言われたらどうかな？毒入りの紅茶を差し出されて、飲んでも飲まなくとも良いよと言われたら、果たして選べるかな？ましてや、家族や恋人でもない人達と自分の命を選べなんて。」

雪ノ下さんの目が、真っ直ぐ俺を見つめる。

「普通無理だよ。冷静になつて考えて、それでも自分の命を差し出すなんて。漫画とかなら良くある話だけど。現実に、一個しかない命をだよ？そんなの、人間の考えじゃない。」

俺は、何も言わない。

「もし選べたとしても。ああ、やつぱり待つて！って言うに決まってる。君が選んだのは、それぐらい異常な選択なんだよ。」

「君は命の重さつて言うのを分かつてる。命を平等に見てる。100対1なら、100の方が重いよねって。」

「簡単に、選んだわけじゃないです。」

「それはそうだよ。君には妹がいるもんね。それで、悩んで、悩んで、そしてやつぱり他人を選んだ。結果的に君は助かつたけど、彼が居なかつたら君は死んでたよね。あつ

けなく、吹き飛んでた。』

「…何が言いたいんですか？」

「君は化け物だよ。人間に限りなく似た、でも別の生き物。人類に、たまーに現れる。何かを変えてしまう異常な精神性を持った者。私は、君が怖い。だから、今のうちに取り入つておこうかなと。」

俺が、化け物。

言いたい放題だな。

ああ、だがしつくりくる。

最悪の禁忌、同族殺しの化け物。

自分すら例外じやない。

確かに。まともじや、ないかも知れないな。

「だから君はー」

「そのへんにしろ。雪ノ下陽乃」

じん、と、材木座の声が響く。

「用は済んだろ。もう時間も遅い、無駄話に付き合うほど我也この男も余裕はないぞ。」

ちら、と、雪ノ下さんが横目で材木座を見て、はあと息を吐く。

「ま、そうだね。妹さんも心配してるだろうし。解散しようか。」

と言つて、彼女は荷物をまとめ始める。

「結局何も頼まなかつたなー。」

雪ノ下さんが残念そうに席を立とうとする。

「一つ聞かせて下さい。雪ノ下は、あいつはー」

「雪乃ちゃんは何も関わつてないよ。こんな世界、あの子が耐えられると思う?」
彼女はつまらなさそうに、口を尖らせて言つた。

「…あなたは、なんでこんな仕事に?」

「…質問は一つでしょ。」

そして今度こそ、雪ノ下さんは個室を出た。

↓

すっかり暗い外に出ると、材木座がとなりに立つていた。

「送ろうか?」

「…いや、いい。」

「…か、と言つて材木座は車へ行こうとする。

と、材木座が足を止める。

「ああ、八幡よ。我的仕事用の連絡先だ、何かあれば呼ぶがいい。」

ふふんと無駄に厚い胸をかるく張り、材木座が名刺を差し出す。

俺はそれを受け取りながら、ふと、質問をした。

「なあ、お前生きる意味ってなんだと思う？」

また背を向け掛けかけていた材木座は、ぴたつと動きを止める。

「生きることそのものだ。」

吐き捨てる様に、材木座はそう言つた。

「意味なんぞ問うだけ無駄だとも。そんなものは、生にしがみつくための理由付けに過ぎん。」

「…そりやあ、なんとも救いのねえ話だな。」

ふ、と材木座は笑つて俺の目を見る。

鋭く、隙のない、人殺しの目が俺を見据える。

「神など創世直後から休暇に入つたさ。”勝手にやつてくれ”、とな。」

そう言つて、材木座は髪を風に靡かせながら歩いて行つた。

ほんと、キャラ変わりすぎだろ。

今度は店から雪ノ下さんが出てきた。中で店員と話していたらしい。

「あ、影喰らい君、これ名刺ね。デートのお誘いならいつでもいいよ。」

「…仕事して下さい。」

ぶーとむくれたように雪ノ下さんはとぼとぼと車に歩いて行つた。

俺の前には、雪ノ下さんが呼んでくれたタクシーがある。お代はもう払つているらし
い、どうやつてかしらんが。

俺も帰るか。今日は、疲れた。

（

無駄に広い車内で、私はあの影喰らいの事を考えていた。

戦力としてはハイレベル、恐らく店内の護衛もバレていただろう。
隙があれば殺す事も考えたが、ま、そんなものないよね。

「ここでいい。」

と、助手席に乗つっていた材木座君が車を止めさせる。

「ここでいいの？ 家まで送るよ？ 運転手が。」

（こ）は材木座君の家からまだ距離があるはずだ。しかも人通りも少ない。
「冗談だろう。妙な噂が立つては困る。」
と言つて、材木座君が車を出る。

まあ、そうだね。

私は窓を開けて頭を出す。

「そ、ならまあまた依頼が来たら連絡するね。」

「ああ。それと雪ノ下陽乃。」

彼が私を呼び止め、眼鏡を外し、冷たい目で私を見る。

「あの男に余計な真似をするようなら、俺が敵対するとだけ言っておく。」
びり、と。空気が震える、そうそう見ることなどない。本物の人殺しの殺氣。

「…うん、覚えとくよ。」

それを聞いた彼は、何も言わず歩いて行つた。

前を見ると、運転手が緊張したように手を震わせていた。

「出して。」

車が進み始める。彼の姿は、もう無かつた。

「最近のガキは怖いなあ。」

私はニヤつきながら。今後の事を考え始めた。

不穩

日曜、昼↑重要

すやすや、と寝息を立てていた俺は、何者かに無慈悲にも布団を奪われた衝撃で目を覚ました。

「お兄ちゃん！ いつまで寝てるの！ プリキュア終わっちゃったよ？」
「…………なん、だと……？」

! ?
なんだと?

寝すぎた。この俺が、プリキュアを見逃した…？

俺が起き抜けに突き付けられた絶望に震えて いると、今度こそ小町は呆れたように息を吐く。

「もー。ひーるー。うーはーん! できてるから、下にきてね?」

「…おう。」

ぱたぱたと歩いて行つた小町の背中を見送り。のそり、と体を起こす。

ああ、
何時もの休田の朝

昨日のことなぞ夢だつたんじやないかとさえ思う。

ベットから体を出し、のたのたとドアへ向かう。

「鍵かけてんだけどなあ」

開け放しのドアについた鍵穴に目をやると、ピッキングツールでついたらしい傷がついている。

最近部屋のものがなくなることが何度もあり、一応鍵をかけるようになつたのだが。次の日の朝、小町はいつもの様に俺を起こしにきた。

念のため、鍵はどうしたんだと聞いたら。

「小町以外の人用の鍵なんですよ?」

と言われた。それから3度ほど鍵を変えたが、効果が無かつたので、小町の言つていたように、空き巣対策として使つている。

いつの間に我がスイートエンジエルシスターはピッキングなんて物騒な物覚えたんだろう。

誰の影響だろうか。

.....。

わかんないから大志とか言うガキの所為にしどこう。

おのれ大志

まあ、中に見られて困るものは置いていないからいいけどね。うん。
部屋を出てリビングに向かうと、テーブルに小町が座つていた。

食卓には湯気の立つ食事が並んでいる。

多すぎず、少なすぎない。起きて直ぐの胃には優しい和食だ。
もう小町が嫁でいいんじやないかな。だめか。

「いただきます。」

「めしあがれっ！」

小町がにこにこと俺が食べる様を見ている。

小町は必ず俺が食べてから自分の食事に手をつける。妻か。

テレビの電源を入れ、ニュースをつける。

—「先日品川駅で起きたテロについて、未だに瓦礫からの救助は終わっておらず。少なくとも十数名が未だ救助されていない状況です。この件について、”爆弾魔”と名乗るテロ組織から犯行声明があり、警察は詳しい関連性について調査中です。」—

最初に流れるのは、昨日のテロの事だつた。どれだけチャンネルを変えても、その話題で持ちきりだつた。

「もー、せつかく一人でご飯食べてるんだからテレビは消してよー。」

と、小町はいつも通りの口調で、口を尖らせる。

「…ああ、悪い。」

ピツ、とテレビを消す。

品川駅で起きたテロ。

俺は何も出来てなどいない。

死者はおよそ400人、負傷者は300人。再開の目処は立たず、実行犯は見つかっていない。

あの加恋とか言つた女を捕まえた所で何も解決していない。あいつらは変わらず、暴力を、暴挙を繰り返すだろう。

”ファンタジー”が言つていたラバーズもまだ全員は出てきていない。
そもそも、あいつらの最終目的はなんだ？

ただ活動を活発にしているだけか？

いや、違う。あいつらは何かを狙つている。俺を狙つているという事をほのめかして
いたが、どうにもそれだけだとは思えない。
間違いなく、何か目的がある。

俺達の見えない所で、何かを進めている。

「お兄ちゃん？どうかした？」

と、小町が俺の顔を心配そうに覗き込む。食べる手が止まっていたらしい。

「いや、すまんなんでもない。」

そしてまた俺は食べ物を口に運ぶ。

小町は、大切な家族だ。小町以上のものなんて、少なくとも今の俺は持つてない。だが俺は、小町を見捨てようとした。独りに、しようとした。我ながら馬鹿な判断だつたと思う。結果的には助かつたが、材木座がいなければ俺は死んでいた。

それでも俺は、何度あの場面に戻つても同じ判断をすると思う。

我ながら度し難い病気だと思う。

「君は化け物だよ。」

ふと、雪ノ下さんの言葉を思い出す。

ああ、全くもつてその通り。

全くもつて度し難い。愚かで、傲慢な化け物。

他人を救おうなんて、おごまかしい考えに取り憑かれている。

「ごちそうさん。」

「はい。お粗末様でした。」

食器を下げて、部屋に戻る。

ベットに横になつて、天井を眺めた。

そこであの男、”凶弾”について考察する。

材木座義輝。

A & A のスナイパー、”凶弾”と言えば、話には聞いたことがある。

そもそも狙撃というのは、戦場においてとても大きな役割を持つ。

銃撃戦が主な近代の戦闘では、どこから狙っているのかがわからない狙撃手というのは、小火器部隊では天敵なのだ。

いや、全ての部隊において狙撃と言うのは脅威である。

狙撃のバディ一組で対戦車分隊と同等の危険度を持つとも言われる狙撃手は、たつた数発の弾丸で部隊の戦力を大幅に削ることができる。

部隊の指揮者が唐突に後頭部から頭の中身を根こそぎ噴き出したら、士気はだだ下がりだ。また、下手な装甲の車両では前進すらできず、回避行動も取りにくいので、必死に隠れなければならなくなる。

だがその危険度をゆえに、戦場では最も狙われやすいと言える。

だからこそ、狙撃手に最も必要な技能とは、精密な射撃より、偽装や工作なのだ。

そもそも、狙撃銃では最大でも3キロぐらいがせいぜいだ。これは戦術的には長いとは言えない。近距離と言つてもいい。

見つかったり、場所が悟られた時点で、野砲の標的となる。

”凶弾”は、その全てを完璧にこなすと言う。

ただの一度も外したことがないと言われる射撃技術。

狙撃以外にも、工作、地雷などで敵の戦力を減殺する。

また諜報、偵察に関しても優秀で、正確に部隊の指揮者を消していく。

そしてその姿を見られたこともない。（だからこそ高校生だなどとバレなかつたのだろう。）

その上市街地。特にビル群によつて風の影響が出やすい中でも正確に当て、その上痕跡を悟らせない。

考えうる中で、最高ランクの狙撃兵だろう。

もし俺が材木座と戦えば。

もちろん近接戦では俺に分があるが、

俺が先に発見されれば、まず間違いなく勝てない。

材木座は、たつた一人で戦況を変えうるレベルの兵士だ。

そこまで考えたところで、ヴヴヴ、と俺の携帯が震える。

私用の方だ。新着メッセージ一件。

”はろはろー。昨日はお疲れ様。大変だつたみたいだね！今日はゆつくり休みな
よー。”

：海老名さんか。

あの人もいまいち敵か味方かわからぬ。

俺にヒントを寄越したことといい、標的となつてゐるビルまでのこのこ出てきたこと
といい。

まさか、由比ヶ浜達を守るためにか？

：あの人のことも、良く考えなければならぬな。

一応、返信する。

”ああ、昨日は助かつた。”

すると直ぐに既読がついた。

”気にしないでよー。面白いものも観れたしねー。あ、雪ノ下陽乃とは会つた？”
…この人は。

”あんたどこまで知つてんだ。”

”仕事で会うことがあつたんだよ。お得意様なんだよね。”

真つ黒じやねえか、あの魔王。

”あの人も、ラバーズか？”

”違うよ？凶弾も違う。A & A 自体ラバーズはあんまりいない。君のとこは酷いけ
どね。”

やつぱりそうなのかよ。俺ステアにいて大丈夫なのか？転職しようかな…。

”まつ、明日学校で話そーザー。”

”ああ、”

と言つて、会話は切れた。

はあ、なんかこう、距離ちけえんだよあの人。勘違いしちやうだろ。告白してOKもらつて家に連れ込まれて輪切りにされるまである。輪切りにされちやうのかよ。いや、まあされそุดな。

くそ、考えても仕方ない。今は忠告通り、寝ておくか。

（

：おやあ？出られるんですか？

ああ、加恋も捕まつたらしいしな。いい加減私も絡ませてもらおう。そうですか。例の件は因みに？

仕事はきつちりやつてるさ、貴様に心配されることはない。全く、何故私がちまちま工作活動なぞ…。お前こそもう出らんのか。

わたくしはここぞと言うとき、ベストなタイミングで再登場しますとも。いやあ私が生きてるとなつたら、彼は驚くでしょうなあ。サプライズこそ私の生きる希望！相変わらず気持ち悪いな。”ファンタジー”。

手厳しいですね。しかし、彼の一閃の感覚はまだこの首に残っています。ああ、もう一度彼と戦いたい！

貴様にはもう出番は回つてこないと思うがな。

はあー。そうですよねえ。禁忌の愛も酷な事をなさる。彼にはあまりにもあんまりなシナリオだ。

へえ、哀れんでるのか。なら影喰らいについたらどうだ？

ふむ、まあ、勝ち目は薄ですが、それもまた面白そうだ。

：軽薄なやつだ。

それが私ですので。

：あの男は私が殺す。これから起ころう事を思えば、そちらの方が影喰らいのためだろう。

まあ、そうかもしませんねえ。”大戦の救世主役”など、少年が背負うにはあまりに重すぎる。

：ふん。

貴方はどちらにつくのです？

殺すと言っているだろう。

殺せなかつたらですよ。

は
あ。
さ
あ
な。

総武高校人殺しサークルのみなさん

月曜 昼

「いやー。お疲れ様、比企谷君。ギリギリだつたね。」

「…ああ。」

ベストプレイス、である。

俺の聖域は最早、誰かしらが俺に用件がある時に訪れる都合のいい窓口と成り果てた。

「恋の爆弾魔はどうなつたの?」

「…話せない。」

「えー。ま、そりやそつか。」

俺がもさもさと、小町からの愛妹弁当を食べている隣で、海老名さんはもくもくとパンを食べている。

「三浦達は?」

「適当に理由つけて出てきた。君に話もあつたし…」
と、海老名さんはそこで言葉を切つて振り向く。

俺も同じく、後ろから歩いてくる男の気配に目をやつた。

「我を呼びつけるとはいひ度胸だ、ラバーズ。我の会社にとつても敵であることは分かつてゐるのだろう?」

材木座義輝。世界最高レベルの狙撃手が立っていた。

「まあまあ。材木座君もこんなところでやりあつたりしないでしょ? 座りなよ。同じ学校の、数少ない殺し屋仲間として、悪党トーグでもしようよ。」

「笑えんな。」

材木座は感情のない目で海老名さんを見下ろす。

海老名さんは材木座からの殺氣を肩をすくめて受け流し、食べ終わつたパンの袋をビニール袋に入れて立ち上がる。

「さて、こうしてみるとそれなりにすごい面子だね。」

「類は友を呼ぶ、であるな。」

「友じやねえけどな。」

噂に名高い殺し屋達。その三人が同じ学校で、しかも敵対組織に所属している。

胃が痛い。まあ、これまで何も起きてこなかつたから、こいつらもわざわざ騒ぎを起こす事もないだろう。

「我が貴様の連絡に応えたのは、質問に答えてもらう為だ。ラバーズの目的は何だ。」

材木座が海老名さんに話を振る。

「へえ？ 試しに言つてみてよ。どんな質問もはぐらかしてあげよう。」

「殺すぞ。」

「冗談冗談。それで？」

「貴様らの、ラバーズの目的は何だ。一体何が狙いだ。」

それは、まさに俺の疑問もある。

目的が分からぬ。

もともと大した目的のある組織ではないのだろうが、今になつていきなり集まつてきたのはなぜだ？

「うーん。それは、答えてオッケーなのかなあ。」

「吐かせる術もあるぞ？」

「私がそんなので口を割ると思う？」

「貴様が行けなかつた去年の冬コミの戦利品をやろう。我的知り合いのサークルに紹介してやつてもいい。」

「……………脅迫されたことにすればいつか。」

おい。
おい。

いいのかよそれで。つーかお前ら仲いいんじゃねえか。

「えーと、目的だつけ。まあ、私も詳しく知ってるわけじや無いんだけど。」

「はあ？」

「そつち方面は”ファンタジー”とかがやつてたみたいだからね。あとは加恋か。」「…お前が知つてる範囲では？」

「さあ、なんか人類を救済するとか。」

「は？」

人類を、救済する？

「なんだそれ。」

「よくわかんないって。でもとりあえずそういう目的があるってこと。」

「救うつて、具体的には。」

「わたしにもわかんないよ。ただ禁忌の愛が考える救いつてやつがあるらしくて。」

「…それが日本でテロ起こしたりする事とどう繋がる。」

「うん。どうもね。”人類全員が生きることにのみ必死になるように” つてゆう救いらしい。」

「はあ？」

「まあ、そうなるよね。曰く、人類が成長を忘れて、発展を忘れて、発明を忘れて、競

争を望まず、優位を望まず、劣等を知らず、つまり敗北を知らず。敵なんていない、争う意味を忘れてしまうようにする事らしい。」

「そんなこと、どうやつて。」

「そうなるように人類を追い込むらしい。人類みんなが疲弊して、絶望して、救いを求めるようになつた時。禁忌の愛が用意した救世主に救わせるつて。」

救世主？いや、最近どつかで聞いた気がする。

「その、救世主というのは。」

「うん。ラバーズは、比企谷八幡をその時の救世主にするつもりらしい。」

「うん。いや、意味がわからん。救世主とか、人類を追い込むとか、そんな漫画じやあるまいし。」

「私にもよくわかんないよ。主要なラバーズ以外には比企谷八幡にちよつかいをかけると面白いってきただけだし。その救世主がどういうものなのかもわかんない。でも、これから禁忌の愛が何か大きい事を起こして、それに比企谷君を巻き込ませるつて言うのはわかる。」

「ふざけんな。なんで俺を。」

「さあね。でも済崎つて言うのはそもそも昔いた救世主から始まつたんでしょ？どつかで目をつけられたんじやない？」

ここで、その名前が出てくるのか。

まさか、師匠も知つてたのか？

「済崎つて、なんなんだ。」

「我が仕事で聞く分には、済崎とは”単独で戦況を覆すことの出来る戦力”、と。
「私もそんな感じ。戦場に一人済崎がいると、それだけで勝敗が大体決まるとか。」

師匠から聞いている他の済崎は。先ず俺の師匠の済崎啓介。”神格”済崎精神。”
決定打”済崎最護。”最年長”済崎慶覚。ほかにも何人かいるらしいが、すくなくとも
その三人は覚えると。

俺自身も仕事で話ぐらいは聞く。会つてはいけない人間達だと。

「ああ、前に済崎精神なら見たことがある。中東で”明ける湖”というテロ集団と交
戦した時に居たな。1キロの距離で撃つた我的弾を日本刀で弾いた上に、その後全速力
でこちらに走つてきたので撤退した。」

「…よく生きてたね。」

「ああ、正直もうダメかと思つた。」

なんか材木座のキヤラ取れてきたな。やつぱこつちが素なのか。

「まあ、あとね。救世主は君の他にもう一人いるらしい。」

「いや、俺は救世主じゃ無いんだけど。」

「まあね。んで、そのもう一人は外国人。国籍は分かんないけど白い髪に白い肌つて言う事しかわかんない。」

「ふむ。二人の救世主？。死海文書か？」

「なんだそりや。」

「聖書の古いやつみたいなのらしいね。世界が終わりかけた時に二人の救世主が現れて、なんか色々救うみたいな。」

「ざつくりしてんな。」

「興味ないからね。でも古い予言とかが実現すると、それだけで人は信じてしまうから、禁忌の愛はそれも狙つてるのかも。」

「いよいよもつて眉唾な話になつて来た。」

しかし、ここで問題なのは、”人類を追い込む”と言うところだ。

「禁忌の愛はどうやって人類を追い込む？」

「だから、具体的にどうこうはわからないってば。でもまあ。現代でそう言う大惨事みたいなのは限られてくるよね。地震とか噴火とか。」

「そんなもの人間では起こせんだろう。」

「うん、でも人だけが起こせるものもある。」
「いや、一つだけある。」

人間の悪意が、善意が、正義が引き起こすもの。

「…まさか…、いや、そんな事を本当に…。」

「そう。史上最も人間を殺して来たもの、」

「戦争。禁忌の愛は世界大戦を起こそうとしてるんだと思う。」

放課後、奉仕部。

「ヒツキー？ どしたのぼーつとして。」

「目が腐つてるを通り越して虚無よ。」

二人の声を遠くに聞きながら、俺は海老名さん達との会話を思い出していた。
というより、ずっと考えている。

世界大戦なんて正気じやない。

一般社会でそんな事を言えば、ただの冗談。誰もが笑い、相手にせず、最近の若者なら起こればいいねなんて言うかも知れない。

だが俺には、俺達には冗談では済まない。俺達は戦争がいつでも起こりうるもので、

誰でもその引き金になりえて、むしろ起きていい状態こそ奇跡に近いと知っている。

そして、その戦争の末に、誰もが戦う事を忘てしまう理想郷が来るなど。

ありえない。

「ねえ、ほんとに大丈夫?」

「…ああ、いや、ちょっとと考え事してた。」

「はあ、何をそこまで思いつめているの? 酷い顔よ。」

話すわけにはいかない。だが、こいつらだつて何か備えをしておくべきではないだろうか。俺が止められる保証もない。そうなつた時こいつらは。

「…お前ら、もしもいつか…」

と、俺が二人にある問いかけをしようとした時、がらつと部室のドアが開く。

「お前たち。先日のテロを受けて関東圏の学校で下校時間を早めるようにという通達があつた。依頼も来ないようだし帰る支度をしなさい。」

「先生、ノックを…、いえ、東京で起きたテロで千葉まで?」

「ああ、私も詳しくは知らんが特に海岸に面した千葉や神奈川でそういう事にするらしい。実際、先の爆弾テロは千葉市の方でも狙われていたらしい。」

「え…。」

「まあ、そういう事だ。今週末からの夏休みに規制に入るかはまだ分からんが、流石にそこまでにはならんだろう。」

「えー。」

「ならんだろうと言つたろ。さあ、早く帰りなさい。まだ日が長いとはいえたな輩が

出らんとは限らん。」

「そうですか…。分かりました。今日は終わりにしましよう。」

「そうだねー。あ、ヒツキーさつき何言おうとしたの？」

「…いや、別に。」

そうして、結局二人には何も言えずに、その日の奉仕部は解散となつた。

それから雪ノ下が鍵を返却して、軽い雑談の後、雪ノ下と由比ヶ浜は一人で帰り、俺も自転車を取りに行つていた。

「あれ？ 先輩も帰りなんですかー？」

「うげえ」

「うげえはひどいですよー？」

そこで会つたのは最近噂の可愛いあの子、実態は靈長類最強の女子高生一色いろはである。

「弟子にはとらねえつて。」

「えー。」

ぶー、と一色が頬を膨らませる。可愛いがあざといので弟子には取らない。いや、そういう判断基準では無いけど。

こいつはあれ以来、事あるごとに弟子にしてくれと言つてくる。そろそろ諦めてほし
い。

「お前部活は？」

「なんかテロがどうのこうので早上がりです。」

成る程、本当に全部の部活が対象なのか。

「テロねえ。」

「はい。」

これからも彼奴らは何かを起こしてくるだろうか。戦争のトリガーなんて想像がつかない。

「……。」

すると、一色からの視線を感じた。なんか無言でこっちを見ている。

「なんだよ。」

「…もしかして先輩がテロリストですか？」

「!?

なんだこいついきなり何言つてんだまじで。

「…は？」

「いや、なんかこう、上手く言えないんですけど、そういう、アウトローって言うか。

一線越えた人みたいな雰囲気があるんですよね。あの格闘術しかり、どう見てもカタギじやないっていうか。」

「…何言つてんだお前。あれか？高校生にもなつて中二病か？やめとけお前どつかの材木さんみたいな体型になるぞ？」

「いや、材木さんが誰かわかんないですけど、っていうか中二は失礼です。でもぶつちやけ人一人ぐらい殺した事ありますよね？」

くつ、と腰をまげ、俺の顔を覗き込んでくる。

「…逆に俺が人殺しだつたらなんだ？人の殺し方を教えてくださいとか言うつもりか？」

「…わたしは、人を殺さずに生きていいけるでしようか。」

「は？」

「偶に思うんです。日本に生まれたとは言え、私は、私のそこそこ長いであろう人生を、誰も殺さずに終えることが出来るんでしょうか。」

「…じゃあ、お前は”いつか人を殺すかも知れないので人の殺し方を教えてくださいって言うのか？”

すると、一色は少しだけ目を伏せた。

「…そう言うわけでは無いです。…でも、きっとそれが必要になる日は来る気がする

んです。先輩なら…、わかるんじやないですか？」

一色は躊躇いかがちに俺の目を見る。確証のない、理由も分からぬ感覚に駆られて
いる。そんな目だった。

「…ともかく、お前になんかを教える気はねえ。最近は物騒だから早く帰れ。」

「あつ！ それならせめて送つてくださいよー！」

「それは断る」

「それも！ でしよう！ もー！」

わーわーと後ろで騒ぐ一色を置いて、俺は自転車を漕ぎだした。

自転車の速度を落とし、ゆっくりと家に向かう。

一色の持つものは一級品だ。どこを探してもそう見えない素質を持っている。

恐らくスポーツ格闘なら大体の種目で世界を狙えるだろう。

あいつを始めて見てから、一瞬も隙を見たことがない。

本人も無意識に、常に戦闘状態なのだ。そしてそれを誰にも悟らせない。完全な自然

体。

あいつが戦闘術を覚えたら。

それはきっと、殺し屋の世界でも一目置かれる存在になるだろう。

だが、だからこそあいつにそれを教える訳にはいかない。

あいつは良くも悪くも純粹だ。

こんな鉄火場では、きっと自分を保てないだろう。

ブブ、と携帯が震える。

内ポケットから仕事用の携帯を取り出し、画面に恵理さんとと出でるのを確認して電話に出る。

「はい。」

「お疲れ様です、影喰らいさん。」

「今度は何が？」

「はい。あの爆弾魔が目を覚ました。かなり負担の大きい手術でしたが。直ぐに起きたらしく。」

「…あいつはなんて？」

「身柄は警察にあるのですが、どうも貴方を呼んで欲しいと。貴方にだけ情報を話すと。」

「あの女が、俺に？」

「あの、無理していかなくとも大丈夫だと…。」

「いえ、行きます。場所を教えてください。」

「⋮分かりました。一応場所のデータを送りますが、場所を指定して下されば迎えが
行きます。」

「ありがとうございます。」

「いえ、⋮その。気をしつかり持つてください。」

「⋮はい。」

そして電話が切れ、俺は従業員に電話をかけた。

加恋の世界

夕方、もう6時を回ったろうか、俺は迎えで来た従業員の車の中でぼーっと外を見ていた。

「影喰らい、もうすぐ着くぞ。にしても物好きな奴だな。わざわざあのサイコ女に逢いに行くとは。ひよつとしてタイプだったか?」

「…んなわけねえだろ。情報が必要なだけだ。」

「はっはっ。でもまあへりであんたをキヤツチするのは楽しかったな。久々に興奮したぜ。」

「…てめえもサイコじやねえか。」

「まあ否定はしとかねえ。ちつとぐらいネジ飛んでねえと今時やつていけねえよ。俺はまあ会社の経費でいい車乗り回せりゃあ満足だ。どうもどんぱちやんのは性に合わん。」

「…そうかよ。」

そして着いたのは普通の病院、に見えるが自衛隊がやつてる病院だ。

「…の地下だ、受付で”山田美奈子に面会を”と言え。一字一句違わずにな。」

俺はぶつきらぼうに礼を言つて車を出る。

受付にいるどことなく迷彩があしらわれた看護衣？を着た男に従業員から教えられた合言葉を言う。

男はちらりと俺の顔を見て席を立つた。

「こちらです。」

連れられて奥にある扉に向かう。

この男が席を立つて直ぐに違う人間が受付についた、どうやら俺の為だけにいた受付らしい。ご苦労様です。

そこまで長くない通路の真ん中ぐらいにある扉の両サイドに戦闘服に戦闘帽、着剣小銃をつれ銃をした自衛官と拳銃を腰につけた警察官が立っていた。

「あの部屋です。」

そう言つた男は数歩下がつて俺達が入つてきた扉の前で不動の姿勢を取つた。

俺は軽く会釈をして前へ進む。

扉の前に行くと自衛官と警察官が休めの姿勢から一気に気をつけをし、敬礼をしてきた。

俺は若干面食らいながらへろへろの敬礼を返し、二人より先に下ろす。それを確認し

た二人は敬礼を下ろし、警察官の方が部屋の鍵を出す。

そして自衛官の方が俺に忠告する。

「中にはいます。一応仕切りはありますがお気をつけてください。」

ちら、と自衛官の胸につけられたワッペン、徽章を見る。
ダイヤモンドと月桂樹、落下傘と翼、更に格闘まである。

筋金入りの自衛官だ。

「…頼りにします。」

ふ、と自衛官は軽く笑つて会釈をした。

扉を開け、中に入る。

「お久しぶり、と言うほどの時間も無かつたですか。よく来てくださいました。比企
谷八幡さん。」

その女は、新堂加恋は椅子にゆつたりと身を沈め、そこに居た。
ぱたぱたと彼女の左腕から伸びた点滴が液を垂らす。

「…それで、何を話したい。」

「挨拶ぐらい返してくれてもいいじゃないですか。」

「ちょっと自分を省みた方がいいんじゃねえのか。」

「あら、あら、手厳しい。」

まあ仕方がないでしよう、と女は薄く笑つて目を閉じる。

少し顔色が悪く、頬もこけた様に見えるが、頭はしつかりしてゐるらしい。いや、もとからしつかりしてねえけど。
ぱつと見そは見えないが、こいつの腹は爆弾を摘出した為かなり大きな傷があるはずだ。意識が戻つたとしても、こうして椅子に座り、誰かと話すことなど出来ないはずだ。

そもそも、あの時屋上にいた時も、爆弾を入れる為に開いた傷もあつただろう。
やはり、壊れた精神力だ。

「ええと、何から話しましよう。そうですね、まず私達の目的とかでしようか。」「世界大戦を起こす事、か？」

「おや？ ああ、蜘蛛ちゃんですか？ あの子はあなたにつくのですかね。」

からからと、さも可笑しそうに彼女は笑う。

「ああ、私の楽しみを取られてしまいました。貴方がどんな反応をするのか見たかつたのですが。」

「俺の反応？ 何言つてんだこいつら、だ。」

「ふふ。まあ、たしかに荒唐無稽、にわかには信じがたいお話でしよう。戦争を起こそ、だなんて。」

「…」

「でも貴方はちゃんと分かっているでしよう？そもそも戦争が起きていない時期なんてわずかなもの、皆無と言つてもいいかも知れません。今この瞬間も、世界のどこかで銃声が鳴り響き、罪のある人も無い人も区別なく殺されている。私達はただ、その世界各地にある小さな火種を繋げて大きくするに過ぎないのです。」

「…具体的に、どうやつて。」

「それは言えません。というより私もあまり知りません。私達でさえ、部分的に教えられただけ、全てのシナリオを知つてているのは禁忌の愛だけでしよう。」「そいつは何処にいるんだ。」

「知るわけないじや無いですか。女性つて事しか分かりません。しかしラバーズは二次大戦の頃ぐらいに出来て、禁忌の愛はずつと生きているらしいので高齢だとは思うのですが、声を聞く限りでは30手前と言つたところでした。代わりに喋る人が居るのか、それとも不老なのか。」

「不老だなんてあり得るわけねえだろ」

「さて、どうでしよう。人間不可能なんてないかも知れませんよ？」

「…おちよくつてんのか？」

「…」

「いいえ？」

何が楽しいんだこいつ。

「さて、今日貴方に教えたかったのはこの住所です。」

そう言つて女はしきりの下の空いたところからメモを差し出す。

書かれていたのは住所だつた。

「…これは？」

『太刀屋』のアジトです。頭領の久留間蛭都はなかなかの武人で、ラバーズの抗争や暗殺で幾度となく貢献してきたグループです。』

「…何が狙いだ？」

怪しいなんてもんじやない。いきなり殊勝に情報を開示してきた、必ず狙いがある。こいつはそういう奴だ。

「えー。今日はそもそもそういう話でしたでしょ？まあ裏があることは否定しませんが、しつかり心の準備をしていくといいでしよう。」

「数と装備は？」

「せいぜい2、30名、全員刀を持って居るそうです。』

「…またイロモノか…。」

「私のこと言つてます？」

「まともな殺し屋はいねーんだろうな。」

「んー、銀杏ちゃんはまともですよ? 真面目ですし、依頼は必ずこなしますし、ただほぼ素手で戦うんですけど。」

「あ、と溜息を吐く。ラバーズは脳味噌溶けた連中の集まりだな。」

「貴方も十分変態的な戦い方をすると想いますが。」

「は?」

何を言つてゐるんだこいつは。

女は何とも言えない顔をしている。

「まあ、良いです。太刀屋はともかく、銀杏ちゃんは手強いですよ? ファンタジーよりは強いでしょう。頑張つて下さいね?」

「…情報、感謝する。本当かどうかはまだわからんが。」

「ふふ。あ! 忘れてました。私の弟子が貴方に会いたがつてました。もし見かけたらお願ひしますね? 可愛い女の子ですよ?」

「…くそつたれ。」

ふ、と女は顔を和らげる。

「本当は、とてもとても悔しいです。あと、少しだつたのに。」

「…。」

「雪ノ下陽乃が干渉してくるとは思つていました。しかし出来ることなどないと思つていた。爆弾の位置も、私の確保も、誰か一人が私の前に現れた時点で成功するはずだつた。貴方に私の場所が分かるように、いくつか手を打つていて、蜘蛛ちゃんが貴方に場所を教えた。私を狙撃できる場所ではないと思つていた。あの条件で当てられるものなどいないと。しかし、まさかあの凶弾が貴方の友人だとは。」

「お前、…どこでそれを。」

「ふふ、ふふふふ。くやしいなあ。あとちょっとだつたのになあ。やつぱり私は失敗する前提だつたんだなあ。」

女は目を虚ろにして虚空を見上げる。

「貴方一人なら御しきれた。でも、貴方の人生に勝てなかつた。貴方が意図せず掴んだ他人との絆に勝てなかつた。貴方の戦いに手を貸したいと思う人間がいた。ちよつと考えれば分かつたはずなのに。」

「…買いかぶりすぎだ。あんなのは…」

「偶然? 彼の目的はビルを守ることで、貴方はついでだつたと? いいえ、貴方ですよ。彼を呼んだのは。殺し屋は、軍人じやない。仲間や、同志に持つべき想いは、殺し屋には重荷になる。裏切ることが、裏切られることが前提の世界で。それでも。彼は知られても良いと、貴方を助けに来た。貴方には死んでもらつた方が楽なのに。多少ビルの屋

上が吹き飛ぼうが、A & Aにはそれを差し引いても貴方のことが邪魔だつたはずなのに。私も、そこにつけこむはずだつた。」

「…。」

「ああ、人はなんて素晴らしいんでしょうか。ごみ溜めみたいな私達の世界に、そんなものが残つているんですから。」

「…お前は、なんで爆弾魔なんかになつたんだ。」

女は驚いたように目を見開き、そして顔からゆっくりと表情を消した。

「…どこにでもいる、只のクズの家に産まれました。ありがちな不幸を背負つて生きていきました。でも、その頃はそれが不幸だなんて思つてはいなかつたんです。ただ、死にたかつた。この世にある何もかもが、あの家と地続きだと思うと、何もかも汚れて見えたんです。あんなものと共存していられる世界が、大嫌いでした。」

「きつと死んだ先は美しい。この世界の素敵なところを切り取つて、削り取つて死にたかつた。私が唯一幸せだつた、気絶した後に見る、あの夢の中を生きていたかつたんです。」

女は、新堂加恋は、夢の世界に恋焦がれた爆弾魔は、疲れたような、諦めたような、そんな表情をしていた。

きっとそれこそが、本当の、新堂加恋なのだろう。世界に産み落とされたことを憎み、

ぼろぼろになりながら生きてきた、一人の人間の貌だつた。

「…貴方が居れば、私は何か違う未来を生きていたのですかね…。」

新堂加恋は、そう言つて哀しそうに笑つた。

俺は目を閉じて、静かに息を吸う。

「…さあな、だが多分、お前の隣りに、独りがもう一人増えてただけだと思うぞ。」
女はまた、驚いたように目を開く。

そして、ふつと笑つた。

「ああ、それは心強いですね。」

病院を出て、従業員の迎えの車に乗り、適當な雑談があつて俺は近所についた。

「じゃ、また仕事でな。」

「…ああ。」

ばたん、とクラウンの扉を閉めて出る。

近所と言つても家から3キロぐらい離れたコンビニだ、少し歩くが仕方ない。

ふー、と息を吐いてコンビニに入る。適当に何か買って帰ろう。

もう8時を過ぎている。しかしこの時間ならまだ小町が待つてているかもしれない、プリンでも買って帰つてやろう。お兄ちゃん的にポイント高い。

「おや？ 比企谷か？」

知つた声に体がびくつと跳ねそうになるのをなんとか抑える。

「…平塚先生。」

「ああ。どうしたこんな時間に。全く、下校時間が早くなつたからとぶらぶらしていたら部活が休止している意味がないだろう？」

「…すんません。」

車から降りたところは見られてない、か？

因みにこここのコンビニはカメラの角度の関係で端つこの方は映らないのでこのコンビニをちよくちよく降りるところに使つていて。優しい。

いや、そんなこと言つている場合では無い。

「平塚先生は何でここに？ いつもここでしたつけ。」

「見廻りだよ。全く、若手とはいえ女子にこんなことさせんかね。」

と言いながらもぱつと見てわかるぐらいやる気に満ちている。

やつぱこうゆう展開好きなんですね。あと女子つて年齢じや何でもありません。ズオツと平塚先生から殺氣が出てきたので思考を停止する。怖い。

「何でもいいが、早く帰りなさい。ああ、送ろうか？」

「いえ、そこまでは大丈夫っす。自分狙う物好きもないでしようし。」

「遠慮することはないぞ？」

「ほんとに大丈夫ですよ。先生も忙しいでしようし。」

「もう、と先生は考え込む。

「まあ、たしかに夏休み明けの修学旅行に向けて仕事はあるが……。」

「あれ、修学旅行つてそんなに早かつたでしたっけ。」

「今年は旅行先の兼ね合いで早くしか取れなかつたのだよ。ま、楽しみにしていなさい。」

先生は気を付けろよ、と軽く手を振つて帰つて言つた。コンビニ袋からはちらつとジャンプが見えた。

あの人は……。

俺も買い物を済ませ帰路につく。

少し、あの爆弾魔を思い出していた。

あいつの、その望みを完全に否定する気にはなれなかつた。

この世界を生きて、その裏路地を見て、それでも臆面もなく世界は希望で満たされていふと言えるほど俺は盲目ではない。

あの雨の中の小屋の様に、醜い場所と此処は地続きだ、先生も、雪ノ下も、由比ヶ浜やあのうるさい後輩も、同じ世界で同じ空気を吸つてゐる。

それが、たまらなく憎い。

だが、俺にはどうすることもできない。俺は何かを変えられるほど強くない。せめて、あいつらと醜い場所を切り分けていくしか、ないのだ。

人気の無い、そそこそでかい公園に入る。此処を通つて少しすれば家だ。だが、その前にする事がある。

「誰だ、あんた。」

俺は目の前の女に声をかける。

そいつはいつのまにかそこにいて、真っ直ぐに俺を見ていた。
すらつとした女性にしては高めの身長に、きっちりとしたスーツを着ている。顔は暗く
いうえに少し俯いているようでよく見えないが、輪郭は美しく、多分美人だと思う。
「何、もう加恋あたりから聞いているだろう？」

よく響くハスキーナ声。女はゆっくり顔を上げる。

釣り上がり気味で、気の強そうな目に、鼻筋が通つたモデルの様な女だつた。
「銀杏だな。」

「ああ、そうだ。悪いんだがな、影喰らい、お前自身の為にも、お前は此処で死んでお
いた方が良い。」

「どいつもこいつも勝手ばつかだな。」

女はすつ、と構える。

本当に武器らしいものは見えない。しかし脚と腕にプレートを入れているらしい。
「まあ、別に会話を楽しむ趣味はないし。とりあえず死ね。」
ゆるり、と、女が踏み込んだ。